

令和 5 年度 10 月 県会長挨拶

9 月に新しい体制の幕が切って落とされ、順調なスタートを切り、進み出しています。年度始め式でお伝えしましたが、まず、単会長を先頭に役職者の皆さまが「与える」ために動いて下さっていることを、心からありがたく感謝申し上げます。また、今の期間は結果よりプロセス、数字よりストーリーを重視する期間であると考えております。結果を求めることは経営者として当然のことです。しかし、決して結果至上主義に走ることが無いよう気を付けていただきたいと存じます。

ところで、書店の本棚には自己啓発じみた営業に関するコーナーが幅をきかせています。カリスマ性のある著者たちが、「客にノーと言わせない」、「魔法のトーク」、「最強フレーズ」、「〇〇するだけで売れる」といった楽をして儲かる方法を伝授すると書いた内容が大半です。しかしこれらはその実、著者の自慢話や武勇伝のようなものであり、読者のためにはならないどころか、これからの時代にはそぐわないものが多いです。つまりミスマッチなのです。

皆さんも既に気づかれていますと思いますが、私たちには、その様なものは不要です。そんなことを求めていると今の市場から置き去りにされると気が付かなければなりません。私は倫理法人会活動、特に役職者の活動においては、「売り込まずに勝つ方法」を体感していただき、それを自社で応用することによって「勝てる組織」の構築に役立てていただきたいと思います。

9 月度は必須委員会の MS 委員会・朝礼委員会の活動のスタートに力を入れて参りました。MS 委員会は 11 月 19 日に MS 活性化研修を、朝礼委員会は 12 月 11 日に朝礼マスター研修を開催することが決定しました。

この 10 月は受付システム、ゲストのフォロー、新メンバーメンタリングシステム等、加瀬副幹事長を中心に少しばかり新しいことを手掛けていただいております。

これは事業でいうと、新規顧客対応というよりは、既存顧客対応にあたります。

右肩上がりの人口増加時代には次々に新規顧客が目の前に現れてくれましたが、今の日本は人口減少時代であり新規顧客の見込みはそれほど期待できません。作れば売れ、売れば儲かる時代は終わりました。人口減少時代に不可欠な視点は、リピーター獲得戦略であります。

そのためには顧客のフォローは必要不可欠。フォローしか売上を増大させる方法はないと言っても過言ではありません。

この考えを皆様に学んで頂けるよう、粘り強くお伝えしていきたいと存じます。皆様方の組織に定着するまでには時間が必要だとは存じますが、必ず結果が出ると信じて倫理法人会活動をしていただきたくお願い申し上げます。



令和 5 年度 11 月 県会長挨拶

2022 年 10 月 20 日 伊賀市倫理法人会にて講話

11 月を迎え、秋晴れの好天気とともに山の紅葉が見ごろを迎えております。

会員皆様の事業、倫理に対する思いも情熱の秋色に染まっていることでしょう。

さて、早速ですが皆様に問いたいことがあります。

「量と質を比較したとき、より重要なのはどちらか？」ということです。

この二項対立の問いに多くの方は「量」だと答えます。それはなぜでしょうか。

「量は可視的であり、質は不可視的であるから」だと私は考えます。

質を追求することは数値として目に見えにくいので、継続することは非常に忍耐のいる困難なことです。しかし「顧客や製品をたくさん作ってたくさん儲ける」という、量に関しては結果が目に見えてすぐに出来ます。ですから、ある意味、安易、安直であるとも言えます。

この人口減少時代の日本で今、私たちが本当にすべきことは、量を追うのではなく、質を高めることだと私は常々考えています。この場合、自己完結型の完璧を目指すことと勘違いされがちですが、実際はニーズに沿った高い質を目指すことが肝要です。

では、質の向上を目指すためには何を行えばよいのでしょうか。予想される一番多いであろう答えは「社員のレベルアップ」です。しかし、よく考えてみてください。それは極めて他力本願、他人任せであります。

「質は何によって高まるのか。」

私の答えは、「事前準備をきちんと行うこと」に尽きます。経験則からいって、事前準備にまさる質の向上はないと考えております。

種明かしをしてしまえば、質か量、どちらかを選べばどちらかを失うものではありません。質は量によって担保されます。

では、この場合の量とは何か。それは事前準備の反復練習です。事前準備をコツコツやり続ける事が質を高めるための唯一の方法です。今日から試してみてください。1 回目より 2 回目、2 回目より 3 回目と、事前準備を重ねるごとに事業の質は高くなることでしょう。

さて、次にお話したいことは、「結果よりもプロセスを大事」にしてほしいということです。

プロセスを無視し、結果だけしか見ないのは、ある意味成り行き任せの運だのみであります。

更に言えば、結果主義は、次に何も残すことはできません。また、過度な結果主義は働く人たちを疲弊させるとも言われています。

ですから、皆様方にはぜひとも「プロセスの標準化」に取り組んでいただきたいのです。プロセスの標準化とは、作業と品質を一定化する取り組みで、いつでも誰でも効率よく作業ができるよう整備することです。すべての業務プロセスを俯瞰し把握して流れを作ってください。それが無いことには、結果に対してフィードバックしようにも何が良かったか、どこを改善すべきか検討することができません。今後、MS 会場のチラシ等の配布も標準化が必要だと考えておりますのでそこで「プロセスの標準化」を体感していただきたいと思います。

さらに、「結果よりもプロセスを重視すること」に加えて、「結果（数字至上主義）よりも

ストーリーを重視すること」も大切にしていきたいと考えています。理由は、営業とはストーリー化することによりその内実が可視化されるものだからです。営業において、一般的には「数値目標」、「達成に向けた計画」、「最悪のケース」の3点がどんな営業を行うときにも必ず考えておくべきストーリーであると言われています。1点目の「数値目標」のストーリーを倫理に当てはめて見てみましょう。

「役員の出席率上昇」→「会員の出席率上昇」→「ゲスト数増加」→「入会者数増加」

と、このように考えられます。「数値目標」は、理想を追いかけすぎてしまうと現実とかけ離れ、次の「達成に向けた計画」のストーリー化が困難になるので注意が必要です。

また、もっと細かく言いますと、上の例において最終目標である「入会者数増加」のストーリーは、

「興味を持ってもらう」→「試しに来てもらう」→「入会を『決断』してもらう」となります。このようにストーリー化することでよりひとつひとつの項目に対して具体的な戦略が立てられると思いませんか。

最後に、私が一番強くお願いしたいことをお話しします。それは、隠れた功労者に注目してほしいということです。データとして、「チーム運営上スタープレイヤーは不要である」ということが既に分かっています。目立つ者、脚光を浴びている者が人々の心に影響力を持つとは限らないのです。それよりも、目立たず、注目もされないけれど静かに物事に貢献している人を見つけ、その影響力を評価していただきたいのです。そういう人は、皆の本音を引き出したり、まだ見ぬ競合に着目したりと極めて重要なことを行なってくれています。

まとめますと、

- ①事前準備を徹底して量より質の向上をめざすこと
- ②プロセスの標準化を目指し結果よりプロセスを大事にしていくこと
- ③目標までの道程をストーリー化し数字単体の結果よりもそのストーリーを重視すること
- ④見えない活躍をしてくれている人にスポットを当てること

この4点を軸に11月度も様々な挑戦をしていただきたいと望んでいます。各項目について詳しく知りたい方はいつでもご連絡ください。

夜寒の折、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。



令和5年度12月 県会長挨拶

今年も年の瀬がいよいよ迫ってきました。木枯らしの音を聞き、本格的な冬将軍の到来ですね。令和5年度も早3ヶ月が過ぎました。会社の決算で言えば四半期に当たります。奈良県倫理法人会においても順調な滑り出しが出来ているのは、全役職者、そして会員の皆様のおかげだと心より感謝しています。特に三単会長さんには期の始まる前の6月より大阪府倫理法人会の「スター会長養成塾」にて毎月特訓を受けていただき、その成果を発揮され大変に素晴らしい運営でスタートできたことに謝意を表します。

私はこの度、11月5日と6日に東京での倫理法人会全国7万社大会に参加してきました。全国から1000人を超える代表者の方々の集まりで、大変な盛り上がりであり、勉強になりました。大会に参加できているありがたさをひしひしと感じ、この経験をしっかりと奈良県にも反映させていきたいと意気込んでいます。また11月19日には奈良県モーニングセミナー活性化研修を開催しました。多くの会員の皆様にご参加いただき、基礎からモーニングセミナーの運営を徹底的に学びあったことは、今後運営の質の向上に役立つと信じています。

これら2つの行事において痛切に感じたことがあります。それは、物事に取り組む際に「何のために＝WHY」を意識化することが重要であるということです。人々の多くは、「何を（WHAT）、どのように（HOW）」、つまり「やりかた（HOW TO）」を学びたい、見つけたいと躍起になっています。

しかし、最も大切なことは「なぜ？何のためにするのか？（WHY）」という、「在り方」を考え発見することなのです。観察してみてください。人々の1つの動作には必ず「WHY」があります。かの有名なライト兄弟は技術者も予算も少なかったけれど空を飛ぶことに成功しました。ライト兄弟にあった「WHY」は「世界を変える」という夢であり大義でありました。皆様のお客様を例に出すと、そういった「WHY」に惹かれて、物を購入したり、賛同したりするのです。

加えて、MS マニュアルの中にも一つ一つ隠れた要素（hidden elements）が存在します。それが何かを一つ一つ吟味していくことが重要であり、皆さんの事業を成功させる鍵となるでしょう。例えば「どうやってやるかウジウジ考える（HOW TO）」よりは、「やるしかないと心に決め行動する（HAVE TO）」、役を「義務的」に行うのではなく「喜んで！」と率先して行い、働くことで「傍を楽にする」。「ホスピタリティ」を受ける側でなく提供する側に徹すること等があげられます。ために、レストランに行った際、お客さんお立場でなくお店の方、特に給仕する方の視点で見てみて下さい。新しい要素に築くことができると思います。一回で気づけなかったらほかの場でも同様に振舞ってみてください。感性が研ぎ澄まされ、きっと気づきを得られることでしょう。

日本も高度成長、バブル期、貿易の自由化などを経て、グローバリズムの急速な進行の中で、経済効率が最優先の社会の真ただ中にいます。そんな中で学校教育や社会で求められていることは、「外で遊べ」「みんな仲良く」「授業では積極的に発言」「積極的に自己主張」「個性を大事に」などのどちらかというと単純系外向型人間です。私は、「それだけが本当に大事なのか？」と疑問に思うことがあります。比べるものではありませんが、確かに個性は大事です。でも人とぶつかるような個性の押し付けは良くないのではないかと。個性を保ちつつ適応能力や協調性も兼ね合わせ発揮することがより大事であると考えます。自分がただ、どういう人間であるかを闇雲に100回アピールするよりも、それをどう活

かせるかを建設的に伝えられることの方がもっともっと大事だと考えます。
人口減少社会に入った今の日本、今までの右肩上がりの人口増加時代での成功体験はいまやレガシーと言っても過言ではないでしょう。
私は仕事柄「人口減少社会」という時代の変化を常にかけてきました。そして令和の時代、まさにこの時代（と時代を作る価値観）は平成半ばと比べ大幅に変化しています。世界においても、今まで通りでは日本は取り残され先進国ですらなくなるのかもしれませんが。今後の世界の中でも日本がリーダーシップを発揮するためには、今こそ「何のために（WHY）」という「在り方」を実践する時代にすでに突入していると考えています。

倫理法人会のご存じの通り「実践の場」です。その実践の場でしっかりと「WHY」と「あり方」を身に付けてください。始めは上手くいなくてもいい。へこたれずに実践を重ねることできっと皆さんの会社も成長していくと確信しています。

今年も残りわずか。悔いのないように実践してまいりましょう。
本年もお世話になり、ありがとうございました。来年も変わらぬご指導をくださいますようお願いいたします。
皆様、素晴らしい新年をお迎えください。



令和 5 年度 1 月 県会長挨拶

皆様、新年あけましておめでとうございます。

2023 年を迎え、皆様の事業、そしてご自身の成長を新たな気持ちで誓願していらっしゃるものと存じます。新しい年が皆様にとって実りの多い 1 年であることをご祈念申し上げます。

旧年中は急激な円安や生活必需品の値上げ、海外情勢の変化など多数の困難がありました。また、長きに渡り新型コロナウイルスのため、私たちの間に物理的に距離ができました。共に切磋琢磨する仲間が近くにいないと感じ、活動のモチベーションを維持することが難しかった方もいらっしゃるかと存じます。本年は新型コロナウイルスも落ち着きをみせ、共に集う機会が多くなると楽しみにしております。

また、昨年 9 月より奈良県倫理法人会の会長を拝命し、早 4 ヶ月が過ぎました。その間、皆様方のおかげで本当に順調に進んできましたことを感謝申し上げます。今年は更に皆様方のお役に立てるよう励んで参りますので何なりとお申し付けください。

さて、新年にあたり今年の奈良県倫理法人会活動にかける想いを申し上げます。昨年も機会があるたびに人材育成については何度も申し上げてきましたが、今年は「更なる人づくり」を大きな目標と考えております。組織という城を作るのは、人であります。人材無くしては何事も成しえることができません。「地球倫理の推進」と「日本創生」に対する高い使命感と強い絆で各種活動を展開する。そのためには、奈良県倫理法人会においてもまずは幹部役員の資質の向上、そして人材発掘と人材育成が必要です。

各会社において、開発すべき「人材」とは何かと申しますと、内部顧客に当たります。従業員及び取引業者さんなど最も身近にいてくれる方々を指します。

「水魚の交わり」と言うように、日ごろから互いを大切にしあって仕事をしていれば、これほど強い絆で結ばれた内部顧客はありません。反対に「舟中敵国」、これは「君主が徳を修めなければ、味方も敵になるということ」を意味しますが、手強い敵になるのもまた味方であることを忘れてはなりません。

もっと小さな集団である家族で言えば、夫婦になると常に万人幸福の葉で学んでいる通りです。戦後にこの倫理活動が始まったのも、丸山敏雄先生が「夫婦道」という論文を寄稿したところから始まっています。

今、多くの会社で従業員の質の問題で悩んでいる事業主が多いです、特に人数不足、人が定着しないといった悩みをよく聞きます。この問題についても倫理法人会活動の実践の中で必ず解決できます。改めて強調しますと、まず、倫理法人会の組織において「人づくり」に成功すること。すると必ず各社においても従業員や、取引先業者の育成に成功すると強く確信しています。

話は変わりますが、奈良県倫理法人会においては 3 つの単位倫理法人会（単会）が活動中です。それぞれの単会においての特徴や事情もこの数ヶ月で違ってきています。この年明けからはそれぞれの単会の事情に合わせた後方支援の仕方を模索していく予定です。

特に今期注力をしているモーニングセミナーにおいては、近隣他府県から、毎月選りすぐりの講師を奈良県倫理法人会から配当し、モーニングセミナーにおいて各単会の課題解決に役立つよう尽力して参ります。モーニングセミナーは倫理法人会活動の基本中の基本です。私はそのモーニングセミナーに集中して運営していただけるお手伝いをして参ります。ぜひお近くの会場のモーニングセミナーを一度体験して頂きたくお願い申し上げます。セミナーの中で必ず倫理法人会の活動を通じて自社が良くなるきっかけを得ることができる

とご理解頂けると存じます。少しでも琴線に触れたのであれば思い切ってご入会されることをおすすめ致します。

今年は、癸卯。卯の刻は午前5時から7時までの2時間をさします。まさに、日の出とともに1日が始まるモーニングセミナーの時間帯です。

2023年は、私たち全員がウサギの飛躍力で一段と目標達成して参りましょう！

本年もどうぞよろしく申し上げます。



令和5年度2月 県会長挨拶

寒気の中にも早春の息吹が感じられる頃となりましたが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。
この2月で倫理法人会はちょうど半期が終わります。つきましては、奈良県倫理法人会は全力でスパートをかけたいと思います。

振り返りますと、普及目標において奈良市倫理法人会は早々に12月末、1年の目標数字を達成しました。1月6日には奈良県倫理法人会会員の皆様と橿原神宮に新年の合同参拝をし、決意を新たにしました。そして、更なる飛躍のための目標数字を設定し、気持ちの良い再スタートを切っています。

また、飛鳥倫理法人会、大和まほろば倫理法人会においては今期の一番の課題である「人づくり」に邁進し、盛り上がりを見せています。

さて、先月1月27日から29日、富士高原研修所にて開催された経営者倫理セミナーに奈良県から16名が参加しました。各人が自分の課題に向き合うだけでなく、他府県から来た初対面の方々とチームを組み、課題に取り組むことによってチームワークの重要性を体感できる素晴らしく勉強になるセミナーでした。

私は今回で4年連続、4回目の参加でしたが、毎年新たな気付きが得られるのは自分が成長したり、またおかれている環境が変化していたりするからでしょう。1年目は奈良市のモーニングセミナー委員長、2年目は奈良県の普及拡大委員長、3年目は奈良県の幹事長、そして今年は奈良県の会長として受講したのですが、倫理法人会活動に於いてだけでも立場が変われば学び、吸収できることが全く変わると感じます。ましてや自社の社業や家庭に於いて考えても大きく成長している自分に気付かされます。このセミナーは奈良県から参加できるのは年に一度の絶好の機会となっています。このセミナーで得られるものは間違いなく社業の発展に結びつきますので、皆さんも来年度はぜひ積極的にご参加されることを心よりおすすめいたします。

ところで私は年が明けて、1月2日と3日は箱根駅伝を母校である東海大学を気にしながら過ごすことが恒例となっています。今年は箱根駅伝を通して強く感じたことがありました。それは、「10位以内でゴールする」という来年のシード権争いについてです。2日目の復路は毎年のように優勝争いと共に来年のシード権争いが目玉です。自分のためではなく「来年のチームのために精一杯頑張る」ということ。それは私たちの社業や生活で言えば「後から来る者のために」ひいては自分亡き後の「未来のために」苦労や我慢や努力をするということです。

農耕民族であった私たちの先祖は、子、孫の代のために田を耕して種を準備していました。

そして、歴史上のある時点までは後から来る者のために海や山、川をきれいにしておくことを良しとしていました。

私は子供の頃、祖父に育てられました。そのときに強く言われたことを今でも覚えています。「親が喜ぶような生き方をし、親が喜ぶような人間になりなさい」ということです。その意味は、自分の命を親のために使うこと。そして一族、地域、美しい国日本のために使うことでした。

祖父は、徴兵され戦争の真只中を生きた自分の周囲の親族や友人たちが、それぞれに自分の命の使い方を考えたときに、あとから来る人、つまり次の世代の日本のために使っていると認識していたのだと思います。

戦後の教育は日教組の影響もあり、皆が皆あたかも天皇陛下のために自らの意に反して、または洗脳されて戦死していったというストーリーが覇権的になりました。中でも私の出身である三重県の日教組（三教組）は長きにわたり組織率 100%、知事になるにも「三教組の支援が無ければならない」と言われたくらいに力があり、私が受けた教育にも色濃くその思想が染みわたっていました。

確かに、そのような人たちもいたと思います。しかしそれは一つの側面でしかありません。実際に戦争を経験した祖父が、「親のため」そして「後から来る者のため」にその命を使っていた多くの人々を目の当たりにしているということも現実の一側面なのです。

倫理の教えでもこの「命のバトンもしくは襷」の話はよく出ます。先の例から「自分の命は決して自分だけのものではない」ということがよくわかります。戦後の教育ではこの一番大事なものが見落とされているのではないだろうかと考えることがしばしばあります。血を分けてくれた両親、さらには祖先があって今の自分があるわけですから、自分のために命をつかうのではなく、報恩感謝の思いをもって親や先祖のために命を使っていきたい。さらに、この先の日本、人類、地球のためにもこの命をささげたいと考えます。命を使うと書いて「使命」といいます。私たち人類の使命は上の代から下の代までに命の襷をつなぐことなのでしょう。その考えを基本としたならば、わざわざ「利他、利他」と騒ぎ立てなくとも全ての行動が自然に利他的になります。

最後になりましたが、倫理法人会には、学校教育では得ることができなかった根源的な人間教育という学びがあります。さらに切磋琢磨する仲間もいます。この学びは宗教や哲学と言った観念的なものではなく、実行・行動することが先で後から理屈がついてくるという真理の実践です。ぜひ一度モーニングセミナーにご参加くださいますようお願い申し上げます。

三寒四温の時節柄、どうかご自愛専一にてますますのご活躍をお祈り申し上げます。



令和 5 年度 3 月 県会長挨拶

「奈良の春は東大寺のお水取りから」と言われているように、最近は暖かい日も増え、日毎に春を感じる今日この頃、日ごろ倫理での活動を真摯に取り組んでいる皆様の事業にも春が訪れているのではないのでしょうか。

さて、今月の 21 日は春分の日です。この日は現在でも宮中祭祀の一つとして春季皇霊祭が行われており、戦前から今日に渡って日本において大変重要な日となっています。この日を挟んだ時期がお彼岸であり、昔からお墓参りなど先祖を供養することが習わしとなっています。2023 年の春のお彼岸は、3 月 18 日（土）が彼岸入り、3 月 21 日（火）の春分の日が中日で、3 月 24 日（金）が彼岸明けとなっています。皆様方の命を繋ぎ、今も何処かから見守って下さるご先祖様のお墓参りをしてぜひ感謝の気持ちを伝えていただきたい。

私は長年「Let's お墓参り」と称したお墓参り推進プロジェクトを続けております。仕事柄、様々なご家族を見ていますが、先祖供養を欠かさない人は不思議と豊かな人が多いです。また、お墓で先祖と向き合う中で自らの魂が研ぎ澄まされと感じています。さらに、お墓はまるでパワースポットのような働きをすることが多くあり、気運が高まったり心が元気になったりするのです。まだ疑心暗鬼の方も多いと思いますが、ぜひ、お墓参りをして皆さんの目で確認していただきたくお願い申し上げます。

ここで少し時間を戻しまして、2 月 14 日、15 日に大阪にて開催された近畿方面会についてご報告いたします。近畿 2 府 4 県の代表者 150 名強が集まり、年度前半の振り返りと後半への決意を新たにしました。奈良県からも中間目標達成単会である奈良市倫理法人会が代表で取り組みを発表し、また私自身も奈良県会長としてこの半年の活動を報告致しました。

方面会 2 日目の朝は、今年度倫理研究所全体で取り組んでいる「人は鏡の実践」の報告があり大変勉強になりました。これを奈良県に持ち帰って皆様の実践に落とし込んでいく必要性を強く感じました。自分自身は常々「人は鏡の実践」に真摯に取り組んでいるつもりではありますが、心新たに皆様と共に学び、実践していきたいと考えています。

さて、とうとう 3 月後半戦、年度末の戦いが始まりましたが皆様いかがでしょうか。この半年間、様々な行事を行う中で私共の初志である「モーニングセミナーに一点集中する」という目標が徐々にブレてしまっていると感じます。再度 MS 委員会と共に質の高いモーニングセミナーを開催できるよう問題点を洗い出し改善していきます。

普及目標に関して申しますと、期末目標に向けてのスタートを切り、各単会それぞれの目標に向けて、あらゆる方法を模索し取り組んでいただいています。

アインシュタインは「同じことを繰り返して、違う結果を期待するのは愚の骨頂である。」と言いました。今までとは異なる結果を得たいのであれば、新しい行動や習慣を選択する必要がありますということです。さらに言えば「得る結果」を変えるためには、先ずその因となる自らが「与えるもの」を変えなければなりません。

「与えるもの」を変えることに関して私の経験を述べますと、自分にとって都合の良い楽な選択ではなく、都合が悪く困難な選択をしたときにこそ、良い結果を得ることができました。様々な先人の自著伝などに目を通すと同じような事例が多いように感じます。とにかく、思考停止することなく価値創造し新しいものを「与える」ことを考えましょう。具体的には今後「人は鏡の実践」の中で共に学んで参りたいと思います。

ところで、「人間は食べたもので身体ができ、聞いた言葉で心ができている」と言われています。同様に、「未来は自分が発した言葉でできる」とも言われます。ですから自分が

発する言葉にはよくよく気をつけなくてはなりません。

私はしばしば「足りないこと」にばかり固執している人の言葉を聞くことがあります。例えば「お金持ちになりたい」、「幸せになりたい」というのが代表例です。「お金持ちになりたい」という人は「お金がない」と言っているのと同義です。同様に「幸せになりたい」という人は「幸せではない」と言っていることになります。

「足りないこと」を意識すればするほど、様々な欠落のある現実がその人に押し寄せてきます。

皆さんも日頃使っていると思われる「……たいと思います」という言葉があります。口癖のようになっていたので無意識だと推察しますが、私はそれを聞くたびに「この人は上手いかないのではないか？」と考えざるをえません。その気持ちは「……たい」、「……と思う」だけに過ぎないのでしょうか。意欲や熱意、そして実行力が言葉からは感じ取ることができません。

発する言葉、口癖は自分が長年にわたって形成した習慣です。つまり自分自身に責任があるということです。今日から日常的に意識して自らの習慣を変えるよう取り組んでみてください。意識化することで思考と行動が変化します。始めは難しいかもしれませんが、しかし努力を惜しまず自分を律することができれば、目標へ邁進できる習慣がきっと身につきます。そして今日から明日、明日から未来へと、人生が向上していくきっかけになります。

と申しまして、このことに限らずセミナーなどで良い話を聞いても、なかなか実行に移せない方も多いと感じています。言葉遣いや整理整頓、「今すぐに取り組むのが最善であると分かっているにも関わらず先延ばしをしてしまう」という悪習慣があるからです。今すぐに取り組むことが最善であるならば、そうするのが当たり前のことです。しかし「当たり前のことを当たり前のこととして、ささっとやってのける、徹底する」というのは案外難しいことです。四字熟語では凡事徹底と言いますが、トップをはじめ末端まで凡事徹底されているところは会社の基礎力が強いと言えるでしょう。

実は私自身、先延ばしを克服できるようになったのはここ数年、倫理の実践を通してなのです。特に後始末の実践の影響が大きかったと感じています。先延ばしをすると一時的には気が楽になりますが、それは単なる逃避であり、長い目で見ると良いことは一つもありません。先延ばしすることが当たり前になってしまうと、人は遠くにある目標や成果よりも、その場に安住し今ここだけの満足感を優先してしまいます。

先延ばしする人の心の奥底には「明日はやる気が出るに違いない」という根拠のない言い訳がましい考えがあります。逃げるために、ただそう思いたいだけなのかもしれません。誰にも未来のことなんて絶対にわかりません。たとえ自分のことであっても分からないのが未来なのです。

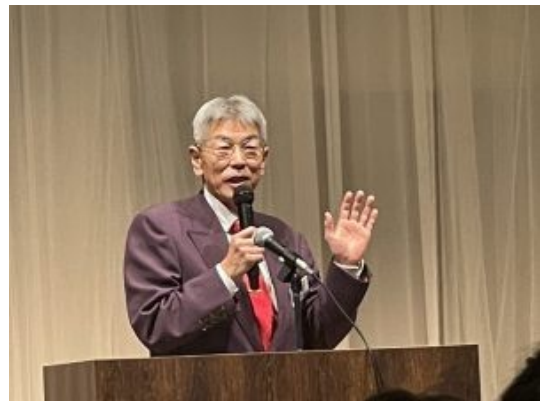
何度もお話をしていますが、私はアルコール依存症です。アルコール依存症は病気であり、たとえ今は一滴も飲まなくても死ぬまで病気との付き合いが続きます。お酒を断ちたいと思いながら「最後の一杯だけ」と自分に言い訳をしてつい手を伸ばしてしまった経験は何度もあります。しかし、その「最後の一杯」は決して最後にはならないのです。私達人間は今の感情がずっと続くと思ひ込む性質があります。「最後の一杯だけ」は長く続きません。「最後の一杯」の後にまたアルコールを見たら、同じようにまた「最後の一杯だけ」の言い訳が出て飲んでしまうのです。

私はこの経験を通して、感情云々の前に行動することが非常に重要だと気づきました。お酒でいうならば「今、目の前にあるお酒を絶対飲まない」という行動です。そう決めてしまうのです。「自分の次の瞬間の感情など予測できるわけがない」と割り切ってしまう。それは「自分を過信しないこと」でもあります。「下手な考え休むに似たり」とはよく言ったもので、そういう心持ちでまずは行動することが大切です。

皆様のなかで「行動したいけれど、やる気がない」という方は「やる気」の概念を横において、やる気のないままで良いので、まずは何か行動してください。一旦動いてしまえば弾みが付きます。そのうち勢いが出てきて、その勢いが先ほど横に置いたあなたのやる気に火をつけてくれます。

人は何かに取り掛かる条件として、やる気や意欲が必要だと考えがちですが、実は全く反対であることがほとんどなのです。やる気や意欲は行動した後から湧いてくるものです。このことを理解し習慣や行動を変えることが皆様にとって大切なことなのではないでしょうか。

倫理法人会では、今日お話しした内容、その他小手先の技術ではない真に役立つ哲理や実践について常に勉強をしています。ご興味ご関心を持って下さった方はぜひ一度お気軽にモーニングセミナーへお越しください。



令和 5 年度 4 月 県会長挨拶

あれほど厳しかった寒さも徐々にゆるみはじめ、いつの間にか春爛漫の季節となり、皆様方も賑やかな春の訪れを謳歌していることと存じます。桜の開花情報を見ると平年より早いところが多くなっていて、記録的に早いところもでているとのこと。

私は3月24日の東京出張時に靖国神社参拝をして参りましたが、境内の桜はほぼ満開でした。靖国神社には東京都の桜の開花状況の基準となる「標本木」があります。1966年ごろに標本木として選定されたそのソメイヨシノの枝ぶりはたいしたもの、周囲には支柱が立てられていました。

私は祖父に「咲いた桜を見て喜ぶなら、咲かせた根の恩を知れ」と教えてもらった記憶があります。似た言葉で「二月の雪、三月の風、四月の雨が美しい五月をつくる」という言葉もあります。(イギリスでは「三月の風と四月の驟雨が五月の花をもたらす」と言うそうです。)

これらの言葉から導き出される教えは、現代人が不可視的な物を感じる力が欠如していることを表しているように思われます。現代的是可視性優位、かつ自分の知っている、本当はごく一部にすぎないことを全てだと勘違いしていることが多くあります。自分では知覚できていない事象、物事の根や陰の部分、そして心という最も見えにくく大切な部分を忘れてはならないということでしょう。倫理法人会では将にその心について学び続ける貴重な場であります。

さて、私は毎回口を酸っぱくして申し上げておりますが、人口減少社会を迎えた日本では順張りの考え方が通じないことは明確です。順張りとは投資手法の一種で、上昇か下落のどちらか一方に相場が動いている場合に利益を伸ばしやすくなります。戦後から高度経済成長期を経てバブル期に至るまで日本国民は右肩上がりの考え方に向かって突き進みました。実に順張り一色です。

しかしバブル崩壊を経験し、理屈の上では順張り思考の元では最早先細りどころか生き残ることも危ういと理解していても、行動が伴いません。

つまり順張り幻想は未だ消えていないのです。将に負の遺産であります。

今必要なのは順張りに対して逆張りの発想です。投資手法で言うと相場がどんどん下落する中で、あえて買いを入れる、もしくは相場がどんどん上昇する中で、あえて売り建てる取引を言います。つまり、逆転の発想をするということです。

例えば人間は未来志向なので何年後には何がどうなって…と、現在から未来へ向かって物を考えがちです。しかし逆張りの発想をするとどうでしょう。時を戻して「江戸時代の商人は一体どのようなことを考えて、いかなる行動をしていたのか?」と文献を辿ってみると、彼らの思想や行動様式から学ぶものがあるはず。温故知新の精神を持ち続けるようにしてください。

また逆張り思考は、私がいつも強調している「得ることよりも与えることが先行する」に始まる様々な例に当てはまります。例えば、

①「やる気が出たら動くのではなく、動くからやる気が出る。」

そもそも「やる気」とは何者であるかご存じでしょうか。やる気は、脳から分泌される報酬系ホルモンのドーパミンという神経伝達物質がもたらすことが実証されています。ドーパミンが上手く伝達できなければやる気は出ません。では、どうすればドーパミンがでるのか。一番簡単な方法は、「1分だけやってみる」ことです。やり始めると脳の側坐核という部分からドーパミンがでます。つまり、やり始めることによってやる気が出るのです。

②「準備ができたから動くのではなく、動きながら準備をする」

こちら、前出のドーパミンの話と深い関わりがあります。「段取り8割」とはよく言ったもので、事前準備で成否が大きく変わることは多々あり、準備自体が大切であることは否

定しません。しかし準備が大切であることと「準備ができたならやる」と言うことは大きな違いがあります。準備が駄目なのではなく「準備ができたならやる」と言っていることが良くないのです。「準備ができたならやる」と言うことは、「準備ができないとやらない」ということ。いつまでもやり始めない自分を正当化しているのです。そんな言い訳をしている暇があればどんな小さなことでもいいからすぐにやり始めへ見ましょう。そのこと自体が準備を急速に進めていきます。

③「金持ちならお金を使うのではなく、お金を使うから金持ちになる」

日本人の多くの人は節約に興味があり、お金を貯めること自体が目的化しています。それでは次の進展はありません。金持ちになる人のお金の使い方を見ると、特に貯まった大きなお金の使い方が違います。例えばお金は貯めたままにせず、どんどん使います。その例が自己投資や大切な人、社会のためへお金を使うことです。そうすれば人間力がアップし、人との親交が深まり、信頼もされ、もっと仕事を得ることができます。そしてさらにお金を稼ぐことができるようになります。使い方さえ間違わなければ、お金は使えば使うほど増えるのです。

④「学ぶから発信できるのではなく、発信するから学べる」

多くの方は学んだこと（インプット）を発信する（アウトプット）という順に囚われていますが、実は、学びはアウトプット（発信）こそが肝要です。現代はテクノロジーの進化により効率的にインプットできるようになりましたが、アウトプットによる学びは発展途上にあります。アウトプットというと「完璧な状態で成果を出す」と考える人が多くハードルが高いと捉えられがちです。しかし、本当のアウトプットは完璧である必要はなく、その場その場で具体的な行動に落とし込んでいきます。また、他者からのフィードバックされることを前提とし自分の考えを発信します。アウトプットの場面は、実務や商談の場、SNS など多様にあります。ぜひどんな些細なことでもアウトプットし、そこから得られる学びや気づきを活かし、更なるブラッシュアップを行ってより質の高いアウトカム（成果・結果）を獲得していきましょう。

⑤「楽しいから笑っているのではなく、笑っているから楽しくなる。」

これまでに様々な例を挙げてきましたが、これこそが世の中で成功している人の逆張り法則とも言えるでしょう。この名言は心理学者ウィリアム・ジェームズの言葉であり、「アズイフの法則」とも呼ばれます。as if とは「～のように」という意味の熟語です。つまり「あたかも～な様に振る舞えば、～になれる」という話です。このポジティブ思考は、怒りの感情にも応用できます。怒りを鎮めるために「穏やかな人」のように笑顔で振る舞う。すると笑顔では人は怒ったり怒鳴ったりできませんから怒りを鎮めることができます。幸福になるため「アズイフ」の法則を今この瞬間に試してください。楽しくなるために、笑いましょう。笑顔を作るのが苦手な人は「今日も幸せだなあ」と口に出して言うてみてはいかがでしょうか。幸せそう、楽しそうな人がやっていそうなことを真似してみることは生産的なことなのです。

このような世間一般の人から逆張りばかりだと一蹴されそうな考えからこそ、次の道が開けてくると私は信じて実践しています。これらの例は、倫理法人会で学ぶ「心の部分」や「根の部分」に直結する成功法則です。現在、様々な苦難に直面されている方、モヤモヤとした形のない不安に悩まれている方こそ、一緒に学んでいただきたいです。どうか、少しの勇気が大きな一歩になることを信じてください。

花冷えの日もございますので、くれぐれもお体にご留意なされ、さらに皆様方がご活躍されますことをご祈念申し上げます。



令和5年度5月 県会長挨拶

風薫る五月となりましたが、皆様には天候同様ご清祥なる日々をお送りのこととお喜び申し上げます。4月29日土曜よりゴールデンウィークに突入しました。事業を行われている皆様の中にはお仕事の方も多く、「ゴールデンウィークなんて羨ましい限り」だと思っている方もいらっしゃることでしょう。

しかし、ゴールデンウィークが休みの人、楽しんでいる人々は、仕事をしている皆様のおかげで素晴らしいゴールデンウィークを過ごせているのです。この大型連休を支えている皆様の見えない貢献が素晴らしいことは間違いありません。社会貢献しているのだと誇りを胸に頑張ってください。

また、多くの場所で渋滞が起こり、電車は大混雑、観光地はごった返しています。コロナも、マスクは自由化されたものの完全収束したわけではありません。国内外情勢も含め、何もかもがややこしく、そして予測が難しく大変な時期ですが、慌てず無事故で乗り切りましょう。

さて、去る4月28、29日は大分へ行って参りました。実は年に1度は講演会等の仕事で大分に行っています。この機会を活用し、大分県の倫理法人会の単会のMSに参加して参りました。今回は今年の富士研で同じチームだった倫友の講話があったのでどうしても応援したかったのです。というのも、彼は昨年、滝に打たれる修行に挑戦したのですが、滝の中で意識を失ってしまい失敗に終わりました。部屋に戻って来た彼は涙を流し落ち込んでいました。しかし彼ははまだ40歳です。人生90年時代と言われる現代においてはまだ半分も来ていません。彼は負けてはいませんでした。倫理での学びを胸に、再挑戦のため強く立ち上がったのです。1年間、毎日自宅の風呂で水をかぶる訓練を行いました。そして今年、再挑戦は見事成功しました。本当におめでたいと思います。滝行という苦難、困難を打ち破っただけではなく、それを契機として人間的な成長へとつながることでしょう。皆様方も苦難、困難にあったときは、倫理での学びを以て自己革新に挑み、人間として良く成長していく絶好の機会だと考えて下さい。

ところで、時は更に遡り4月20日は飛鳥倫理法人会で年に一度の倫理経営講演会が開催され、法人局長にお越しいただけるといふありがたいことになりました。飛鳥倫理法人会はもちろんのこと、奈良県倫理法人会一丸となって取り組むことができました。この結果が期末目標に向けての大きな勇気をいただけたことは言うまでもありません。

倫理法人会では「物事の本質は見えないところにある」という真理を学んでいます。私は40年間葬儀の仕事を通して魂の世界（見えない世界）とお付き合いをして参りました。その中で、人間は「心＝魂」という目には見えない部分が本質であって、形があって見えている骨、皮、肉、血は本質ではないという考えに至りました。ですから倫理法人会で学んでいる「『心』を変えることによって、あらゆるものが変化していく」とことと、自分の経験知がリンクするのです。

人は目に見えることをはじめ、五感で感じられる物質的なことに囚われています。五感で感じることでできないことこそが本質であり、それを感じ取ることに気づけない人が多くいます。また、気づいていてもそれができるかどうかは別の話です。倫理を学ぶことによって、私たちはより本質に近づくことができます。

抽象的な話になってしまいましたが、倫理の心の勉強は具体的に分かりやすく、多くの方が大切なことを会得されて人間的成長を続けています。ぜひ皆様も一緒に心の勉強をしましょう。まずはほんの数分でも構いません。1度モーニングセミナーの会場に足をお運びください。お待ちしております。



令和 5 年度 6 月 県会長挨拶

6 月に入り、はるか南の海に発生した台風の影響により、今週はずっと雨の予報が出ていますが、雨に濡れたあじさいの色はひとときわ鮮やかで私たちの心を和ませてくれます。

皆様もご存じの通り、6 月と 9 月は日本における雨季で雨の多い月です。

「雨だと憂鬱だ」、「晴れてほしい」と感じる人も多いかもしれませんが、我々倫理を学ぶ者には「天候気候の倫理」という考えがあります。それは、「雨の日もこれが良いのだ」と雨を受け入れ、その気候を楽しむことです。私は先日、奈良市の倫理経営講演会での講師の方から、そのことをしっかりと学ばせていただきました。

実を言うと、私は幼い頃から雨降りが大好きな子どもでした。特に日曜日の朝からしとしとと降る雨に心を落ち着かされることが多く、「今日は一日ゆっくりしよう」と言ったようなリラックスした気持ちになりました。反対に晴れの日には「何か生産的なことをしなくてはいけない」という強迫観念が強かったのかもしれませんが、雨の日が本当に大好きで心穏やかに過ごしておりました。「晴れの日には枝が伸びる。雨の日には根が伸びる」、「根を養えば、木は自ずと育つ」との言葉の通り、私は雨の日に倫理で言う根の部分の育み、そして見えない心の世界を養っていたのでしょう。我々が学んでいる倫理は、この根の部分や見えない世界である心の部分が肝要ですから、この雨の季節を前向きに受け止めて、自身の成長を目指していきましょう。

さて、先月初頭のゴールデンウィーク。私は 5 日間お寺に通い、修行をしてまいりました。「倫理法人会は宗教団体ではなく、社会教育団体であり、一般社団法人です」という言い回しをよく聞きますが、その言葉の裏には「宗教団体＝悪いもの」（つまり、「倫理法人会は宗教団体じゃないから安心ですよ」）という含みが見え隠れしています。しかし、「宗教＝悪」と決めつけること、それ自体が歪んでいると私は考えています。

怪しかったり、悪かったりするものは、あくまでごく一部のカルト的な宗教であって、日本の伝統の宗教を含む多くの宗教は概ね人間主義に基づいた素晴らしいものだと私は確信しています。

ご存知の通り、私も宗教者です。私が葬儀の仕事をしたときに「葬儀者たるもの宗教者たれ」と勤め先の会社の社長に教えられました。まず、葬儀に携わる者は、故人の「死」をきっかけに、故人やご遺族などと向き合います。その際、ご遺族が「魂」や「あの世」、「祈り」についてどのような捉え方をしているのか、彼、彼女らの「心の世界」を深い洞察力を以て理解し、グリーフ（死別による悲嘆）をサポートする必要があります。そのためには、自分自身の生命や境涯を日々よりよく変革していく宗教的人間修行が必要となります。

ある統計では日本人の 7 割以上が信仰や信心を持っていない「無宗教」だと自認しているそうです。では、「無宗教」とは何を指すのか。私は、自分は「無宗教」だと思っている人は、特定の宗教を信仰する人々を危険視したり揶揄したりするために自身を「無宗教」だと主張しているのだと感じます。「無宗教」と自称する人も寺社に行けば賽銭を投げ、占いに一喜一憂し、験を担ぎ、幽霊を恐れ、罰（バチ）に怯える――そんな宗教的心性を持つ人が多いでしょう。

私は、日本人も諸外国同様に宗教観を養うことが大切だと思っています。有名な話ですが、仏教を開いた釈尊は、王子として満たされた境遇にいましたが、若き日にその贅沢も空しく感じ、生老病死という決して逃れられない人間の苦しみを目の当たりにし、その根源の苦悩の解決法を探すため出家しました。そこで、人間が生きる意味を明らかにする正しい思想・哲学を求めました。私たちも、生老病死や愛別離苦という決して逃れられない宿命

があります。それにどう対峙していくのか。私は、宗教観や哲学が必要だと強く感じるのです。

万人幸福の葉を筆頭に創始者の丸山敏雄先生の著書には神道・仏教のみならず、キリスト教やヒンズー教、他あらゆる宗教のエッセンスが含まれています。その歴史、考え方は哲学にまで及んでいます。私が深く共感し、導いた答えは、国教を決めたり、唯一の正しい宗教はこれだと押し付けたりするのではなく、道徳心を身に付け、人間としていかに生きるかの哲理を学び、豊かな人間性を養うこと。そして、世界中様々な主義主張の宗教の中でお互い尊重しあい共通項を見つけ共栄共存の道を探る術を身に付けることが肝要だということです。宗教観や哲学無しには個人の内面を磨いたり、国が良くなったりすることは難しいように感じます。

人間が受け持つ四つの恩を「四恩」と呼びます。父母の恩、師匠の恩、国王の恩、三宝（仏法僧）の恩です。「恩を知らぬは鬼畜の如し」と、恩を知ってこそ人間であり、恩を知らないのが畜生だと言われます。わが社の愛犬「いーちゃん」は恩をよくよく知っていると思います。皆さんもワンちゃんなどパートナーがいる方も多いと思いますが、恩を知っていると感じることがあると思います。つまり、恩を知らないのは畜生以下とも言えるかもしれません。倫理では、報恩感謝、先祖の恩を知ることで、未来が開けることを学びます。それはメビウスの輪、つまり途切れることのないその形が「永遠」を象徴するようになっているとのこと。恩とは他者に押し付けるものではなく、自分の心で感じ響くものです。

ところで、京都の龍安寺の枯山水の石庭をご存知でしょうか。庭のどの位置から眺めても、15個の石のうち、必ず1個は他の石に隠れて見ることができないように設計されているのです。「知足のものは貧しといえども富めり、不知足のものは富めりといえども貧し」という禅の教えを図案化し、表現したものとされています。石庭の石が一度に全部見られなくても、不満に思わず満足する心を持って、という戒めでしょう。私たち人間は足りない部分ばかりに目が行き、不満を抱きがちです。しかし、いま改めて自分に与えられた恩を感じ、噛みしめ満足する心を持てはいかがでしょうか。

また、カルヴァンは、「隣の家の蔵が崩れる音ぐらい、気持ちのいい音はない」と言ったそうです。いつの時代も、人の不幸は蜜の味、他人の悪い所を探したり、妬んだりするのは変わりありません。生存競争のために互いに食物や異性を奪い合ってきた歴史が続いているのです。人間の本性と言ってもいいでしょう。しかし、宗教的、道徳的に鍛錬された人間はこの本性に打ち勝つ理性を発揮することができます。天地、自然、万物の恵みに感謝する心を持ち他者と一切れのパンを分け合える人間になれるはずです。

宗教、特に神道や仏教は一般的にイメージされる「呪い（まじない）」や「祈祷（きとう）」と言うよりは、日々の生活の実践に直結するものです。倫理も全く同じで学んだことを日常でどう実践していくかが大切です。宗教は神様や仏様との取引ではありません。どれだけ拝んでも病気が治るわけではありません。祈りをはじめとする信仰を通してまず変わるものは、正しく自分の心のありようです。おすがりの祈りではなく、「自分がこうする」と誓願の心、祈りに変わり、それを通じて行動が変わります。信仰は、渋柿が甘い柿に変わるように自分の心に化学反応を起こさせることが本来の目的です。倫理も全く同じで「まずは自分が変わる」ことが大切です。今年度の倫理研研究所における全員共通の実践である「人は鏡の実践」そのものです。

倫理は教えをただ学ぶだけのものではありません。吸収したことが日々の生活から滲み出てくるものなので、常に実践してまいりましょう。

ところで、コロナが五類感染症に移行し、奈良公園界隈の商店街は賑わいを取り戻しています。ただ、ここで注意すべきは、コロナ禍でせっかく学んだことをいかに活かしていくかということではないでしょうか？

身近な例で言うとインバウンド頼みの店の運営方式、広い視点で見ると経済大攪乱、同時株安（コロナ恐慌）など、自社の経営が他社の影響を丸かぶりする、日本経済に他国経済が影響をもたらす、という状態が多くあるということがよくわかりました。

江戸時代の武士道「山鹿流」を確立した山鹿素行は「常の勝敗は現在なり」と述べています。このコロナ明けの今、以前と異なる経営を行い、何としてでも勝ち抜く必要があります。この時、日本人の精神性として誤解されやすいのが、命を捨ててまで頑張るといった戦国時代のような武士道ですが、素行は、「命を大事にし、蛮勇に走ったりせず、正しく生きることが「士道」の天命である。」としました。ここでも、正しい宗教哲学の重要性が見て取れます。また現在の日本、平和の時代の武士道において、素行の言葉を借りれば、「道徳的な指導者としての精神修養を怠ってはならない」とも言えるでしょう。私はこのことから「今後の日本は、利己的な経済至上主義で勝負するのではなく、道徳重視の経営理念を基にした経済の在り方で勝負する」ことが重要だと考えています。

このことを皆さまの事業に落とし込んで頂くためには、我々が倫理法人会で学んでいる一つ一つが必ずお役に立つと確信しております。ぜひ一度倫理法人会のセミナー等にご参加いただき、ご自身の内面に訪れる良い変化を体験していただきたいと願っています。



令和5年度7月 県会長挨拶

鮮やかな紫陽花が競うように空に映える季節。皆様、お変わりなくお過ごしのことと存じます。紫陽花は世界中で品種改良され、次々新しい品種が生まれており、2000種類もの品種があるそうです。皆様もそれぞれ好みがあるでしょう。私は特に濃い色をしている紫陽花に目を引かれます。

さて、奈良県倫理法人会においては今年度の目標達成の設定日は6月19日でした。喜ばしいことに皆様のお力のお陰で見事に達成することができました。

私は常に「目に見えない世界である『心』の中にある原因が、目に見えるところ（会社経営、人間関係、金銭問題、性格の問題など）の結果を作り出している」と伝えています。加えて、「『心』中の設計図をしっかりと作ることが大切である」とも話しています。先月の各地での4回の講話においても、ずっと言い続けています。皆様の現実はすべて各々の内面のプリントアウトにしか過ぎないのです。

そして倫理法人会はその「『心』の設計図を上手く作成するための勉強会」であります。例えば人は不足不満の心を持っているから、問題が起こります。14条に「夜が明けたから日が出るのではない。日が出たから夜が明ける」とあります。「日が出る」ということは、「心が変わる」ということです。全て、心が先に変わっていかなければ状況は好転しません。目覚めて心が変わってこそ、なのです。全ては不足不満の心を先に変えていかなければならないのです。皆様が倫理の実践を通じて自分の弱さ、愚かさの根本原因に触れ、意識的に不足不満の心を取り除いていけば、心が変わり、そして現実も変わります。

また、何事も「やってから、わかる」のが真理です。倫理法人会憲章の冒頭に書かれている、「実行によって直ちに正しさが証明できる」という文言に加え、活動指針のひとつ目に書かれている「倫理の学習と実践の場を提供し」という指針があります。現代人の多くは「分かってから、やる」という人が非常に多いですが、まず、やってみてください。暗闇の中で一歩進み出すようなものだと思うかもしれませんが、勇気を持ってまず体感してください。昨年還暦を迎えた60年の私の人生を振り返れば、大切なことのほとんどが「やってから、わかる」ことの連続でした。恐ろしい時もありましたが周囲に支えられ踏み出してよかったです。皆様にも倫理の仲間がいる、独りではありません。まず、やってみようではありませんか。

このことに関して、最も大切なこととお話しします。「心」にある原因は自分の責任ですが、心の設計図を正しく描き、結果的に目に見える現実が好転した暁には「誰かのおかげである」という感謝の気持ちが大切です。自分ひとりの力で成し遂げたというのは傲慢です。必ず自分が見えるところ、見えないところで人様に支えられての結果なのです。この感謝の気持ちを持ち続け、常に謙虚に生きていくことが大切です。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と言うように、稲の実が熟すほど穂が垂れ下がるように、人間も学問や徳行が深まるにつれその人柄や行為がかえって謙虚になります。謙虚な人は自分のことを無理やりアピールしたりでしゃばったりはしません。かといって自己卑下するわけでもなく、自分を認めるポジティブさを持っています。つまり、謙虚な人は、自己肯定感が高く、相手のことを配慮する気持ちや慎ましさも持ち合わせています。反対に驕る人は自己評価が過大になり傲慢になります。謙虚な振る舞いや態度は、人間として大切な資質です。しかし、人は成功すれば、謙虚さを忘れ、傲慢になりがちです。私は倫理を学ぶ前はまさに「俺様主義」でした。プライドが高く、自分中心、人を見下し、男尊女卑。挙げたらキリがない程でした。過去の自分に、「謙虚にして驕らず」という教訓を教えてやりたいくらいです。

さて、期末は8月31日。そして9月1日から新しい年度がはじまりますが、既に次年度

に対して動きを始めています。期末に向けては最後の後片付けや今年度の反省を徹底し、できたこと、できなかったことを整理して、原因究明し、次年度に落とし込みをすることが大切です。

そして次年度の目標設定についてですが、今後どんな方針で行くのか、何から重点的に取り組んでいくのかをはじめ、様々なことを考え準備する時期であります。物事を成し遂げるためには、この時期の準備段階が最も大切です。「段取り八分」とは仕事の事前準備の大切さを表す格言の通りです。

また何処の会社でも期末の頃は人事などで社内が多忙な時期でもあります。それでも、間髪入れずに次のことにも取り掛かっていきましょう。倫理法人会の組織内では会社経営と同じようなことをやり続けています。そして、この活動は会員の皆様の自主性に基づいて行われています。就職し、役職が人を成長させるように、倫理法人会においても、まずは会員になって体験し、そしてお役を受けていただき、自社経営に倫理実践を落とし込んでいただければ自社の経営も伸びることでしょう。

まずは、やってみることが大切です。ぜひ一度モーニングセミナーをたとえ 10 分でも覗きに来てみてください。



令和 5 年度 8 月 県会長挨拶

8 月初旬、快晴の日々が続き、夏真っ盛りを感じますね。全国的に気温が高いため、皆様方や従業員の方々、またご家族の皆様にも、熱中症には十分お気を付け下さい。

この時期は 1 年で一番暑い季節だと私は毎年感じています。特に、甲子園の地区予選の山場である 7 月後半から、原爆の日、そして立秋の 8 月 8 日前後までが一番暑いのではないのでしょうか。甲子園大会が始まると少し朝夕の暑さが和らぎ、お盆を過ぎる頃には山に赤とんぼが舞う季節となり、少しずつ秋の訪れを感じます。ですから暑さに関しては今からこの半月を乗り切れば良いということになります。

さて、奈良県倫理法人会も先月は達成式典及び次年度役職者研修と本格的に年度替わりの行事がありました。令和 5 年度が無事達成で終わることができたことは本当に皆様のおかげであると心より感謝申し上げます。

また令和 6 年度に向けて役職者研修を開催させていただきましたところ、本当に多くの皆様にご参加いただき、次年度に向け、決意も新たに全力で取り組んでいくことを誓いました。

さて、何度も口酸っぱく申していることではありますが、物事を成し遂げるには「段取り八分」が重要であると言われます。9 月からのスタートを待たずして、着々と令和 6 年度の「段取り」を様々な角度から進めています。実を言いますと、私の中では既に令和 6 年度の達成は「ほぼ」見えてきています。

この「ほぼ」という不確定な部分を取り除く作業を現在検討し、必要な事柄を行なっています。令和 6 年度が始まる最初の行事である 9 月 8 日の年度始め式では、私のヴィジョンを確実なものとして皆様にお話できると確信しております。したがって年度始め式では大いに達成をお祝い致しましょう。

万人幸福の葉 15 条には、「信成万事」、信ずれば成り、憂えれば崩れる、とあります。また、予祝といって、あらかじめ祝っておくことによって、望む結果をもたらそうとすることも書かれています。ですので、来る年度初め式は予祝と言えるでしょう。

さて、今月は AI や ChatGPT など最新技術についての私なりの考えをお話したいと思います。ちょうど私が 4 年前に倫理を学び始めた頃「ホモデウス」と「シンギュラリティ」という言葉をよく耳にしました。「人間至上主義」と「AI など人工知能と人間との臨界点」についての議論です。

しかし、その本を読めば読むほど、内容を知れば知るほど、違和感を覚えました。その違和感とは一体何なのか？そんな疑問もその当時はじっくりと考える時間もなく、頭の片隅で気になりつつも半ば放置していました。直観的に確信したことは、それは私が幼少の頃から学んできたこと、大切にしてきた価値観とは絶対に大きく乖離しているということでした。

その後、私は「毎日倫理」と言われるほど毎日毎日どこかのモーニングセミナーに通い始めました。倫理を 1000 日（約 3 年）学んだ頃にその違和感の答えを会得しました。それは明治以降の日本国の変化に依るものでした。

日本国の歴史を振り返りますと、明治維新（政治的なこと）や文明開化（文化的なこと）を通じ、西洋文化や西洋科学が日本に上陸しました。これらは日本国が目指した富国強兵に欠かせないものでした。アメリカやヨーロッパがもたらした西洋文化は、明治政府にとって近代化への道であり、洋風の建物を作り、メディアを通じて「西洋文化が国民の生活を豊かにする」と国民に宣伝しました。また、西洋科学においては、政府が強引にイニシアティブを取って科学技術の導入をはかり、様々な失敗を繰り返しつつも発展をとげ、近代化に成功しました。

しかし、我々日本人には、西洋文明、西洋科学知識といった西洋思想だけではなく、従来からの2500年以上の長年培ってきた東洋思想があります。それは、「儒教、仏教、道教、禅仏教、神道」の五つの思想、道德観や倫理観であり、日本人の精神性や風土に根づき、息づいた、日本国民の暮らしの源泉となっている「知的資源」です。

西洋思想では、自然は人の手によって支配するものであるという考えがあり、人間中心的な自然観を持っています。そして、「内側」より「外側」に関心の中心が置かれ、普遍性を重視しています。また、キリスト教の影響を強く受けているので、どうしても物事を正義と悪との二分的に区別しがちです。死に関しても、自然の流れで起きた死は、再生されるものだと考えています。例えば、ミイラや巨大な墓地を作り、死を再生させようというのがその表れでしょう。

一方、東洋思想は、先ほど述べた「儒教、仏教、道教、禅仏教、神道」に基づき、自然に逆りません。自然の力は人間よりも遥かに高く、死は生き物のありのままの姿だと考えていました。また、東洋思想は「外側にあるものもすべて内側（心）の産物」だと捉えます。絶対的な西洋思想とは異なり、極めて相対的で、仏教の輪廻流転の如く、すべてのものが変化するという流動性を重んじます。

この十数年、多くの知識人が東洋文化を見直し、西洋文化との融合を考えています。21世紀の指針は、東洋と西洋の知が融合されることにあるのでしょうか。そしてオルタナティブな第三の思想があちらこちらで産声をあげることでしょう。

企業に関しても、佐久間象山の「東洋道德、西洋芸」を現代の企業に生かす時が来ています。例えば、企業経営論として、企業経営の原理原則を東洋思想から、普遍的技術やモジュール化など普遍性の部分を西洋の経営思想から取り入れるということです。

葬祭業に従事して40年。私は「魂」という目に見えない存在と向かい合ってきました。日本人は、「魂」、「靈魂」、「霊」をほとんどと言っていいくらい区別せずに使っています。一方、西洋文化の源泉のひとつであるキリスト教は「soul」と「spirit」をはっきりと区別しています。

「sprit」とは、使い方で例をあげると「ホンダ・スピリット」のようなものです。「the part of the person that many people believe continues to exist after death.」つまり、多くの人が信じることが出来る、死後にも存在し続ける亡くなった人の一部」ということです。例をあげればクレドがそうだと思います。

では、「soul」はどうかと言いますと、またホンダで例を挙げますが、本田宗一郎氏の亡き後も、彼の靈魂は社内にさ迷っている。となります。「the spiritual part of a person that most religions believe continues to exist after their body dies.」こちらの意味はちょっとオカルトじみっていて、宗教家など特別な人なら信じている、死後にも存在し続ける亡くなった人の霊的」となります。

いずれも、私が向き合ってきた「魂」とは異なります。魂とは、人間の精神的肉体的活動を司る、見えないけど確実に在る存在です。それを体系立てきちんと説明しきれていたか、と言われれば、決してそうではありません。ですから多くの人の前で「魂」について語ることもできませんでした。

しかし、倫理を学んでから、「魂」を明確に説明できる領域まで来たように感じます。そして、そのことが、今後葬儀社としての経営方針や我々がなすべきことを理解できるようになってきました。

2020年時点で世界に流れる情報量が44ZB（ゼタバイト）だと言われています。更にその上にYB（ヨタバイト）という単位があるのですが、1YBは1,000ZBで、2040年ぐらいには1YBに到達する見込みだそうです。このスピードには驚かされます。キロ→メガ→ギガ→テラ→ペタ→エクサ→ゼタそして、ヨタ。皆さんはどこまで把握していますでしょう

か。外付けハードディスクを持っている人だとテラあたりでしょうか。

1ZB は地球上の砂漠にある砂の数と同じ量だと言われています。どれだけ砂が増えているか想像できましたでしょうか。

私が言いたいのは砂の数云々ではなく、そのようなコンピューター、AI の分野に於いて、人は機械に叶いません。ですから、対抗しようとせず、お願いできる部分は AI に頼めばいいのです。勝てない勝負はしないに越したことはなく、他の分野に目を向けましょう。

日本は終戦、60 年安保、天皇制、民主主義など目まぐるしく変わる中で生きてきました。その中で、教育に於いては、日本が高度経済成長迎えるあたり、昭和 35 年改訂の学習指導要領を機に基礎学力向上、特に科学技術教育に重点が置かれました。知識偏重教育、詰め込み教育が行われ、おちこぼれと呼ばれる教育問題が社会問題化されました。偏差値重視の「知識」の詰め込み教育で、真の「知識人」ではない、「インテリゲンチヤ」をたくさん作ってきました。これは日本に限ったわけではありません。西洋科学に基づいた考え方中心であれば世界中が知識優先主義で来たといえるでしょう。こんな教育環境にあれば、AI に敵うはずがないと私は感じます。

では人間、とりわけ我々日本人はこれからどうやってサヴァイヴしていくべきなのでしょう。私は、「目に見えないけど絶対に存在する」ものを大切にすることだと思います。意識とか無意識とか、超意識など、そういった「見えない領域」の分野を学び、自分なりに思考してみましょう。私たちが一人も漏れなく、遠大な理想家、情熱家にして万般に通じた真の教養人。人々を愛し、人々から慕われた指導者としての「教養人」になりましょう。

それにより磨かれる才能の一つに「直観力」があります。それを磨いて磨きぬいて光るその心の部分こそが我々人類の担う役目だと思います。何で磨くか？それは、皆さんが既に持っているこの「倫理」や、道徳心であります。

ですから、AI 等に仕事を奪われる等と怯えている間は、知識偏重教育で育った凡人である証拠です。我々はそのような人ではないはずです。テレビなどに出ている、物事に詳しい「有識者」、「コメンテーター」と呼ばれる人々は掃いて捨てるほどいます。いろんな俳優や芸人がクイズ番組で知識をひけらかし、もてはやされていますが、それはただのエンターテインメント。人々に消費されるだけで何かを生み出してはいません。

私たちが倫理法人会で学んでいることは、心の在り方、そして得た知識や情報を自分なりの思考や判断基準を習得する鍛錬です。手に入れた「素材」をどう活用するか。それを考える手法を学びます。そして、自分自身の中にある固定観念に気が付き、自身の価値観をアップデートさせるための発想や能力が身に付いていきます。リベラルアーツの教育と似たところもありますが、純日本産で、このような学習ができる場合は、倫理の他には絶対にありません。

さて、もう一度、西洋思想と東洋思想の話をしましょう。上記のとおり、西洋思想は自然と対峙し征服する思想である一方で、東洋思想は自然と共生し、山や川、草木や動植物など万物一切に霊的なものを見出す生き方をしてきました。仏教でも草木成仏といって、草木でさえ成仏できると考えていました。

また、あるサイトで「目の前の出来事はあなたの周波数を表している!？」という興味深い記事がありました。目の前の出来事は自分の周波数で出来ているとのこと。だから自分がいるその現実の周波数が好きでなかったら、方向転換をして自分の物の捉え方を変え、思いや感情をコントロールすることで変わることができる。人は周囲の出来事や環境をコントロールできない以上、変えることができるものを変えるほうが生産的だし、体験も変わってくる。

さらに、自分の周波数を整えることもできるらしく、全ての物や人の違いは「周波数」でできているとのこと。「違い＝周波数の違い」だとしたら、「何か」になりたい人は、「そのなりたいたいの物の周波数」になればいい。逆に、なりたくないものがあるなら、「その周波数」にならなければいい。のです。かなりスピリチュアルな話に聞こえてしまうと思いますが、もう少し続けさせて下さい。周波数は感情で測る事ができます。先ほど申しまし

たように、周波数と感情は連動しています。ですから、今の自分の気分をじっくり感じることで、自分の周波数を知ることが出来ます。苦境にあれば、どんな方法でもいい。周波数（気分）を変えることで周波数は「苦境の周波数」から外れるので、必然的に現実も変わってきます。これらは、魔法みたいですが、その構造は、「見える世界は、見えない世界の原因の結果」というだけの話です。見えない世界である心が荒んでいる、諦めている、負けているなど、負の感情に支配されていると、現実の世界もその通りになってしまうのです。心の持ちようと言ったもので、なるべくネガポジの特訓——女子高生が考えた「ネガポ辞典」がおすすめです。ネガティブな言葉を瞬時にポジティブに変える特訓ができます——をしていきましょう。

さらに言えば、あなたが見る結果は、持っている振動数で決まるとも言われています。振動数とは、意識レベルやアセンション（大きな変化）などと言えるでしょう。人や物には、量子力学において振動している粒子があります。この振動の力とは、人と人と物が触れ合うことで、互いに共振しあうことです。そして、『繋がり合う』という現象が起きております。その際に怒りや憎しみ、罪悪感などを心に持っていれば、気づかないうちに自らの振動数、意識レベルを落として、現実の結果に表れます。皆様に、自分が幸せだと感じる方向へ意識を変えること（振動数を変えること）の大切さに気付いていただきたいと願っています。

私は、倫理の実践を通して、自分の思い描く世界を作っているのは、自分の精神だと考えるようになりました。「思考は現実になる」と言ったら簡単ですが、頭で考えたことが今すぐ現実になるという意味ではなく、今この瞬間自分の脳内で設定されている事柄が現実として既に目の前に現れている。という意味です。その現実をどう解釈し捉え、選ぶか、それは私の手にかかっているのです。実はそもそも現実の一つではありません。どういうことかと言うと、「好きなタバコが完売」という一つの事実に対して、人の数だけ解釈があり、現実があります。「タバコ吸いたかったのに！」とがっかりするか、「今日は禁煙できてよかったな」と思うか。他の考え（事実）もあるでしょう。

実は、どの現実を選ぶかは各々が無意識に決めています。スコトーマの原理という概念があり、人が見ている現実は無意識的に取捨選択されています。例えば、薄毛を何とかしたい人は電車の広告でそれ以外の広告は目に入りません。

では、無意識に働きかけ、より良い現実を見るにはどうしたら良いのでしょうか。それは、現在は見えていないスコトーマの部分を意識的に認知して、自分にとって好ましい現実だけを選べば良いのです。これら一連の作業により自ら現実を選んでいくことができます。この方法は、心療内科等で行われている認知行動療法に近いものがあります。

しばらくややこしい話が続いて申し訳ありません。ここからはシンプルに参ります。とにかく倫理の実践をするにあたり、日々、心を磨き、身体を整え、暮らしも整えていくことが肝要です。日々の暮らしを整えるということは、毎日を丁寧に生きるということなのですが、もっと言えば、流されるだけでなく、意識的に生きるということです。特に、今この瞬間を意識して生きることでより良い現実の選択へ繋がっていきます。

また、先ほど魂の話をしましたが、霊主体で生きることが大切です。霊主体とは、霊や魂などの見えない世界が現実世界に先行するということです。現実世界は霊や魂などの見えないものに従うだけなのです。これだけ、スピリチュアルな要素の入っている話をすると、「めちゃくちゃ怪しい」と思う方もいるかもしれません。でも、霊や魂というのは決して怪しいことではなく、皆さんが今まで生きてきた中で自然と持ち合わせた神性（心、精神）、仏性（一切衆生にそなわっている仏の性分）、命、真心、本当の自分、超意識（無心、無欲になり自分を超越宇宙とつながっている存在）、無欲、無心、ゼロ・ポイント・フィールド（何もないところに全てがある、量子物理学の見解は仏教の般若心経でいう「色即是空」にあたる）、サムシンググレート（偉大なる何者か）などと言われているものです。

最後になりましたが、年度の終わりから次年度の初めのこの時期は、事業決算期同様、

「夜明け前」のイメージを強く抱きます。暗闇の頃から山の端が少しずつ明るくなり始め、鳥たちの囀りが聞こえ、風の向きや水の流れる量が変わるなど、様々なことが少しずつ変わり始めます。年度が移るということは、このように小さな変化を通じて生まれ変わるようなものです。

次年度の始まりは目前です。そしてその次年度もまた明るい未来に違いありません。この心地よい夜明け前から朝の時間を是非一緒に楽しみましょう。倫理法人会では好奇心と向上心に溢れた多くの仲間が、朝のこの時間から学び、出発して昨日よりもより素晴らしい一日を過ごしています。ぜひ皆様もお気軽にモーニングセミナーを見にいらしてください。まずはお問い合わせからでも結構です。それぞれのペースで、前へ、前へ前進して参りましょう！

追伸

今期最後の会長挨拶の作成に当たり、いろいろと考えていることを書かせていただきましたが、まとめきることができていないようです。誠に申し訳ありません。

また、来期以降も同様に書かせていただくかどうかは検討中であります。とりあえず1年間ありがとうございました。



令和 6 年度 9 月 県会長挨拶

皆様、いつも奈良県倫理法人会の活動に対して温かいご支援とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

昨年度、令和 5 年度は、奈良県倫理法人会としての目標達成に向け、皆様の絶え間ない努力と献身のおかげで、大きな成果を上げることができました。この一年間での経験と学びは、私たちの成長と発展のための大きな糧となりました。その中で、皆様の多大なるご尽力と支援に感謝の気持ちでいっぱいです。

新たな年度、令和 6 年度の奈良県倫理法人会のテーマは「形づくりの年度」です。この「形づくり」とは、組織の基盤をさらに強固にするための「組織づくり」を指します。組織としての方向性やビジョンを明確にし、その実現のための具体的なアクションを共に考え、実行していくことが求められます。

「ティール組織」という言う言葉がありますが、これは現代の組織論において注目されている新しい組織の形態です。従来のピラミッド型組織が持つ限界を乗り越え、より柔軟で持続可能な組織を目指す考え方です。このティール組織の考え方を取り入れることで、私たちはさらに新しい可能性を追求していきます。

奈良県倫理法人会設立 25 周年という大きな節目を迎える今年度。この長い歴史の中で、私たちが築き上げてきた絆や信頼は、これからの活動の大きな支えとなっています。25 年という時間は、先輩方の努力と献身、そして皆様の日々の活動が紡ぎ出したものです。この節目の年に、私たちは新たな飛躍を目指し、さらなる成長を追求していきます。

今後の大きな行事として、奈良市倫理法人会の分封が予定されています。この分封は、奈良県全体のさらなる発展と、地域社会への貢献を目的としています。分封に関する詳細や、その背景にある思いやビジョンについては、今後の活動でしっかりと皆様にお伝えしていきます。

事務局体制の強化も、今年度の重要なテーマの一つです。事務局は、私たちの活動を支える中心的な存在であり、その体制や機能を強化することで、より効果的な活動を実現していきます。私自身も、事務局との連携を深め、組織全体の活動をサポートしていきます。またモーニングセミナーのさらなる活性化や、活力朝礼の推進、そして新たに設置される研修委員会や女性委員会の活動も、今年度の注目ポイントです。これらの活動を通じて、私たちは組織としての学びや成長を追求していきます。

最後に、今年度のスローガン「世直しの精神を以て奈良県を創造的に再生する」を胸に、私たちは新たな一歩を踏み出します。このスローガンを私たちの活動の指針とし、奈良県の未来を創造的に再生するための行動を活発化していきます。長くなりましたが、この 1 年間も、皆様と共に、奈良県倫理法人会の活動をさらに盛り上げていきたいと思っております。皆様の変わらぬご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

令和 6 年度も、どうぞよろしくお願い申し上げます。



令和6年度10月 県会長挨拶

残暑の厳しさが和らぎ、頬を撫でる風が心地よい季節になりました。街行く人々も私自身も、秋の装いを楽しんでいます。

さて、先月9月、倫理法人会では新年度を迎え、令和6年度のスタートを切りました。私の見立てでは、滑り出しは順調。年度はじめ式で辞令を受け取り決意新たに立ち上がった方も多いことでしょう。今月はその気持ちを新役員同士で共有し、相互の親睦を図りチームワークを発揮する大切な準備期間にしてください。チームワークが高まると1人ひとりの強みが活かされると共に弱みを補い合い、同じゴールに向かって着実に邁進できます。ですから積極的にチームワーク高め、固い絆を結んでまいりましょう。

ここで、私が倫理法人会の講話で毎回のように話している「先ず行動すること」の重要性をこの身をもって体験したエピソードをお話しします。私は先月、実家の用事で1週間程、会社へ出勤をしませんでした。翌週、早朝に出勤すると、恐ろしいことに私のデスクに私宛の書類や郵便物で作られたエベレストがそびえ立っていました。私は驚き圧倒され、何から手を付けるべきか考える前に眼の前の現実から逃げ出そうとしました。しかしその瞬間、私は我に返ることができました。いつも倫理で学んでいる「気づいたらすぐする」、「行動してから考える」という2つの指針が私を現実に戻してくれました。

私はまずハサミを手にし、郵便物の開封を始めました。次第に心が落ち着き、エベレストは富士山くらいになりました。しかし私の心の隅には未だ逃げ出す悪い癖が残っており気持ちも揺らいでいました。そこでスタッフに作業を手伝いに来てもらい共に取り組むうちに、エベレストは若草山となり、私の心も穏やかになってきました。結果的に夕方に全て平野にすることができました。

この話で重要なポイントは何か。普段から倫理を研鑽している皆様は既にお分かりでしょう。それは私が「問題を明日に先送りしなかった」ということです。私は、考える前にまずハサミを手にししました。ですから問題にすぐ取り組むことができました。多くの人は、今すぐ問題に取りかかることが最善だと頭では理解していても、先送りの行動を選択してしまいます。これは明らかに人間の不合理な一面が現れた行動であり、無自覚に習慣化していることが多いと考えられています。この負の連鎖を断ち切るために、まずは自身にそうした「心のクセ」があると認識することが大切です。自覚がないまま悪習慣を引きずっていると、最終的に受け入れがたい結果を招くこともあります。例えば最愛の人を亡くした人に、「いちばん後悔していることは何ですか？」と尋ねたところ、「愛する人のためにしてあげたかったことができなかった」と答える人が非常に多く、つまり先延ばしにしたことがトップだったという調査結果もあるほどです。愛する人が存命の間にやるべきことをやっておかないと、死別後に大きな心の痛みとなり心の最も深い部分に残ってしまうのです。この先延ばし行動の奥底には、完璧主義、強い恐怖心、そして一番問題である「明日の自分はもっとやる気があるはず」という楽観主義の心理です。しかし未来の自分の状態を予測することの不毛さは、複数の研究で証明されており、根拠のない見通しはもれなく外れるのです。

ところで、皆様はお酒やタバコ、ギャンブル、または間食を断つと決意したことはありませんか。にもかかわらず「最後に1杯だけ、1本だけ、1回だけ、ケーキを一口だけ…」と自分に見苦しい言い訳をしつつ手を伸ばしてしまった経験はありますか？決意を破った直後は決意を守る大変さをさほど実感することができません。しかし次の「飲みたい、吸いたい、打ちたい、食べたい」という衝動、欲求が湧き上がってくるや否や初めの決意はどこかへ飛んでいき、スタート地点に逆戻りします。

何を伝えたいのかと申しますと、私たち人間は、今この瞬間の感情、決意、やる気等がず

っと続くわけではないにも関わらず、ずっと続くと思いついでいることが非常に多い。従って、やるべきことを先送りにしてもハッピーな気分になり、明日タスクに取り組む（と思われる）時も、今と同様この幸福感が続いているだろうと、根拠もなく未来予想をするのです。しかし残念ながらその見通しは甘すぎるとしか言いようがありません。

「自分の未来の感情は決して予想できない」と自覚すれば、不確かな未来を脇に置いて、今確かな現実目に向けすぐに行動することが容易になります。そのとき、自分の中に湧いてくる様々な感情を一旦手放すことで、やる気の有無にかかわらず機械的にタスクに取り組めるようになります。ありがたいことに一度手をつけてしまえば勢いが出てきます。その勢いがやる気の種となり、自分の中に徐々に芽吹いてくるのです。つまり、人は何かに取りかかる前提条件として、やる気や意欲が必要だと考えがちですが、これは大きな間違いで、実際はその真逆、「やる気は行動の後からついてくるもの」である。ということです。

さて、ここで事業経営について私の考えを少々お伝えします。私が会長を務めるオフィスシオンを法人化する際、最初に考えたこと。それは「どのようにして次の世代に会社を引き継ぐのか？」もしくは「どのようにして会社を終わらせるのか？」の2点です。

当然のことながら私にも寿命があります。私の代だけで終わるのであればいつかどこかで会社を閉じなくてはなりません。もし閉じないのであれば次の代に引き継がなくてはならないときが来ます。

結婚そして離婚も似たことだと思います。関係性が始まる時よりも深めるとき、そして終わるときの方が数倍難しいのは誰もが感じたり想像したりできることだと思います。

ところが、その終わりをイメージすることがとても困難であるのが現実です。

経営に話を戻すと、実は物事を構築することよりも、構築されたものを維持したり、発展させたりすること、あるいは上手に撤退することの方が何倍も難しいのです。撤退というのは、「タイミングよく引けるかどうか？」にあたります。成功している人はこの引き際が実に見事です。我々が倫理で学んでいる「即行即止」の「即止」を誤らないこと。「末を乱さず」の部分できっちりと必要な後始末をし、次の世代に引き渡していくという重要なことを決して忘れてはなりません。

例えば、「自分の会社である」という1つの見方に加えて、別の側面では「会社は自分だけのものである」という奢りがあるとすれば、会社に執着してしまいます。会社はそこで働いてくれている全てのステークホルダーのものであると視野を広げて考えることが必要です。

倫理法人会のお役を受けることは、そういった幅広い見方を学べるまたとない機会です。私は県会長という御役をお受けしたときから、いえ、お受けするに当たっての前段階から、次の方に引き継ぐために私が何をしたらいいのか？次の方が動きやすいようにするには自分は何をすべきか、または、すべきでないかを考えてきました。

1年が過ぎた現在、ようやく荒野にひとつを作り上げる「創る人」の時代から、それを受け継いで「良い方向へ導く人」の時代に突入していると考えています。経営でよく言われる「S字曲線」の成長期にはそれなりにしなくてはいけないことが多々ありますが、今はその時だと考えています。

プロジェクトなどでよく使われる「PDCA サイクル」というフレームワークがあります。PDCA サイクルは元来、生産・品質管理モデルに適用されていましたが、今日では戦略実行や経営管理、調達・生産・営業など各機能の業務改善に至るまで幅広く利用される「改善プロセスのお作法」ともいうべき、基本的なフレームワークです。Pはplanで実行計画の立案、DはDoの実行、CはCheckの評価、AはActionで改善を意味します。このサイクルを効果的に回して目標達成を目指します。

現在、私たち奈良県倫理法人会においては先ほど申しました「創る人」の時代をチェック、つまり評価をして、次の時代にできることを考え、改善していく必要があります。ここで大切なことは、checkをする際にクリティカルシンキングという思考力を用いることです。旧来は批判的思考と訳されていましたが、日本語のニュアンスにあわず、現在は「物事の本質を見極め、論理的に思考すること」とされています。

Check では実行した内容の検証、特に計画通りに実行できなかったケースについて、要因分析を入念に行います。Check で仮説の検証、要因分析が不完全であれば、Action（改善）の際に誤った対応策を立て失敗するので注意が必要です。そして私共が現在取り組んでいる Action（改善）は、Check での検証結果を受け、今後の対策や改善を検討します。私共は、このフレームワークを用いて、奈良県倫理法人会の中期計画や業績が達成できる仕組みを求めていますので、皆様、くれぐれもよろしくお願い申し上げます。また、PDCA サイクルやクリティカルシンキングについて学びたい方はいつでもお気軽にお声かけ下さい。きっと皆様の事業にも役立つことができるでしょう。」

そんな奈良県倫理法人会の三単会、飛鳥・奈良市・大和まほろばの倫理法人会のモーニングセミナーにぜひお運びください。
新秋の折、この秋の豊かな実りをお祈りしつつ。



令和 6 年度 11 月 県会長挨拶

寒さが増す 11 月は霜月と呼ばれるように季語では冬にあたります。朝晩の寒暖差が 10 度以上の日もあります。皆様におかれましては体調を崩す前に自愛して頂き、師走に向けて挑戦に挑戦を重ねて頂きたく存じます。

我々倫理法人会では「肉体は精神の象徴。病気は生活の赤信号」と学んでおります。さらに申しますと「肉体は心の容れ物であり、心のあらわれ。また、病気は一般に知られている原因の奥に、真の原因がある。心の不自然なゆがみや偏りが、肉体に赤信号としてあらわれている」と病気になる因について明らかにされています。そして病気に対しては「朗らかで豊かなうまい心のある心は、病気を治癒するほどの力をもっている。」と「心」が大きな役割を持つことが述べられています。これらを学ぶことにより、常に明朗な心を保つことで病気を恐れずにいられる。そして例えば病んだとしてもそのことを苦とせず喜ん で受け入れることができると希望を持つことができます。

病気は、生老病死という人生における免れることのできない四つの苦悩しみの 1 つです。私は大学卒業時から葬儀一本ですから、仕事柄この生老病死や愛別離苦といった苦難について考えさせられることが非常に多くありました。そんな中、幸運なことに春先から丸山敏雄創始者の独特の苦難観について学ぶ機会を得て、視野を広げることができました。その苦難観の根幹は「苦難そのものが美であり善である」という前向きな捉え方です。苦難とは、意味があり、原因があります。その苦難を解決する方法は、苦難から目を背けずに真正面から向き合い苦難の本質を見極めること。そして見極めた目の前の課題を一つ一つ正しく切り開いていくことです。苦難を乗り越えた人は、その善性が磨かれ人間として成長することができます。翻って申しますと、苦難とは人をより善くし、より成長させるために敢えて起こるのです。つまり苦難とは究極のところ「善」であり「美」なのです。このように苦難を捉えることができる人は、苦難に対して「なんと素晴らしく有難いことか」と受け止めることができます。

では、そのような強く柔軟で賢明な人間であるためには何が必要なのでしょう。私は、いつも口を酸っぱくして「教養人と知識人」の話をしているので耳にタコができたと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、大切なことなので何度でも申し上げます。教養人と知識人の決定的な差は徳性、つまり優れた人格の持ち主か否かの差です。知識人は文字通り知識を持った人でありその量や質に重きを置いており、人格が問われることはありません。一方教養人は知識がある、つまり知識人であることに加え、人格や人間性が優れていることが重要なのです。この比較は遥か昔、孔子の論語に遡ります。中国哲学者であり論語の学術的な知識注で著名な加地伸行氏は、論語に於いて教養人とは「君子」にあたると述べています。君子とは指導的な立場にある人のことを含め、五徳（仁・義・礼・智・信の）を備え、「義」を思い、立派な人間になろうと努力する人を指します。この君子と対照的なのが「小人」であり、一般的に立派な人である君子に対して小人は「つまらない人」と解釈されることが多いのですが、加地伸行氏はその意味付けに違和感を覚え、教養人である君子に対して、小人は知識人にあたると考えました。私もその考えは尤もだと思えます。小人は孔子のもとで仕事をしていますから、ただのつまらない人ではないはずですが、ただ、徳性という点において教養人ではなく知識人の枠に収まっているのです。

では、君子のように知識豊かな人格者である教養者になる、または育成するためには何が必要かと申しますと、第一に教育が挙げられるでしょう。人間形成に大きな影響を与える教育は大きく分けて 3 通りあります。家庭教育、学校教育そして社会での教育です。今回は、知識人と教養人に大きく関連する学校教育に着眼し話をします。日本における教育界の歴史を振り返ると、教育が目的とする人間育成において、知識人から教養人までのグラデーションの中で紆余曲折してきたことが見て取れます。

学校教育に於ける重点課題は、「授業のあり方に尽きる」と言われています。授業の在り方、

つまり教育の在り方には、学習指導要領が大きくかかわっています。学習指導要領は、教科等の目標や大まかな教育内容を定めており、全国の学校に於いて教育の一定水準を保つためのものです。これは社会の変化に対応すべく10年に1度、改訂されています。なぜ10年に一度なのかと言いますと、社会は10年単位で大きく変化し、学校も社会を構成する機関として変化に対応していく必要があるからです。改訂は主にその当時の学習指導要領が時代にそぐわない部分があったり、学校現場で起こった何らかの問題に対応したりして作られます。つまり学習指導要領を読み解くことにより、当時どのような人間を育てることが望ましいとされたのかを知ることができるのです。現在、多くの人が思い浮かぶ日本の教育の在り方は、「詰め込み教育」と「ゆとり教育」の2通りだと思います。しかし日本の教育史を紐解くとその二分法が些か乱暴であることが分ります。そこで少し長くなりますが、学習指導要領の変遷に時代背景を織り込みながら、戦後から現在までの教育界の歴史を振り返ってみましょう。

まず、学習指導要領の始まりは試案も含めると昭和22年です。この時期、特筆すべき点は昭和26年の学習指導要領である「生活単元学習の学習指導要領」です。この学習指導要領のもと、デューイの経験主義カリキュラムを主流とし、子どもの興味や関心を起点とした活動的な学習が行われていました。知識偏重を避けた、教育内容と学習の方法の個性化、協同化、直接体験が中心とされました。本来、デューイの教育哲学は教養人の育成に近いものでした。しかし、現場ではデューイが示した経験概念の解釈の相違や拡大解釈などが起こり次第に現場では児童生徒の基礎学力の低下が指摘されるようになりました。

実際、昭和30年代の学力調査の結果は決して良いものではなく、四方八方から学力低下を懸念する意見が強くなってきました。そこで戦後教育の流れを見直すことになります。ここからが知識人育成の始まりです。基礎学力の向上を目指し、各教科の持つ系統性を重視した新しい学習指導要領が昭和35年に作られました。科学技術の教育が重点項目となりました。この時期、日本は既に高度経済成長期に突入し、新幹線開通や万博開催による勢いがあり、ますます工業化が加速します。時は遡って昭和32年のスプートニクショックも人類初の人工衛星として話題を呼びました。アメリカの危機感による再教育編成は、日本への余波もあり、理数教育の高度化に大きく影響しました。

このように高度経済成長期に対応すべく制定されたこの時期の学習指導要領は最も内容の多いものでした。それがいわゆる「詰め込み教育」です。この教育法は昭和50年初頭までは日本教育のスタンダードとして、日本の教育現場で取り入れられました。膨大な勉強によって基礎学力の早期取得を目指す教育や、短期間の間にどれだけの情報をインプットし、応用できるのかを目指す教育を指すよう教育を行いました。

しかし昭和50年頃から「詰め込み教育」や、それに追いつくことができない「おちこぼれ」等が社会問題として認識され始めました。そこで昭和53年の学習指導要領ではそれらの問題を解決すべく、教育の肝要は「人間性豊かな児童生徒を育てる」ことにあると明記されました。膨大な学習内容は厳選され、ゆとりある充実した学校生活が送れるように改訂されたのです。この改訂が後に「ゆとり教育」と言われる問題の始まりになりました。

そして昭和の終わりから平成に入る頃、「いじめ」、「不登校」、「校内暴力」など、当初掲げていた「人間性豊かな児童生徒」からは遠くかけ離れた問題が全国的に注目されるようになりました。この問題に対して教育界では、「個性の尊重」、「自ら学ぶ意欲」、「主体的な学習の仕方の習得」の必要性が議論されました。そして体験的学習、問題解決学習を取り入れ、平成元年改訂の学習指導要領においてさらに学習内容を削減したのです。この転換により教育界は「新学力観」といわれる児童生徒の意欲・関心・態度を育成する方向へ舵を切りました。

そして日教組の運動方針であった完全週5日制への移行間近、「ゆとりの中で生きる力を育成する」ことを土台として平成11年の学習指導要領の改訂が行われました。この改訂では「選択教科」や「総合的な学習の時間」が増加した一方、教育内容はさらに削減されました。故に教育関係者は元より、様々な関係機関や専門家からの批判が集中しました。これ

を受けて平成 15 年には早くも一部改正が行われ、結果として「学習指導要領の示していない内容を加えて指導することも可能」という基準性が明確化されました。

最近では、経済協力開発機構（OECD）による「生徒の学習到達度調査（PISA）」や国際教育到達度評価学会（IEA）による「国際比較教育調査（TIMISS）」に代表される国際的な学力調査の結果が公表されたり、全国学力・学習状況調査も復活したりするなど、低下した学力を向上させることが国を挙げての重要課題となりました。とりわけ PISA の順位が下がったことをきっかけに、ゆとり教育が大きく批判され、これを受けて文部科学省は平成 14 年に新学習指導要領を作成、「脱・ゆとり」へと方向転換します。そして大幅に削減された学習内容は見直され、知識基盤社会に対応できる人材育成に加え、時代が必要とする「確かな学力・豊かな心・健やかな体」、文部科学省の定義でいうところの「知・徳・体」を三本柱とする「生きる力」の理念が重要視されました。具体的に言うと、インターネットや AI の生活への浸透により、社会や生活が大きく変わると予想される時代の変化に対応し、人生をより豊かにしていくためにどうすべきか主体的に考え出すことができる力が「生きる力」だということです。ここにきて教養人育成への兆しが見えてきたのです。次世代にバトンを受け継ぐ使命のある私たちは、子どもたちを教養人へと育てる教育がなされているか、社会の構成員としてしっかり見届ける必要があります。

次に、大学教育に目を向けますと、最近「リベラル・アーツ」という言葉が大学教育の中でよく聞かれるようになってきました。リベラル・アーツは「将来どのような職業につくにしても人文科学、自然科学、社会科学の三分野の知識を隔たりなく幅広く修得することが大切である」という前提に立って教養人を育てる目的があります。例えばリベラル・アーツ教育で有名な国際基督教大学はリベラル・アーツについて、「個人の能力を開花させ、困難や多様性、変化へ対応する力を身につけさせ、科学や文化、社会などの幅広い知識とともに、より深い専門知識を習得させるための学習方法」と考え、クリティカル・シンキング、知識の汎用性、道徳心や市民性といったいわゆる人間性の育成を三本柱としています。まさに教養人を育てるための理念だと言えるでしょう。

今、日本は経済成長の停滞、少子高齢化や格差社会など、これまでになかった事態に直面しています。そして多くの老若男女が希望を持てずに閉塞感を感じています。戦後は日本再建のために貧しくても多くの方が努力し、献身して来られました。戦後の焼け跡から短期間に成し遂げられた経済復興は、世界から驚きをもって「東洋の驚異」と呼ばれたほどです。そして 20 年近く続いた高度経済成長期の中、人々は「頑張れば頑張った分だけ暮らしが豊かになれる」と信じて働いてきましたが、それも石油危機で終焉を迎えます。そして次にバブル経済に入りますが政府の引き締め政策により、金融政策転換と総量規制の実施によりあっという間にバブルは崩壊します。私の考えですが、この時代の日本人と言うのは「がむしゃらに働く」という言葉がぴったりだと思います。働く目的が金銭的豊かさといった至って物質主義でありかつシンプル、そして終身雇用制度や年功序列が後押ししていたことは間違いありません。しかし、現在の日本社会問題に目を向けますと、代表的には「貧困問題」、「少子高齢化」、「人材不足」、「後継者不足」、「長時間労働」、「待機児童」、「介護問題」など見通しの立たない閉塞感に溢れています。心が痛むことに令和 2 年の小中高生の自殺者数は前年比 25.1%増の 499 人で統計開始以来最悪の記録を塗り替えました。先進国で「若年層の死因トップが自殺」という国は日本だけです。物心ついたころからこのような世の中に生きていると、希望をもつことすら難しいこともあると考えられます。

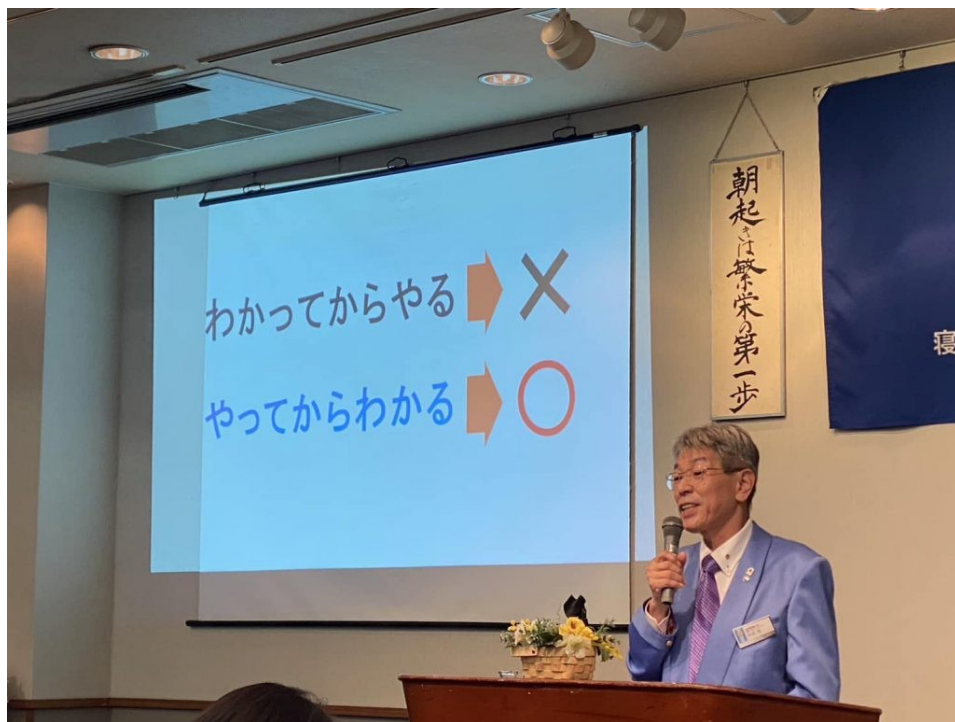
私たちの時代は一部例外を除いてほとんどが「均一的」な集団の中の「普通」という名の枠に収まる、という前提で物事が進んでいました。（私はその「一部の例外」でしたが）しかし、今は社会情勢も人も複雑で、十把ひとからげにはできない個人間の差異が多様だという認識が広がっています。これは、今こそ誰も置き去りにすることなく機会と結果の平等に配慮し、教養人になるべく教育を受け、社会問題に取り組む人材を輩出し、一人ひとりが、そして社会が希望を創り出せるようにする機会なのです。難は美であり善であるように。

重要なことは、この問題は若年者だけの問題ではない、ということです。「大阪万博に行ったよ」という私たちの世代も率先して彼らが希望を持てるように、繋いできたバトンを手渡す使命があります。「自分だけ良ければ」と今の瀕死の日本社会の在り方にしがみついて年金を貰って逃げるのは無責任すぎます。私たちが受け取る予定の年金を納めてくれているのは誰でしょうか。私たちは歴史と尽して下さった先人からの恩恵を受け、次世代の人々が納めてくれた年金だけでなく IT 化やグローバル化などで複雑化する社会、医療介護などに大変にお世話になっている、今後なるのですから、彼らのために私たちは何ができるか、一肌脱ごうではありませんか。

例えば、「最近の人の多くは挫折を恐れて目標に向かって頑張ることをしない」、「そもそも目標を見つけないけれど見つからない」など、方々から聞きます。目標という表現は曖昧ですが、会社を設立するとか、資格を取るとか、好きな人に告白するとか、色んな次元があっているのですけれども、ともかく私の考えとしては、挫折や失敗することを恐れずに思いっきりぶつかって、挫折いう苦難も自身の成長と言う糧にしてほしいということです。傷つくことを恐れて何もせずに後悔し虚しい人生を送る人と、ぶつかって挫折し深く傷つく人や大成して大きく喜ぶことができた人と、どちらが生きた実感、人生の充足感があるかと言えば後者の方ではないでしょうか。人々が後者になれるように、私たちは次世代のために、知識人であることよりも多様性をもった教養人として生きることの方が大切であることを訴え、セーフティーネットの拡充に努める必要があると考えます。

最後に重ねて申し上げますが、苦難が襲ってきたときに誰もが最初は「辛い」、「苦しい」と思うことでしょう。そして「幸せになりたい」、「もっと安らかに過ごしたい」と安易な道に逃げたいと思うかもしれません。しかし、その苦難こそが美、善として自らを向上させる機会であり、生きている証であることを決して忘れてはなりません。それが教養人であるということです。

今回は一段と長くなってしまいましたが、鮮やかな紅葉の季節ですので、朱に染まる葉をご覧ください。そして心を燃やし今月も意気軒高として倫理、事業、各種活動に邁進しましょう。



令和6年度12月 県会長挨拶

カレンダーもいよいよ最後の一枚を残すのみ。黄金色に光輝く、銀杏の葉を見上げながら、この一年を振り返っています。こうやって一年、また一年が過ぎ、歳を重ねていくのだなぁと「年年歳歳花同じ、歳歳年年人同じからず」と実感させられる季節です。また、インフルエンザなど体調を崩しやすい季節でもあります皆様方は十分に用心されていることと存じます。

さて、倫理法人会におきましては、私ども会員は「倫理法人会憲章」を常に意識して活動しています。この憲章は平成5年11月に制定されたもので、すでに制定から30年の時が経っています。この憲章の中には「活動指針」があり、その第一番には「倫理の学習と実践の場を提供し、よりよい生活習慣と豊かな人間性をそなえたリーダーを養成する」とあります。

古今東西、人々が指導者やリーダーについて論じる際には、千差万別、多種多様な視点から様々な事柄が語られてきました。現在もリーダーシップに関する書籍やセミナーが多量にあります。私は近頃、人はなぜリーダーシップというものを希求するのか、その内実はどのようなものなのかを考えていました。そこで今回は、現代の日本社会に必要な「物事の捉え方」、そして私の考える「今の時代、そして、これからのリーダーシップ」についてお話しいたします。

ピンチはチャンスとは言うものの、残念ながらこれからの日本社会は従来と異なり右肩下がりの方です。毎回何度も私が言うので皆様は耳にタコができているかもしれませんが、大切なことなので何度も言います。どうあがいても右肩上がりだった「あの頃」は来ないのです。ですから、右肩上りの日本社会のあり方から、右肩下りのあり方に、考えを正反対にシフトすることが求められています。

例えば、キーワードを伝えるならば、「いつでも・どこでも・誰でも」の時代は終わって正反対の「今だけ・ここだけ・あなただけ」という、個や、かけがえのなさに価値があるのです。

近代の考え方は、①すべては論理によって明らかにできる②全体は部分によって規定されるとし、③何事も定量化できて初めて意味を持つとしました。そこから産業革命の物的基盤がもたらされました。そうして350年ほど続いた近代の物質—モノ中心の時代は、今や精神—心が中心の時代へと転換しており、日本だけでなく、地球規模で従来の考え方では解決できない様々な問題に直面しています。

現在、日本社会が目当たりにしているもの、それはすべて複雑系であり、論理のみによってそれらの問題を扱うことはできません。部分最適の和をもって全体最適とすることもできません。致命的なことに重要な事柄は定量化できないものの中にあります。この複雑系—現代の日本社会では知覚的な認識が不可欠です。全てを精神、命あるものとして見る世界観が必要なのです。超高齢社会、少子化、組織社会の成熟、グローバル経済の展開、地球環境問題の深刻化、教育ある人間モデルなど、すべてが形態的であり論理だけでは到底解決できるものではありません。

それに伴い、組織の形態も今年度の年度始め式の県会長挨拶で話したようにトップダウンの組織からティール組織への変化が必要とされる中で、今後は支援型リーダーを必要とする場面が多くあるでしょう。

ご存知の通り、戦後の復興から高度成長期、バブル期を支えてきたのは、カリスマ型リーダーによる支配的リーダーシップです。このリーダーには強いカリスマ性があり、類まれなる才能と並外れた行動力、そして発想力や発信力で企業や組織を力強く牽引していくリ

ーダーシップを持っています

しかし、現在このカリスマ型リーダーシップは往々にして時代にそぐわなくなってきました。これからの時代は「支援型リーダーシップ」と言われています。アメリカのロバート・K・グリーンリーフが「サーバント型リーダーシップ」として提唱し、日本では「支援型リーダーシップ」と呼ばれることもあります。支援型リーダーシップは、まず部下のために動き、その後相手を導くという奉仕の精神に基づいています。支援型リーダーシップを推進している日本サーバント・リーダーシップ協会では次の10項目の要素を挙げています。

一、傾聴

最も基本的な要素です。メンバーの意見に耳を傾け、主体性と本心を引き出します。

二、共感

相手の立場に立って物事を考え、気持ちを理解しようと心がけます。

三、癒し

相手の心身に配慮し、心の傷を癒して、相手がもともと持っている力を回復させます。チームに欠けている問題がある場合は各メンバーの強みを活かして補えるようにします。

四、気付き

物事の本質を見ます。自分自身とチームにアンテナを張り、フィードバックして相手にも気付きを与えます。

五、説得

権限や権力で服従させるのではなく、相手が納得し、相手の同意を得ながら話を進めます

六、概念化

業務目標を超えた大きなビジョンを明確に提示しメンバーを鼓舞します。

七、先見力、予見力

現状を俯瞰し、過去の経験とも照合しながら、未来に起こりうる出来事や問題を予測して対策を打ちます。

八、執事

相手より一步引いた場所から、メンバーの利益に貢献します。

九、人の成長に関わる

メンバーの成長に関心を持つことで一人ひとりの可能性や価値に気付き、それぞれの成長へと積極的に関わります。

十、コミュニティ作り

メンバーに対する愛情と癒しを大切にし、それぞれが大きく成長できる協力的なコミュニティを作ります。

以上が、支援型リーダーシップの要素です。

支援型リーダーシップに注目が集まるや否や「支援型リーダーシップは万能だ」「これからのリーダーは支援型リーダーであるべきだ」と飛びつく人が大勢います、その多くは支援型のやり方を誤解し、組織の統一性が乱れたり、リーダーの仕事が激増したり

「コミュ障」と称されるメンバーが離れて行ったりするデメリットを招きます。儲かる話だと闇雲に飛びつくのではなく、皆様も、支援型リーダーとしてリーダーシップの在り方、

スキルを学び正しくリーダーシップを発揮していただきたいと願っています。

ここまで話すと、支配型はダメで、支援型のみが良いと考える人がほとんどだと思いますが、「支援型リーダーシップと支配型リーダーシップのどちらが優れているか？」という議論は意味がありません。状況や対象などはもちろん、それぞれに持ち味があります。つまりは、支援型を中心に、様々なリーダーシップの在り方を把握して、臨機応変に組織に生かす「シチュエーションリーダーシップ」の考え方も頭の片隅に残しておいてください。

では、話を戻しまして、先程の倫理法人会憲章に書かれているリーダーの姿とは、「より良い生活習慣と豊かな人間性をそなえた」と書かれています。どこにもグイグイ引っ張っていく等といった、カリスマ性リーダーの支配的リーダーシップにあたる文言はないのです。先も申し上げましたが、この憲章は今から 30 年前にできています。すでに、その時に倫理法人会は支配型リーダーシップではなく、支援的リーダーシップを提唱していたのです。先見の明がある、人間主義の考えだと思います。

今回は、も？少し学校のお勉強のような話を挟んでしまいましたが、物事を主張するときの裏付けとして必要なのでご容赦願いたくお願い申し上げます。このように、歴史に学び、未来を見据えて現在を学ぶ。自分の組織・事業に確固たる土台を築き研鑽できる倫理法人会で共にリーダーとしての在り方を学んで参りましょう。そして自分の事業のことだけではなく、地域社会の発展、日本創生、地球市民として、貢献する、倫理根本の貴い人生を歩みましょう。



令和6年度1月 県会長挨拶

新年あけましておめでとうございます。

2024年、新しい年の幕開けです。より一層、皆様にとって輝かしい年になりますようにご祈念申し上げます。

さて、今年の干支は龍であります。龍は中国では古来より権力の象徴で、縁起のよい生き物とされています。また、龍年は陽の気が動いて万物が振動し、人も物も活力旺盛になって大きく成長し、さらに形が整う年であるとも言われています。

辰年に起こった出来事を羅列しますと、明治維新（1868年）にはじまり、第1回東京五輪開催、東海道新幹線の開通（1964年）、日本一、世界では2番目に長い青函トンネル（全長53.85キロメートル）開通（1988年）したのも辰年です。

また、直前の辰年には京都大学の山中伸弥博士がiPS細胞（多能性幹細胞）の研究でノーベル医学生理学賞を受賞（2012年）。再生医療への道を開拓したことは大変に意義のあることです。まさに辰年には時代が動く出来事が起こっています。

奈良県倫理法人会におきましては、今年は設立25周年と大変に意義深い年であります。1月21日には橿原神宮会館にて、多方面より多くの方々にお越しいただき、25周年式典を開催いたします。ご存じの方も多いと思いますが、橿原神宮は日本最古の正史ともされる『日本書紀』において、日本建国の地と記されています。初代天皇である神武天皇をお祀りするために明治時代に建設されました。神武天皇は45歳の時、宮崎から瀬戸内海を抜け大阪難波に上陸後、南下し熊野に入られました。八咫鳥に出会い導かれ、吉野の険しい山を越えて大和へ。そして周辺の勢力を従え大和地方を平定したのです。これが神武東征です。そして紀元前660年の1月1日（新暦2月11日）、橿原宮にて52歳で即位され、初代天皇となりました。日本の原点である神武天皇の困難を顧みること、私たち倫理法人会の25年の歴史も原点、そしてこれまでの歩みを顧みて、今後も必ず発展を続け、皆様だけでなく周りの方々の幸せをも支えていきたいと存じます。

さて、年明け早々で恐縮ではありますが、中間目標達成のお話を致します。奈良県倫理法人会は1月19日に中間目標達成の日が待ち受けています。各単会とも日々真剣に普及に取り組んでいただいております、その頑張りは目を見張るものであります。目標達成に関して、世間では様々なノウハウが紹介されていることはご存知だと思います。役に立たないもの、自分に合わないものもありますが、私にとって皆さんに適した秘訣を紹介したいと思います。

それは、自分の潜在意識にある「メンタルブロック」を外すことが大切であるということです。メンタルブロックがあると、恐れや不安からくるマイナスの思考に支配され、失敗したときを見越した言い訳や、行動の抑止が起こります。

どんなことでも、何かを成し遂げている人は、メンタルブロックを外しています。プロジェクト等に取り掛かる前、そして取り掛かっている最中に「ダメだったときの言い訳」を決してしません。ダメだったときの逃げ道を作らないのです。

分かりやすい例で言いますと、試験の際に「ほとんど勉強していない」とか「今日は体調が悪いから本調子じゃない」など、その様なことを口にしたたり、聞いたりしたことはありませんか。これがメンタルブロックの表れです。この癖のある人は、否定的な思い込みや固定観念で行動が抑制されています。結果、何かに取り組んでも成し遂げることができなかったり、そもそも行動に移すことすらできなくなったりするのです。

メンタルブロックは人生のいつから始まるのでしょうか。それは幼いころから刷り込まれ

ることが多いです。学校や家庭で、チャレンジして失敗したときに友達にバカにされたり、親や先生に叱られたりした経験はありませんか？学校だけではありません。世の中には「失敗はダメなこと」だと潜在意識に刷り込む装置がたくさんあります。

また、「自分は才能がないから、できなくても仕方がない」といったような、予防線、つまりメンタルブロックをしていると、本当の「無能」になってしまいます。メンタルブロックをすることが当たり前の世間の中で育ち、また謙虚を美德とする文化の中で生きてきた私たちは、無意識のうちにネガティブなことを言いがちです。私も過去を振り返ると、ことある度に「これ以上は無理」などと言っていました。それで「自分は頑張ったけど、ここから先は才能がある人の領域だから」などと、頑張ったけれど、と言い訳しつつ、才能がないなどと、少し謙虚になって、まるで自分のことを客観的に見る、見せることができているかのように錯覚していました。

しかしそれはただ、メンタルブロックで自分の心を守っているだけでした。「失敗したときの言い訳作り」。つまり防衛機能に過ぎなかったのです。このようなネガティブなことは、言え言えほど成功からは遠ざかっていくことが、メンタルブロックの原因や自己分析、成功している人々の考え方の中で分かってきました。言い訳が悪いとは言いませんが、でもうまくいかない理由を探してそこに安住していたら成功の可能性からは遠のいていくでしょう。

「自分はバカだから勉強しても無駄」と言っているのは本当に勉強をしなくなります。また、病的に体調が悪いわけではなくとも「体調が悪いから今日は止めておこう」と言っていたら、本当になんだか少し体調が悪い気になってモチベーションがゼロになってしまうなど、自分が発した言葉が現実になってしまうということは倫理法人会の教科書である万人幸福の葉にも書かれています。まさにメンタルブロックは、百害あって一利なしなのです。

毎回、私は「心が先に変わっていく」というお話をさせていただいています。倫理法人会の教科書である万人幸福の葉においても同様に、様々な条に書かれています。多くの人は頭では理解しているつもりでも、真実を言うと、心では理解できていません。心で理解していないから、すべきことを行動に移すことが出来ず、うわべだけの知識を勉強して分かったつもりになっているだけで終わらせています。何年もこの繰り返しで生きてきて、「頑張っているのに上手くいかない」と嘆いている人はたくさんいると考えられます。私の伝えたいことが分かった方は、承認欲求を満たすためだけの外題学問、浅薄な学識から脱却しましょう。「心が先に理解する」ということに関して、「私はそれができているのでしょうか？」と誰かに聞きたい気持ちになることもあるでしょう。「心が先に理解する」ということは、非常に感覚的なものです。他者からは「できているか否か」を判断することは、その人の「行動」を見るしかありません。その人の行動が変わってきたら「理解できた」という状況になったと判断できます。つまり、「話を聞く→真の理解→行動が変化」の順なのです。

倫理法人会で中間目標や期末目標を達成するということは、このような心の部分、行動の部分をしっかり根から養う訓練でもあり、それができれば自ずと自己の成長や自分の事業にはじまり、家庭や身の回りのことも好転していくとご理解ください。今一度、まずは自分が発する言葉に注意することから始めて、行動を変えていく訓練を一緒にしてまいります。

冒頭でも述べた通り、今年は龍年です。龍は十二支の中で、唯一の空想上の生き物です。目の前の制約にとらわれず、自由に伸び伸びと発想、行動して、新しい時代を切り拓いていきましょう！



令和6年度2月 県会長挨拶

極寒の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

1年で最も寒い季節ではありますが、皆様方におかれましては年始に立てた目標に向かって倫理の活動に励んでいらっしゃるものと存じます。その中で悩みや苦しみ迷い、疑いの心も生じることかと思われます。こういった場合、一番悪い方法は「誰にも相談しない」ということです。ですから、皆様方には倫理の教えを信じいただき些細なことでも頼ってほしい、相談していただきたくお願い申し上げます。

さて、去る1月21日の奈良県倫理法人会設立25周年式典に於いてはおかげさまで、総勢140名近くの方々にご参加いただき、真心のお祝いを賜りました。また、無事故で会を終えることができ、心から感謝申し上げます。

私の中で、この25周年記念の式典は、会長任期のうち、一番大きな行事だと位置づけて参りました。それが大成功し、ホッとすると同時に支えてくださった皆様への感謝の気持ちでいっぱいです。

先人たちから絶え間ない想いと努力で受け継がれてきたこのタスキを、25年という節目からまた新たなスタートの思いで、次の10年、20年、更に30年・40年・50年と未来へ、未来へと引き継いでいく決意です。これは私一人ではできることではありません。皆さん、そして皆さんが育てていく後継の方々で成し遂げるものであります。

さて、ここで中間目標にふれたいと思います。1月19日に中間目標の締切を受け、達成できた単会は本当におめでとうございます。本当に素晴らしい活動をされたと思います。

また、達成できなかった単会には「これは期末に向けて仕切り直しのチャンス」である、と前向きに受け止めるよう激励いたしました。改善策を共に検討し、期末達成に向けて走り始めています。

結果は、ただ受けているだけでは、プラスマイナスゼロどころかマイナスです。ピンチのときに何も手を施さないということは単に問題を先送りしているだけ、沈みゆく泥舟に乗っているようなものです。

以前にもPDCAサイクルを回し、特にC（チェック）の部分は、ともすると痛みを伴うことがあるかもしれませんが、ここが一番のポイントですから、力を入れて取り組んでいただきますようお願い申し上げます。

業務に落とし込んでお話しすると、例えば、ミスが起こった時にミスをした個人を責めるのではなく、ミスを招いた現行の仕組みを見直すことが再発防止の上では一番重要です。

当然ミスをした個人は十分に反省していることですし、仕組みの見直しにより自分自身の中で次からはこうしようと気をつけるはずです。

今年は新年早々羽田空港で飛行機事故が起こりました、ここで注目したいのが、犯人探しよりも事故調査委員会が次の事故を防ぐための分析をしているということです。

事故調査委員会では、ひとつの小さな事故においても何年もかけて仕組みを見直しています。それが再発防止の一番の方法だからです。特に中小零細企業におけるヒューマンエラー対策に関しては、責任追及型ではなく、原因追及型への変革が必要です。管理者は職場全体の課題と認識しスタッフ全員で検討していかなければならないでしょう。

さて、今期の奈良県倫理法会において、中心となる取り組み、方向性は「形作り」＝「仕組みづくり」です。組織論に基づき、みんなで一緒に「仕組みづくり」を学び実践をして

いく予定です。

まず、年度始め式ではピラミッド型組織からティール組織へ、といった、組織のあり方の変容について話をしました。そして、その中でのリーダーのあり方にふさわしい型は、カリスマ型リーダーからサーバント型リーダーへ移行しているともご説明いたしました。

今回は「仕組み化」について徹底的にお話をします。我々中小企業の経営者は、概ね我儘で傲慢な人が多いのではないのでしょうか。さらに、その人の「替え」がきかないケースがほとんどです。皆様方の会社組織において「自分がいなければ会社は回らない」、事業承継が大問題、という状況になっていませんか？

これは「オンリーワンの罠」に嵌っている状態です。

組織の中で「あなたが(自分が)いないと困る」という状態であると思い思われることは、ある種、麻薬みたいなもので、その言葉を聞くとついつい心地よく感じてしまいます。心当たりのある人はこの中にも多くいると思います。

しかし、これこそが、会社組織が健全に組織化できていない一番根っこの部分なのです。会社組織において「替えの利かない人」をつくってしまっている場合には、大きな壁にぶつかります。組織化ができていない組織は一見幹の太い木のように強く見えても、根は脆いのです。ですから、何かあればすぐに倒れてしまいます。しかし柳のような木であっても仕組み化という基盤ができていれば靱やかで本来の意味で強い組織なのです。先ほどとは反対に「替え」のきく人を作る必要があるのです。替えのきかない人しかいなければ、その人がいなくなれば組織はたちまち困ります。替えのきく人とは、会社が何を自分に求めているか理解し、かつ利益をあげる組織のなかにカチッとハマリ、着実に貢献していける人々のことです。

このように、仕組み化、組織化し事業を健全な方向へ回すということは、端的に言うと、経営者はその会社のヒーローではなく、他のスタッフ同様、「歯車の1つ」なのだ、と覚悟することです。歯車の1つと言われると、存在価値がないように想われるかもしれませんが、歯車1つがければ、組み込まれている機械は動きません。組織がどのように回っているのかを知らない人は「代わりはいくらでもいる」といいますが、ヒーローと思っている自分と、歯車と思っている自分では、経営者としての心構えが全く異なります。「仕組み化をするためには、まず、わがままな経営者自身が『組織の歯車となる覚悟』が必要」だと重ねて主張申し上げます。

さて、アメリカの起業家であり実業家でもあるスティーブ・ジョブズをはじめ、日本のビジネス界に影響を与えた人物はたくさんいます。彼らはたしかに素晴らしい。しかし、本当のところを言いますと、彼らよりも彼らのアイデアを実現させた組織のほうが、もっともっとすごいのです。

組織論や、歯車の話は華やかさががないから、なかなか表には出てきませんが、ジョブズと同じくらい画期的な話なのです。

ここまで話をしても、会社の歯車だと言われると、「嫌だ」「あり得ない」と、受け入れることができない経営者は五万といるでしょう。そういう人は「世の中は自分中心で動いている」と信じたくてしかたがない。残念なことに「世の中は自分中心では動いていない」ということを受け入れられず、生きた化石になっていくのです。

成長は、自らが歯車になることで組織にもたらされる力に気づき、少しずつでも、歯車となることを受け入れたところから始まります。どんな組織に所属しても自分自身がその組織の中で一部の組み込まれた歯車となり、その中で組織に必要とされているスキルを磨く。そして替えのきく人材になる。そういう働き方ができる人はどこに行っても活躍することができます。

我々倫理法人会で、ある種わがままな経営者が学んでいるのは実はこのようなところが多いと思います。特に倫理法人会の役職なんて歯車そのものです。組み込まれた歯車としてただひたすらお役に徹する練習をする。心持ちを学ぶ。そういうことが倫理法人会の歯車として大切なことです。私自身も「奈良県倫理法人会 9 代目会長」という歯車として日々の活動をさせていただいていることは言うまでもありません。

最後に、アニメやドラマで「正義感のある個人 VS 悪の組織」という設定が多く見られます。たしかに、子ども向けのフィクションとしては、ワクワクするものでしょう。たくさん大人のハマった銀行系のドラマもありました。みんなそんな話は画面の中だけだとわかっています。でも実際にはできないから夢中になって見しまう。それが悪いことだとはいいません。倫理法人会においては、現実をきちんと直視し、組織の中で自己実現をしていくことを皆で学んで行くことが非常に大切です。

悲しいかな、

「自分がいないと回ってほしくない」

「自分がなくなったあとは失敗すればいい」

「自分無しでやれるものならやってみろ」

こういう言葉で感情をむき出しにする人がまだまだ多くいます。

真の経営者は、全く逆です。

「私がいなくなってもうまく行ってほしい」

「死んだあとも事業が続いて行ってほしい」

「未来永劫残って欲しい」

というように自分亡き未来にまでも目を向けた選択をする経営者なのです。

今日を期に、自分のワガママから来るオンリーワンの発想、組織から脱却し、皆様の会社が素晴らしい組織になるように共に勉強して参りましょう。

この季節はいつも冷えた空気の中、燃える心でモーニングセミナーはじめ諸行事にご参加いただきましてありがとうございます。外は冷えておりますのでコート等羽織って暖かくして外に出てくださいますようお願い申し上げます。

寒い時期もとわずかです。お風邪等を召されませんようご自愛ください。



令和6年度3月 県会長挨拶

寒さがまだ残る中、ところどころに草木の芽吹きを感じる今日この頃、梅の香りがほのかに感じられるようになりました。奈良県では大正11年に国の名勝地にされた月ヶ瀬梅林にて毎年「梅まつり」が開催され、紅白約1万本の梅の花が咲き誇ります。

梅と言えば、菅原道真が大宰府に左遷された折に、大切に育てていた庭の梅が主人を思うがためにひとりで大宰府まで飛んで行ったという逸話をご存知の方も多いのではないでしょうか。

また、梅の花ことばは「忠実」、「高潔」、「忍耐」と言われており、私たち奈良県倫理法人会が目指す方向と同じであります。

さて、先月は静岡県御殿場市にある倫理研究所の研修施設にて、経営者倫理セミナーに2泊3日の旅程で参加をしました。私はこのセミナーは、入会以来5年連続5回目の皆勤賞の参加となります。このセミナーは、自己を振り返り、命の源を感じられる素晴らしさがあり、来るたびに忘れていた大切なことを思い出したり、新しい発見があったりします。また、このセミナーに参加している時間は、俗世間と離れ、筆舌に尽くしがたい心地よい時間が流れます。「命の洗濯」とは、まさにこのことだと、心から感じます。

我々倫理法人会の役職者の心得の第一に「セミナー参加者に喜んでいただけるお世話役に徹します」という項目があります。毎年参加しているうちにこの思いが次第に強くなり、今では奈良県から乗り合わせる貸切りバスでの往復の時間には、奈良県から参加される皆様のお世話をさせていただいています。さらに現地のセミナーに於いては全国各地から集った皆様がそれぞれの班に分けられます。ですから、私は同じ班というご縁をいただきました班員の方々がより良い研修成果を得られるよう、すすんでお手伝いしております。

その研修の中では、「挨拶テスト（チームワークテスト）」と呼ばれる取り組みがあります。同じ班のメンバー一丸となって取り組むそのテストは、単会運営にそのままつなぐと私は認識しております。全国から集った初対面の人間7～8名が呼吸をあわせ、ピッタリと一致しなければ合格をいただけません。班のチームリーダーに自らがすすんで心を合わせていく。これは、経営者というある種の個性ある人々が集まって行う単会運営、さらに自らの会社に当てはめて考えれば、社員や役員と行う会社経営そのものではないでしょうか。

この話の全貌をこの場で要約することは非常に難しく、おそらく読んで下さる方にも肩こり、眼精疲労をもたらすボリュームになりますのでこのくらいにさせていただきます。

「富士研の挨拶テストを単会運営や会社経営に活かす」等のタイトルでお話させていただく機会がありましたら、1時間は優に講話ができますので、興味のある方はお気軽にご相談くださいますようお願い申し上げます。

そして、2月には倫理法人会の近畿方面の府県役員や各単会の会長専任幹事が一同に集まる「方面会」が開催されました。参加された人の数だけ思うことはあったかと思えます。私自身はといいますと、おかげさまでたくさんの元気をいただいて帰りました。

実は1月の奈良県倫理法人会設立25周年式典終了後、「県会長職はこれでやっと半分、まだあと半分残っている」という重圧を背負って落ち込むことも少なくはありませんでした。しかし方面会で様々な方々の発表を聴いたり、懇親会で同じ立場の方々と会話したりする中で様々なヒントを得ることができ、再度自分自身を奮い立たせ、一回り大きな自分を目指せるような心持でいます。

また、喜ばしいことに、私は方面会終了後から、すでに来期に向けてのスタートを切るこ

とができています。やはり同じ志を持った多くの仲間たちが結集していることは何事にも代えがたい素晴らしいことだと実感しました。

また、奈良県から参加したメンバーの中にも方面会に影響され、その後の心持ちに大きな変化が生じたメンバーもいます。そんな同志と今期、そして来期も一緒に倫理法人会運営を行えることを、大変誇らしく思っています。

ところで、先月は「組織化」つまり「仕組み作り」について、仕組化の思考法を稚拙ながらご紹介したところ、何人かの方からご質問やご意見の類のものをいただきましたので、ここで追記いたします。

人間は放っておくと楽な方に流される生き物です。例えば「できるだけ早く」と言われたら、あなたはどのくらいの時間感覚で考えますか？「今すぐ、この瞬間に」と考える人もいれば「今日中」と考える人もいるでしょう。もしかすると「1週間以内くらい」と思う人もいるかも知れません。人は物事を基本的に自分にとって都合の良いように解釈します。これを認知バイアスといいます。

「できるだけ早く」は「可能な限り早くするように」、といったニュアンスを示す言い回しですが、「今すぐ取り組む」と考える人は少数派でしょう。認知バイアスのある人間という生き物にとってはそれが極めて自然なことなのです。残念ながら人間の脳や身体は嬉々として自ら進んで働くようにはできていないようなのです。ですから、まずはその前提を認識しましょう。自分は言われてすぐ行動に移すことが難しいのだ、と。しかし、人類の中で何割かの人はその壁を乗り越えて大きな成長を遂げ、社会を動かしてきました。そのキーは、「習慣化」という自己革新でした。人類の歴史は、自己革新の連続で社会を形成してきたのです。自然である「楽な流れに身を任せ」を「不自然を当たり前」にして進化、発展してきたのがヒト祖先から現在のヒト、つまり人類なのです。

前置きが長くて申し訳ありません。「仕組み化」の反対はなんだと思いますか？それは「属人化」です。「特定の社員が担当している業務の詳細内容や進め方が、当人以外では分からなくなってしまう状態」を指し、一般的にネガティブな意味で使われます。組織は放っておくと属人化します。属人化するということは「自分ひとりが活躍し、他の人が自分の代わりになることができない状況」を善と考えることです。それが自分の値打ちを高め、独り勝ちできると考える人は多くいます。自分の会社を振り返ってみてください。「出来すぎた人」が存在する。そんな状況はありませか。だとしたら組織は属人化しています。今は、その人のお陰で事業が成り立っていると思うかもしれませんが。しかし長い目でみたら、「優秀な人が1人いる」＝「優秀な組織」という公式はあてはまらないのです。たとえ「優秀な人」が一人もいなくても「チームとして勝てる」のが組織づくりです。

野球を例に上げてみると、剛腕のエースや超大型の4番打者がいる、というチームは総合力で勝てないのです。それどころか、そのエースや4番打者が他のポジションを含めたチーム全体を強化する邪魔になっていることが往々にしてあるということです。ちなみに私の好きな駅伝はチームの総合力を競います。組織化という言葉が分かりづらかったら、駅伝のチームみたいなものか、と思ってください。

また、2000年代前後「カリスマ」という言葉が流行しました。カリスマというのは、元来、キリストやヒトラー、毛沢東など、啓示力や英雄性に対して崇拜される存在でしたが、この時期大きくカジュアルに意味が変わり、「カリスマ美容師」や「カリスマ社長」などがメディアによって創り出され、もてはやされるようになりました。私は当時直感的に漠然とした不安を覚えました。そして今、その答えの輪郭が見えてきたのです。それはカリスマとは「超」がつくほどに属人化であるということです。組織においてその人がいなくなったらその組織は路頭に迷う危険性が非常に高い。風船が割れそうなくらい膨らんでいます。

経営者、つまりトップのカリスマ性で短期的に組織を牽引していくことは不可能ではありません。しかし、組織の持続性や永続性の観点から見ればカリスマ性のあるトップの支配

が続けば続くほど中間管理職は育ちません。また、トップのカリスマ性ばかりに求心力が集まると世代交代や事業承継の際に「あの人が退いたから」と、大量の退職者を出してしまうという結果が待ち受けている組織も多々あります。属人化の極めて悪い例だと言えるでしょう。

ですから、たとえ企業のトップである社長であったとしても「組織の中では歯車（替えの聞く存在）」として動き、組織の総合力をあげ、組織として勝ち続けることが重要になってくるのです。

最後に、奈良県倫理法人会は、この時期から次年度に向けての準備に取り掛かります。「段取り八分」と私は社内外で口を酸っぱくして言っておりますが、この段取りの中でいちばん重要な部分が人事です。以前から私は「倫理法人会でお役を受ける意義」について皆様に話を聞いていただきました。そのことに加えて、組織の中で動くことはどのような心持ちが重要なことなのか、今回の挨拶にて私また少し書かせていただきました。よくよく読んでいただき、疑問、ご質問、ご意見、些細なことでもいいのでフィードバックをいただけたら幸いです。

「形作り」の年度として奔走してきた今年度の仕上げとして、今から数ヶ月は次年度の組織づくりに皆さん一丸となって取り組んでまいりましょう。

ここで大切なご案内です。

奈良県倫理法人会では毎週火曜日・水曜日・金曜日の早朝に「モーニングセミナー」と称しまして、経営に関する体験発表型の学びの機会を提供しております。

お気軽に参加でき、共に邁進する仲間もできますので振るってお越しくださいませ。

またこの春先からは倫理経営講演会やナイトセミナーなど様々な夜のセミナー行事も開催します。興味を持たれた方は、ぜひお近くの倫理法人会に足をお運びいただくか、私たち役員や事務局のメンバーにお気軽にお声かけ下さい。ぜひ一緒に学んでまいりましょう。



令和6年度4月 県会長挨拶

運と実力の相関について～運を自ら掴む習慣を実践する～

四月を迎え、春らしく穏やかな気候に心和む季節となりました。桜も満開であちらこちらにカメラでその美しさを残しておこうと季節を大切にしている人々を見かけます。私は倫理を学び始める以前はこの季節感に全く興味がありませんでした。例えば、家族や友人から「桜が満開だから花見に行こう」と誘われても、「桜なんか去年も見たわ」と平然と言っている人間だったのです。倫理を学んでからは、この桜の季節になるたびにこのエピソードを持ち出され、からかわれています。

振り返れば、当時の自分は、世の中は自分中心に回っているという、極めて幼稚で自己中心的な考えをしていました。地球という大いなる存在によって生かされているという真実は心のどこにもありませんでした。このエピソードは、恥ずかしながら倫理を学び始める以前の私がどれだけ傲慢な人間だったかのお知らせであります。

さて、今回は、「運」について様々な角度からお話し致します。今まで、組織論をはじめビジネスに集中したテーマで話してきましたので、「ここにきて急にスピリチュアル系？」と不思議に思った方もいらっしゃると思います。確かに、もともと「運」とは「人知を超えた作用」とされています。例えばその人の意思や努力ではどうしようもない巡り合わせなどがそれにあたります。

しかし、最近では、社会のしくみに於いて「構造に基づいた確率の結果が運と呼ばれている」という考え方をする人も現れてきました。例えば、ある交差点で年間に起こる交通事故の件数は、その構造（信号機の機能や停止位置など）を変えなければ毎年ほぼ同じになると言われています。構造を変えない限り結果的に事故の確率は同じ結果になるのです。つまり、私たちの目に見える現象の多くは、その構造（システム）によって定められた確率の結果なのです。

結果、「運を掴む」ためには、「社会のしくみを構造的に理解しコントロールすること」が必要なのです。平たく言うと、自らの事業を成功させるためにまず行うべきことは、私たちを取り巻く政治経済、法や制度、教育システム、家族、社会習慣、医療システムなど、私たちに関わる社会のしくみを構造的に捉えることが大切なのです。社会で成功している人の多くが知性ある人です。皆、努力をしているのです。「そんな回り道をしてられない」思われるかもしれませんが、日本には素晴らしいことわざがありますね。「急がば回れ」と。

では、具体的な話に入りましょう。上に照らし合わせれば、マーケティングとは成功確率を上げるために構造を変え整えることです。これは「完全な運」と考えるよりは「ある程度操作できる確率」捉える方が現実的です。あなたが望む結果を得るためには、社会のしくみを理解しつつ、あなたの分野で必要な要素を検証し、現時点で最も大切な要素を見極める必要があります。

わかりやすい例を挙げると、受験です。受験の合格確率を上げるためには何が必要か。闇雲に全ての科目を等しく勉強するよりも、目指す学校を明確に、その学校がどの科目にどれだけ比重を置いていて、どれくらいの実力が必要なのかを見積る。そして、それに合った実力を身につけるために必要な勉強時間を算出する。このようにして合格、つまり成功の蓋然性を高めていくのです。これには、それぞれのポイントにおいて、物事を見極める分析力や戦略が必要になってきます。仕事で言うと、はじめに結果の報告書を作成し仕事の進捗とともに空欄を埋めていくやり方に似ています。とにかく、やれることなく、やるべきことをするのは、「結果はコントロールできないけれど、行動はコントロールできる」というのはまさにこのことでしょう。

運とは、人生を幸福の方向へと導いていく働きです。あなたの人生で本当に手に入れたいものは何か？なにが起これば自分は幸せになるのか？このようにゴールを最初に設定し、逆算して、目標に辿り着くために時間や労力を使ったり準備をしたりすることが一番大切です。そうすると不思議とたとえ出た結果は変わらずとも、信念を以て準備をしたのと、そうでなかったのとでは、その結果の捉え方が大きく異なります。前者は、「信念を成功のために構造は整えることはできた」という自信を持って何度も何度もチャレンジする心意気をもつことができるでしょう。後者は、後悔ばかりで次のチャレンジが怖くなるかもしれません。

しかし、私たちには、倫理の学びと実践があります。結果に関係なく笑顔で、明朗快活、前向きな気持ちを引き寄せる教えを知っています。

失敗しても大丈夫です。なぜなら、命までは持っていられないからです。また、運一つまり成功の確率は、「成功体験」を積み重ねることも重要です。成功体験を積み重ねているということは、ポジティブなマインドだけでなく、それ相応の知識や戦略が備わっているからです。

さて、この世には幸運と不運がそれぞれに混在しているのでしょうか。私は一人の人間が一つの現象を幸運だと捉えるのか、または不運だと感じるのか、その人自身の内なる心の捉え方に依ると考えています。「幸運か不運かは自分次第できます」と行動して運を味方にし成功する人の話を耳にしたことがある人も多いかと思います。コロナ等、国に危機が起きたときのことを思い出して下さい。このような不運と言われる状況が来たときにそのことを嘆いて何も行動しない言い訳にし、潰れていたら不運、逆に日頃から自分を磨き上げ、前向きに取り組んで逆にピンチをチャンスにできたら幸運なのです。そもそも、自然災害等は、長いスパンで考えると、おおよそ同じ確率で遭遇すると言われています。火事などの過失によるものも年間の数は毎年ほぼ同じですから、常日ごろからリスクヘッジしておくのは「不運」の確率を下げることにつながるのではないのでしょうか。

最近、成功している企業家方の特集を読む機会がありましたが、不思議と皆、見返りなく人に与えているのです。それも、価値を提供している。それが喜びになっている。そうした方々たちの周りは、与えたものが循環しているようでした。これは、倫理にも当てはまります。例えばお役の練習です。多くの方は子供の頃から今まで「得方」しか学ぶ機会がなかったと思います。ですから、難しいことかもしれませんが、「与え方」を倫理のお役でぜひ練習していただきたくお願い申し上げます。与え続けていると自己肯定感が高くなります。自己肯定感とは、「他人と比較せず、ありのままの自分を肯定し、好意的に受け止めることができる感覚」のことを指し、幸福に大きく影響する感覚です。どんな小さなことでも良いです。例えばエレベーターで「開」ボタンを押して他の方に先に降りてもらう程度の小さなこと。少しハードルが高いかもしれませんが、夫婦間で日ごろの感謝の気持ちを言葉にすることも双方にとって自己肯定感の上がる大切なコミュニケーションだと思います。

また、成功者だけでなや、スカウトのプロたちは、とにかく行動量が多く、機会の数を増やすことで、ぐんと成功率をあげています。例えば、渋谷の交差点で、ボウリング場で、スーパーで、公園で、カフェで声を掛けます。もちろんたくさん断られています。しかし彼らのマインドは「失敗はゴールではなく通過点」なのです。私たちは、臆病になって機会損失をし、成功率を下げてはいないのでしょうか。当たれば当たるだけ、成功確率はあがり、幸運になる。そう信じて、今一度この文章を読み返し、マインドセットをしていただきたいです。

最後に、世間でよく見られる「運がいいと思っている人の特徴」をご紹介しますので、興味のある方は参考になさってください。

- ・良好な人間関係
- ・仕事が好きな人が周りに多い

- ・気持ちの切り替えが上手
- ・自分や他人、物事のプラス面を見ている
- ・新しいチャレンジをしている
- ・運動をしている（運を動かす）
- ・朝型人間である
- ・一人の時間を大切にする
- ・片付けが上手
- ・見返りを求めない利他の精神
- ・神仏を大切にし、墓参など、祈りを大切にする
- ・謙虚さを忘れず、他者や自然への感謝の気持ちを持つ
- ・完璧主義に陥らない
- ・自己肯定感が高い
- ・笑顔でいるようこころがける
- ・「思考は現実化する」と考える
- ・悪口を言わない
- ・年初目標を立て、年末にいくつ覚えているか振り返る

いかがでしたでしょうか？

奈良倫理法人会は、事業に関わる様々な事柄、そして何よりも人間性を切磋琢磨する団体です。まずはモーニングセミナーにぜひお越しくださいませ。

万物の息吹を感じる季節です。皆様、そしてご家族、従業員のみなさまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



令和6年度5月 県会長挨拶

過ぎ行く春が惜しまれる頃となりました。ゴールデンウィークも後半となり、皆様方は仕事に家庭にといつもより忙しくされているのでは、と思います。

さて、私は先月、大阪市倫理法人会の経営者の集いにて、「法人レクチャラー」として初めて事業体験報告を致しました。ここでは、自分が経験した苦難を倫理法人会での学びによっていかに克服し、会社の業績を上向きにしてきたかを報告しました。

この「法人レクチャラー」としての事業体験報告については、実は半年以上前から準備を始めていました。準備をするということが何を意味するかと言いますと、自らが犯した過去を振り返り、反省し、二度とすまい…と心に刻む繰り返しの連続なのです。自分では覚えていないことも多いので、正直に答えてくれる近しい人に自分の愚行をたずねるたびに、慙愧にたえない、顔向けできないことが芽づる式に出てきました。

飲酒運転による道路交通法違反、部下や同業他社の方を怒鳴りつけるモラハラ、店や郵便局、銀行で暴れる威力業務妨害罪、女性に対してのセクハラ行為や発言など、覚えていないことも含めて数え切れない程ありました。

愚の骨頂とはまさにこのこと。そして「なかったことにしたい」と願う自らの卑怯さに向き合う必要がありました。時には落ち込みが激しく、数日間抑うつ状態に近くなることもありました。それも「罪を犯してしまった自分」への落胆であり、被害を与えた人々への贖罪に至るまでにはそれ以上にずいぶんと時間がかかりました。私はなぜ自分と同じ人間に対して相手の尊厳を破壊する行為ができたのか。相手がどう思うか、どれだけ傷つくのか全く気にせず相手を踏みにじったのか。考えるうちに分かったことは、相手を自分と同じ人間として見ず、「モノ」またはそれ以下としか見ていなかったということです。

この自分の過去を振り返るという一連の取り組みにより、自分は人間としてどうなのかと問い、少しずつ被害者の方々への申し訳ないという贖罪の思いを持つようになりました。今でもどうやったら償えるのか模索しています。そしてこの振り返りのプロセスにより、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四悪趣の生命だった自分が、人界という人間らしさを持つところまで成長できたように感じます。私は自ら犯してきた間違い一つ一つを忘れずに考えをめぐらし蓄積し命に刻んでいきます。また同じことを繰り返さないように。

さて、今月は、世間で注目されている AI と教養についてお伝えします。AI は、一般的には「人類が実現するさまざまな知覚や知性を人工的に再現するもの」という意味合いがありますが、実際のところ、決まった定義があるわけでもなく、学問では領域横断的に用いられています。今後、人類にとってどの分野においても欠かすことができないでしょう。

AI を取り巻く議論の中に「シンギュラリティ」という概念があります。これは、AI の知性が人間の知性を超えるタイミング（技術的特異点）を指します。

AI は日々進化を遂げており、その中でシンギュラリティが来るのか否かの議論もなされています。「シンギュラリティが来る派」の代表格は、レイ・カールワイツ博士です。2029年に AI の知能が「人類並み」になり、2045年にはシンギュラリティが起こる。その結果、人類の価値観、そして生活が大きく変わり、結果として人間の仕事が機械に奪われたり、人間の身体の一部として AI が機能したりする、との考えです。これに関して知見を深めたい方は、この考え方の根拠となっている「ムーアの法則」と「収束加速の法則」調べていただければ幸いです。ここで簡単に申し上げますと、ムーアの法則は、経験則に基づいた考えです。それは18か月ごとに集積回路に用いられるトランジスタの数が2倍に増えるということで、半導体技術の目標がそれにあたります。同様に AI もこのように発展してくると2045年にはAIが人類を超えるのではないかと考えられています。また「収束加速の法則」

は、新しい技術が発明されることによって、その技術が次の進歩までの期間を短くすることです。技術の発展・進歩が線状ではなく、ある時点を超えると、爆発的に飛躍することが今までもありました。（指数関数と言います）それにより、シンギュラリティは起こるのではないかと予測されているのです。

一方、「シンギュラリティは来ない派」も多くいます。なぜかという、先ず、AIには学習能力の限界があるという考えです。人間がAIに学習させなくなったらAIの能力はストップします。AIの手綱を握ることで、AIは人間の脅威にはなり得ないと考えられています。次に、AIは永久に進化を続けることが不可能なのではないかという考えで、ムーアの法則に反する意見です、これはNVIDIAの社長、ジェン・スン・フアン氏が述べています。最後に、AIは人類が発展させる以上それを越えることができない、という考えです。また、モラルジレンマも研究半ばであり、安易にAIをどこかしこに放つわけにはいかないでしょう。

2023年にChatGPTが一気に流行りました。皆様の中でも取り組んでいらっしゃる方は多いと思います。それにより人類が行なうよりもずっと速く正確で、作業の量も多くできるようになりました。AIの懸念点であった創造性（歌詞作成、小説執筆、イラストなど）を必要とする作業、コード生成やプログラム作成など専門的な技術ができるAIも登場しています。AIに取って代わられる職業も思ったより多いでしょう。例えば、医者でさえ、受診時に膨大なデータから一番類似した症状を取り出し、それにのっとって処方をすることもできるのです。

AIは人間の生活を便利にする補助的なものです。どんなに素晴らしいものが開発されたとしても人間の判断に基づいて、人間の判断でコントロールできなければならないのです。行き過ぎた科学偏重主義に陥らず、モラルを以てAIと共存していくために必要なことは、教養です。教養は知識とは異なります。教養とは、個人の人格形成にとって重要であるのみならず、目に見えない社会の基盤でもあります。にもかかわらず、大学教育において、一時期教養離れを助長する愚策がありました。共通一次試験の際は理系の人でも文系科目を受験しました。逆も然りです。センター試験が変わって、科目数が減り、文系理系の試験に偏りができました。大学でも、教養課程は削られ、即戦力グループと、先端技術グループに分けられ、一部の大学を除き細分化された専門学校のようになっていました。しかし、学問には学ぶべき順序があります。教養課程（もっと言うと小学生から）は、人間としての素地を作る、教養を身に着ける必要不可欠なものです。現在はそれに気づき始めた大学が教養課程を復活させています。

幸運なことに、私たちは倫理法人会に於いて、一時は忘れ去られた教養課程を含むもっと深いところにある「純粹倫理」を学んでいます。人と人のみならず、人と自然、人とモノなど、様々なつながりを体感しています。そして倫理法人会の役職を受けた皆様は、組織運営の実地勉強をしています。組織運営は、今のAI技術では扱えないのではないかと私は考えています。特に我々の世代に於いて、経営者には人間的魅力やリーダーシップといった人間くさい魅力が最も重要ではないでしょうか。AIは補完する事はできてもAIが代わりに牛耳ることは非常に受け入れがたいと思います。

また、今後のリーダーシップとはどのようなものかを以前にも書きましたが、今まで重要視されていた「統率力」ではなく、「志」が必要となるでしょう。「志」が大切となれば経営者は信念を持って本気で生きていくことが必要になります。軸を持ち、ブレることなく信念を持った生き方を日々学んでいるのが我々倫理法人会です。

また我々の教科書である「万人幸福の栞」の第十条「働きは最上の喜び」に書かれているように私たちは「金銭等の目に見える報酬」よりも「働き甲斐等の目に見えない報酬」が大切と考えます。この強い信念と生き方から成る人間力に支えられた「志」はAIでは決して語ることはいえないと思います。我々は倫理法人会でこの人間力を磨いております。

ところで、ゆったりした江戸時代が過ぎ、日本は文明開化を迎え西洋の影響を多く受け

ました。新しいものが山ほど驚くほどのスピードで入ってきたのです。人々の欲は刺激され欲を満たしたいという欲求に駆られます。しかも、あらゆる分野にビジネスチャンスがあったので様々な産業ができました。多くの人が企業を創立し、現在大企業と言われている会社はこの頃にできたものが多くあります。ざっとくり述べてこれが日本の近代化でした。

ユダヤ・キリスト教的観点から見た労働とは、旧約聖書の創世記第三章を引くと、人間（アダム）が神との接触を失った為に額に汗して自らの「罰」として与えられる行為であると考えられています。「お前は顔に汗を流してパンを得る。土に帰るときまで」。しかし新約聖書によれば、「労働は新しい意味をもちます。労働は神の創造の業に参画することになったのです。（中略）労働や職業は、人間が自立する道であり、また他者を愛するためなのです」（コリントの信徒への手紙一）。とも書かれています。

一方、日本人にとって労働とはどうであったのでしょうか。一般的な意見としては、勤労気風の高さ、所属集団への強い忠誠心と献身・奉仕精神が特徴と考えられています。この特有の労働観は日本人の伝統文化ならびに国民性により育てられてきました。勤勉性については、神道、仏教、儒教を基に職業倫理と勤労哲学が形成された結果であるという研究があります。また、集団への強い帰属意識は日本における価値体系の価値実現の場として機能しており、集団から受ける恩恵、それに対する報恩の意識に基づいています。これは、共同体のために自己犠牲も厭わない人間性を育てる構造となっていました。私は、日本人の労働観は「働きは喜びであり、生きがいであり、そして自己成長であるべきだ」と考えています。そして仕事は、本来「周囲の喜びのため、誰かの幸せのため、社会を良くするためにやるもの」とであると信じています。2022 年現在、わが国で「仕事満足度」（ワークエンゲージメント）を感じる従業員の割合はわずか 5% だそうです。そして生きがいを感じられなく早期退職したり、この会社にも成長できないと見切りを付けて起業したりする若者もいます。それは、若者の期待に応えられない私たちの責任でもあります。私の理想とする仕事観や労働観を広く実現出来たら、若者にとっても私たち中高年にとっても、そして話を戻しますが、AI にとってもより良い会社ができると信じています。

また、長々と書きましたが、木々の芽吹くこの時季は体調を崩しやすいそうです。どうぞご自愛くださいませ。

日の出の時刻は日々早くなってきておりますゆえ、このような時にこそ倫理法人会のモーニングセミナーにぜひ一度ご参加ください。



令和 6 年度 6 月 県会長挨拶

6 月を迎え梅雨入りも間近になりました。私は昔から雨降りが大好きな人間です。しかも早朝の雨音をとりわけ好んでいます。早朝の雨音が目覚めに落ち着いた気分をもたらしてくれます。

このような朝には自坊に出て様々なデスクワークを行います。すると思いのほか捗るので。雨音にはリラックス効果と集中力を高める効果があると言われています。水滴が次々に落ちて流れる音は、鬱屈した心や心的な疲労を水で洗い流すイメージにつながり、すっきりした気持ちになるそうです。

また、雨の音のリズムは集中力アップにつながるそうです。ですから、雨の日は仕事が捗るのですね。

「晴れの日には枝が伸びる。雨の日には根が伸びる」という実業家の福島正伸氏の含蓄のある言葉があります。倫理法人会では、この雨の日には伸びる、目に見えていない根の部分を読んでいきます。ですから皆様も雨降りの日は仕事に取り組むのに最適だ、と心を切り替えて励んでいただきたいと思います。

さて、奈良県倫理法人会に於いては、今月 19 日が今期の締め切り日です。ですからラストスパートの勢いがあり活気づいております。実はこの期末目標は、すでに年度初めの段階で確実に達成ができることを見越した数字です。私は頻繁に「初めに結果の報告書を作成し、仕事の進行とともに空欄を埋めていく。これが企画というものである。」と申ししておりますが、この「空欄を埋めていく」部分の最終段階を、現在迎えています。

ここまでくると、いい気になって油断する人も出てきます。それは失敗する最も大きな要因の一つです。すごろくでもゴールの手前のコマに「振り出しに戻る」などといった大ダメージを喰うコマが必ずありますよね。それと同じです。したがって、結果を出す直前の気の緩みには重々気を付けていただきたいと思います。弛まず「晴れた日に屋根をなおす」ような地味な作業を着実に行うのみです。

上の話は各社の事業でも同様です。派手で奇をてらうような戦略・戦術をとる会社は今や時代遅れであり低迷します。こんな時代であるからこそ、堅実な組織づくりをはじめ、倫理の学びを丁寧に着実になぞることが大切なのです。

奈良県倫理法人会の今年度の方針は「組織づくり」をテーマに初心に返って取り組んできました。最終段階に於いては、今一度皆さんの知恵をお借りしながら、「後始末の実践」に取り組んでいく所存です。

さて、今月は奈良県内 4 番目の単位倫理法人会である奈良中央倫理法人会が開設します。開設の式典は 8 月 4 日に予定しております。開設の締め切りは 6 月 19 日。式典の準備が早いと思われるでしょうが、私共は既に今年 2 月より夕方から夜にかけてのセミナーを月に 1 回開催してまいりました。いずれの会も多数の皆様にご参加いただき、大盛況のうちに終えることができています。そして準備委員会の皆さんにもご尽力いただいておりますし、周囲の皆様のご協力も十二分にありますので、こちらもすでに結果が見えているのです。締め切り翌日の 6 月 20 日からは毎週木曜日にプレモーニングセミナーを開催することも決定しており、ありがたいことに私は第一回の講話をさせていただきます。

ご参加いただく皆様に、一つでも聞いてよかったと思っていただけるように、また、お持ち帰りいただけるものがあるようにとの思いで、講話の内容を検討しています。6 月 20 日は朝 5 時半に奈良ロイヤルホテルにぜひお越しいただき、モーニングセミナーにご参加いただきたきお願い申し上げます。

また、今月は次年度の準備にも取り掛かる時期です。6 月 6 日、7 日に熱海で倫理法人会の次年度の方針説明会があります。この方針を受けて奈良県倫理法人会の次年度の方針を作成します。また、それとは別に奈良県独自の取り組みもあります。次年度は 3 か年計画の最終段階である、「内容づくり」の年です。既に様々な方にお手伝いいただき、ベータ版（途中段階・試用）を走らせていることもあります。熱海で発表される方針と、このこと

を合わせて、今月中には次年度の奈良県倫理法人会の方針を決定させていただきます。

そして、さらに肝心なことに、次年度の役職者の登録がございます。皆様に次の 1 年間のお手伝いをいただくようお願いをさせていただきます。

常に申し上げておりますが、「せっかく倫理法人会で学んでいるのであればお役を受けなければ損」だと私は確信しています。以前にも、得方と与え方の話をしましたが、この世で成功している人のほぼ全ての人が「与えている人」なのです。具体的には、物ではなく価値の提供です。価値を提供し、人に喜んでもらって対価を得ているのです。人は誰かに何かを貰った時、その人にお礼をしなければ申し訳ないと思います。これを返報性の法則といいます。そしてあげた側は相手にお礼を期待することが少なからずあります。その結果、相手にしつこく「お返し」を迫り良くない結果を招きます。例えば、体験無料のジムで体験後にしつこく営業電話をしてクレームや悪評がたつなどです。

私たちが学ぶ得方と与え方の考え方に基づくと、純粹に喜んでほしいという気持ちで、与えて、与えて、とにかく与え続けることが大切なのです。エンドレスでギブしていると、不思議なことに回り回ってやがて自分に返ってくるのです。

大ヒットした映画「ペイフォワード」のように、自分が受けた善意を別の誰かへ送り、次の人、その次の人もそうすることで慈愛の循環が起こることに似ています。万人幸福の葉では二宮尊徳先生のたらいの水の例話があります。

「欲心を起こして水を自分のほうにかき寄せると、向こうに逃げる。

人のためにと向こうに押しやれば、わが方にかえる。物質も、人の幸福もまた同じことである。」

ですから、私たちは常に与える側でいるべきなのです。

しかし、それを実践するのは簡単なことではありません。残念ながら我々の多くは学校教育で得方しか学んでこなかったからです。受け身の学校教育の延長線上には、現在受け身で済ませてきたがために行き詰っている様々な職種があります。雇われと言う感覚もそうです。我々は雇われではなく経営者です。雇われ側とは全く反対の立場の人間こそ、徹底的に与え方を学び実践すべきなのです。

倫理法人会でお役を務めることは、与え方を身に着ける最も優れた方法です。ぜひ、頼まれたお役を素直に受けてください。1年後、いえ、1年経たずに与え方を習得し、ご自身の人間的成長だけでなく事業にも良い影響が出てきます。

残念なことに、与え方を知らず、サービスを受け取る側にいるうちはいつまでも何につけてもお金を払い時間を費やし続けなくてははいけません。それは勿体ないことです。

週 1 回の講話者の良い話を聞きに来て感動したり、行動に移す決意をしたりしても、翌日には忘れてしまうのは残念なことです。しかし、このような人が多い故、実践を始めた人は成長することができるのです。一步踏み出て快くお役につく利点は、組織づくりを現場でみっちり学び、事業に応用できる機会を得られることです。

特に中小企業の経営者の方にはお役を受けることで中小企業の経営者にありがちな事業にとって悪影響となる思考を変えることができます。全て自分の思い通りにする、いつまでも社長気分である、わがままな性格などなど。

そして倫理法人会のお役は有期ですので、「ずっと自分が引っ張っていかなければならない」という考えを少しずつ軌道修正し、周囲と協働することで、周囲に合わせることで、お互い協力しあうこと、他人に共感し話をしっかり聴くこと（傾聴）、妥協することなど、自分も他人も大切にするアサーティブなコミュニケーションを学ぶことができます。そして広い視野を持ち、俯瞰的に物事を見つめることができるようになります。今後のキーとなる「横社会」に順応するための大切な要素がたくさん詰まっています。

倫理法人会会員の皆様には近々、倫理法人会の県会長・単会長からお役のお願いの電話が鳴るでしょう。その際には間髪入れずに「はい、イエス、喜んで」の心で役を受けて下さい。

戸惑う方が殆どでしょうが、かくいう私もわずか 5 年弱前には朝礼の挨拶実習とモーニングセミナーの歌を歌いに来ていただけでした。「さあ今日は水曜日だから歌を歌いに行くぞ」と気合を入れてモーニングセミナーに参加していたのが昨日のように蘇ってきます。そん

な私が全てにおいて「はい、イエス、喜んで」の精神でいただけで、今では奈良県倫理法人会会長という重責を担わせていただき、且つ皆様のご協力のもとで日々成長させていただいております。お役を受けて本当に良かったと心から思える自分がいるのです。皆様にもこの経験をしていただきたくお願いしております。重ね重ね、お役をお受け下さるようお願い申し上げます。

今年も今月で半年が過ぎますが、残り半分悔いの無いよう精一杯頑張らしましょう。これから梅雨冷えの肌寒い日もありますが、くれぐれもお体を大切にしてください。そして、雨の日は仕事がお休みとか予定を変更するとかの業種の方もお見えでしょう。雨の日の朝には根の部分、目に見えない部分、心の部分を一緒に学びたいので、ぜひお近くの倫理法人会のモーニングセミナーにお運びください。



令和6年度7月 県会長挨拶

いよいよ夏も本番です。私にとっては1年で一番暑さを感じる月です。実際に大変暑い日が続いていますが、皆さま方に於かれましては熱中症などに気を付けながら日々お元気に過ごされていることと存じます。振り返れば、今年は日本付近への太平洋高気圧の張り出しが例年と比べて弱かったため、梅雨入りは平年よりかなり遅く、近畿地方では夏至にあたる6月21日でした。梅雨入りが遅い年は雨量が多くなる傾向にありますので、安全には十分にご注意いただきたくお願い申し上げます。

さて、奈良県倫理法人会は今年度も6月19日に年度目標を達成いたしました。しかも、全ての単位倫理法人会（以下単会）で達成という、最高の形で目標に到達できたのも、多くの会員の皆様をはじめ、単会役員の皆様、単会長の皆様、そしてサポート役に徹してくれた奈良県倫理法人会の役員及び事務局の皆様のご尽力の賜物だと深く感謝申し上げます。

もちろん、ここに辿り着くまでには何度か苦しい時期もありました。特に中間目標が未達の折には、「本当に大丈夫なのだろうか？」と不安に襲われた方も少なからずいらっしゃったことと思います。しかし、どんな苦境に立たされても、私たちの心の奥底には常に倫理の学びがありました。倫理の学びでは常に苦難と対峙したときにどのように乗り越えていくかを勉強しています。そこで、未達成の単会においては直ぐにPDCAサイクルでいうところのC（check）をしていただきました。一般的にPDCAサイクルはP（plan）から回すという常識がありますが、効率よく停滞させずサイクルを回し続けるためには、Cからはじめる必要があるのです。これにより現在の状況や変化を把握し、後半戦へ向けて具体的な計画に取り掛かることができ、目標達成が叶いました。

この経験を振り返ると、私たちは経営者の団体であるので結果が大切なことはもちろんですが、結果までのプロセスをしっかりと分析することが大切だと分かります。私は常に「結果よりプロセス」、「数字よりストーリー」と口酸っぱく言っておりますので、「またか」と思われる方もいらっしゃるでしょうけれども、良い結果を出すには良いプロセスが必要なのです。一つ一つの小さな経過を大切に、結果が良くても悪くても振り返り改善する。これが伸びる組織なのです。

さて、今期の奈良県倫理法人会では「形づくり」に取り組んできました。特に組織論を用いながら組織の形態の在りようを皆さまと共に学んで参りました。その中で、今後皆さまの会社に取り入れてはどうかと考えられる組織形態に関しても提案をしました。皆さんを含め多くの中小零細企業では、トップダウンの組織形態を採用し、トップが指示を出し、従業員は指示に従いながら企業目標のために動いて組織は回っていました。意思決定のスピードが早く、大きな決定も容易であるメリットがある反面、組織の総合力は上層部の能力に左右されやすく、上層部が判断を誤ると経営危機に陥ってしまうというデメリットもあります。今の時代にこの縦型の組織形態は我々のような事業主にとっては非常にリスクです。

一方、私がみなさんに提案したティール組織とは、社長や上司がマイクロマネジメント（部下の行動を細かく管理・チェックする過干渉）せず、目的の達成に向けて進化し続ける横型社会の組織形態です。近年、注目を集めている組織形態ですから、書店やアマゾンでも簡単に書籍を入手することができます。既に私からきいた皆さまも、この挨拶文をお読みいただいている皆さまも、ぜひ1冊でよいので組織論に関する書物を読んでいただきたいと思います。インターネットの情報は一見「分かりやすい」のですが、端折っていることが多く勘違いするような表現も散見されるため、ぜひ書物を手にし、重要な部分に線を引きながら自分の会社に当てはめながら読み進めてください。

さて、倫理法人会の活動においても、トップダウンの縦社会からティール組織という横社

会の組織がこれからの組織運営に大切であります。また、組織論と相まってリーダー像も再考せねばなりません。組織の構成員を率いて目標達成のために必要な能力や考え方を模索する理論をリーダーシップ論と言います。この考えから、現代においては、剛腕なカリスマ的なリーダーの存在よりも、支援型であるサーバントリーダーが必要だと私は考えました。ですから、私はサーバントリーダーの養成が急務であると皆さまに説明し続けてきました。

また、倫理法人会のような非営利組織、そして私共のような中小零細企業で陥りやすい一番の問題はトップダウンによる属人化です。属人化には様々なリスクが伴いますが、今後の企業において属人化の重大な問題の一つに事業承継があります。カリスマ的リーダーシップをもった創業経営者から経営を承継するには相当な時間と労力を要します。承継できずに事業を売却、廃業した企業も少なくはありません。属人化のデメリットを解消するためには、属人化の解消、つまりできるだけ脱属人化することが肝要です。脱属人化を図りながら組織として動く、組織を上手く回すために業務標準化の学びもこの「形づくり」の期間に学びを深めて参りました。

この学びを落とし込んだ奈良中央準倫理法人会の開設は、8月4日の開設式典を待つのみです。奈良市倫理法人会の皆様は学びを深めるにつれ数字に対する意識が高まってきたように感じられます。自分たちの目標達成の数字だけではなく、奈良市に倫理の活動が広がるために必要なティッピング・ポイントに対する意識です。これは転換点とも言い、物事がある一定の条件を超えると一気に広がる現象を指します。ティッピング・ポイントに至る原則として、少数者の法則、粘りの要素、背景の力のティッピング・ポイントそれぞれを説明すると、少数者の法則は「影響はごく少数の人間から広がる」。そして、粘りの要素は「変化に関するメッセージが強いほど粘り強く広がる」。さらに、背景の力は「変化が起こる文脈によってその影響の波及力が異なる」となります。まさに倫理拡大において意識しなければならない原則です。

今期においては、奈良中央倫理法人会は50社で開設するという段階を踏みましたが、来期には必ず100社を達成すると共に正倫理法人会の設立、更には奈良市と合わせて204社突破を目指します。今日この日から心を新たに、奈良市に倫理の活動を広く、深く根付くよう皆さまと一丸になって前進して参ります。

話は変わりますが、私は立場上、この数か月で全国的に倫理法人会の単会の方々から講話のご依頼を受けております。それぞれの単会にお伺いさせていただくたびに、全ての単会で自らの「色」を発揮した多種多様な取り組みをされているのを目の当たりにし、感激をすることばかりです。講話をしに来た私自身が逆に学びの機会をいただいていることに感謝しております。そして奈良でも良い所は取り入れようと思案します、と同時に思うのです。奈良の各単会らしさは何だろう？と。思えば客観的に自分の携わっている組織を見ることはよほど気を付けなければわかりません。せっかく他から学ばせていただいているのですから、奈良の良い所、改善すべきところを皆さまにどんどんフィードバックしていこうと考えています。

様々な所で講話を重ねる私ですが、以前、ある倫理法人会の先生から「講話の内容はある程度絞り込んで、同じ内容のものを何度も何度も話すと、新しく見えてくるものがある」と教えていただきました。その言葉を噛みしめながら講話を重ねていくうちに、繰り返すことで自分の人生を何度も振り返ることができるという意味だったのではないだろうか？と考えるようになりました。同じ内容の講話を重ねるたびに、過去の自分を、その時の自分が、自分自身に都合のいいように書き換えていたことや、自分の記憶から消して無かったことにしていた不都合な真実が蘇ってきました。気づかされることは実に多く、時には恥ずかしさと後悔で酷く落ち込むこともありました。しかし、だんだんとその現実から目を背けないように向き合っている自分も現れてきました。ですから、今となって、講話はしっかりと自分と対峙し自身を振り返るため重要な位置づけにあります。

他の単会で講話をしていて、気づいたことがもう一つありました。それは私の中でとても大きな衝撃でした。「聴者によって自分の講話の内容が変化する」ということです。これは一体どういうことだろうと考えながら帰途につくのですが、なかなか答えが分りませんでした。ある日の早朝、いつものように自坊で事務作業を淡々と片付けている時に、なぜか今までで分からなかった答えが少しずつ見えてきました。聴者の反応と呼応するように私の講話が変化しているのは、聴者の領きや眼差しなど、私の講話をどういう心持で聴いてもらっているかを自分が肌で、無意識的に感じて、自然と聴者に合わせるように講話の内容や話し方が変化するのではないだろうか。そのような結論に達しました。そしてそのことについてインターネットで検索すると、コミュニケーション関連のサイトに「心理的ストローク」という単語を見つけました。「ストローク (Stroke)」とは、人とのコミュニケーションから得られる精神的刺激で、ある内容を受け手がどう感じるかによって「肯定的ストローク」と「否定的ストローク」に分類されるとのこと。確かに思い返せば、真剣なまなざしで領きながら聴いて下さる方が多い単会では、調子よく話しをさせていただいていることを講話の途中で自覚します。これがお互いにとっての肯定的ストロークなのでしょう。もちろんその逆もあります。この知識を得てからは講話をしながら聴者の方との肯定的なストロークに目を向けるよう一層配慮しています。

最後に、他の単会で気づいたことをもう 1 点挙げます。通常、多くの単会で「感謝カード」というフィードバックのための自由記述があります。講話者から聴いた内容について感想や質問といったフィードバックを聴者の方々からいただけます。私は講話をした日には、モーニングセミナーを終えて自坊に戻り、一番にこの感謝カードを読ませていただいて自分の講話を振り返ります。その感謝カードの内容を見ると、真剣に聴いていただいている方が多い単会では感謝カードの内容がきっちりした文章になっていて、着眼点も素晴らしく、かつ質問も多いのです。ものすごく充実した感謝カードを頂戴したことで肯定的なストロークができたように感じるができます。しかし、多くのその感謝カードの中で、私の心が『喜び難い』と感じるパターンが3つあります。1つ目は、論点がずれている感想です。2つ目は「良かったです」といった一言のみの感想です。「どの部分がよかったのだろうか?」「もっと話を発展させてほしい」と贅沢を言ってしまいそうになります。3つ目は「なぜ伝わらなかったのか」と思うような感想で、感想カードを書いた方が私の話を曲解、または誤解されている「感想」です。

良い感想とはどのような物を指すのか。それは大学のリアクションペーパー（講義毎に提出する出席確認と小レポートを兼ねたもの）の書き方が参考になります。要点を述べますと、自分が一番興味を持った部分や疑問に感じた部分を選び、その理由や根拠、そして自分はどうか考えたのかを必ず述べることで、きちんとした感想となります。とは言っても、普段から感想はおろか、報告書など実務的な文章しか書いたことが無い人間には難しいのではないかと感じました。そこで、小論文をはじめとする文章の書き方に関する情報を収集したところ、「初心者には『PREP 法』という『お作法』に則って書く癖をつけよう」と知りました。PREP 法とは、Point（結論）の P、Reason（理由）の R、Example（具体例）の E、Point（結論）の頭文字を取ったものです。起承転結で育ってきた日本人には馴染みのない書き方かもしれませんが、先に例を挙げた大学のリアクションペーパー、高校や大学受験の小論文、TOEFL のエッセイパートなど様々なところでは標準的な文章構成だそうです。はじめにくる結論とはメインになるアイディアです。例えば「人は枝葉の見える部分より見えない根の部分を大切にすべきである」といったようなものです。次に理由や具体例で「なぜそう考えたのか」というメインアイディアをサポートする文章を書きます。その際には自分自身の経験や知識などを引き合いに出しつつ具体的に記します。最後は、最初のメインアイディアである結論で挟んで終わりますが、最初に使った結論の文章をそのまま持ってくるのではなく、プラスα添えた方が良いでしょう。例えば「自分にとって最も大切な根にあたる〇〇のもとにより事業のさらなる発展に加え、この経験を人々に伝え倫理拡大をしていく決意です」といった書き方です。

また、文章を書き慣れていない人が多いから一言の感謝カードになるのだと仮定すると、「良かったです」の奥にはちゃんとなぜ良いと思ったのか、その理由は何かなど、書いた方の心の動きが存在すると考えられます。感じてはいるけれども言語化できない、そういう

う経験は誰しも経験したことがあると思います。私は、感想カードを「良かった」だけでなく、「どうしてそう思ったのか」、「講話を聴いてこれからどうしたいと考えたのか」など自分の中で講話を租借し感想を言語化できるようになることで、倫理を語り拡げたり、自己理解を深めることができる。つまり円滑なコミュニケーションを図るためにも、大変有用だと感じました。今後、皆さまと一緒に、講話を聴く姿勢を見直し、感謝カードの書き方を学んでいきたいと考えていますので、楽しみにしてください。

最後になりましたが、毎月の会長挨拶を読んで下さる方や講話を聴いて下さった方から、身に余るほどのお褒めの言葉をいただくことがあります。特に「寺尾さんだからできる」と言われることが多いのですが、これは全く違います。私も皆さんと同じ凡夫であり、分からないこと、知らないことがたくさんあります。その中で私が気にかけていることは、考え方のヒントや答えを求めつづけてアンテナを張り巡らす、ということです。試行錯誤を続けているとそのうち徐々に自ずと答えの近くに辿りつきます。例えば、友人や知人がその分野に詳しいことが分かったり、「まさにこれ!」という書籍やインターネットの記事に偶然出会ったりするのです。そしてその知識を自分の物にする努力をします。これは皆さんも普段から仕事などで行なっていることだと思います。つまり私もみなさんも同じであり、私たちは伸びしろがたくさんある発展途上であることをくれぐれもご理解いただき、今後とも手を携えて倫理根本に成長して参りましょう。

近頃はより厳しい暑さが続いております。皆さま方におかれましては、くれぐれも熱中症対策を入念にお願い申し上げます。爽快な夏空のような気持ちと晴れやかな笑顔で今月も元気いっぱい倫理推進拡大を楽しみましょう。



令和6年度8月 県会長挨拶

年度末のご挨拶

立秋を前にまだまだ暑さ厳しく、熱帯夜が続いており、皆様方のご健康を案じる日々でございます。この暑さも、あとひと踏ん張りです。今月上旬の立秋の声にはじまり、広島・長崎の原爆の日、そして全国高等学校野球選手権大会（甲子園）の開幕やお盆を迎える頃には朝と夜は少しずつ過ごしやすくなって参ります。そして気が付けば赤とんぼが飛び始め秋の訪れを感じることでしょう。あと一息、暑さもこの季節ならではの風物詩と楽しみつつ、暑さに負けず頑張ってまいりましょう。

さて今月8月は、倫理法人会における年度の最終月です。奈良県倫理法人会では6月19日に令和6年度、つまり今年度の数値目標を達成し、達成祝賀会を晴れやかに開催することができました。これもひとえに会員の皆様方の情熱とご尽力、弛まぬ前進の賜物と存じます。深く感謝申し上げます。

また7月には、次年度に役職を担ってくださる皆様にお集まりいただき、次年度役職者基礎研修を行いました。さらに奈良県倫理法人会はじめ、各単位倫理法人会ではすでに9月から始まる次年度、つまり令和7年度の活動に向かって動き始めており、現在は、いわゆる助走の期間です。この間、多岐にわたる計画を立てておりますが、計画を立てるために、この1年を振り返って、達成できたこと、未達成に終わってしまったことの両方を一つ一つ吟味しました。つまりPDCAサイクルにおけるC（チェック）を徹底的に行ったのです。この取り組みを通じて、私だけでなく、関わった皆様方が、改めて「物事はCから始まる」ということを再認識し、PDCAサイクルの重要性を理解することができました。

さて、私の会長の任期は来年度で終わります。この間に達成可能な項目と、そうでない項目があると考えています。前者については自ら動くのみなのである意味難しいことはありません。しかし後者については率直に述べると、私の手から離れる、ということになります。申し訳なくも、未解決の課題を残したまま、次のお役の方に引き継がなければなりません。

しかし、私はそれが心残りだとは考えていません。実のところ、こうなるであろうことは、2年前に会長のお役を引き受けた時点で見えていました。当時の奈良県倫理法人会の状況分析を行った結果、「この3年間で優先すべき事項」を基に方針を決めました。ここに来て、まだ残っている項目があるからと言って今更それを崩すことはできません。

つまり、現時点において、2年前の私が立てた計画は概ね予想通りに進んでいると言っても過言ではありません。今、残っている項目について少し気がかりであるのも、計画が当初の通りうまく進んでいるからであると考えられます。

この2年間、特に他府県の年度末の達成祝賀会や開設設立式典など各県の様々な行事に参加することが多々ありました。ありがたいことに、行く先々で多くの方に「奈良県倫理法人会は明るくなったね」とお褒めの言葉をいただくことがだんだんと多くなりました。私が明るくパフォーマンスの能力に長けているからではありません。そのようにパフォーマンスに長けた方は全国的に見てたくさんいらっしゃいます。この「今の奈良の明るさ」を評価していただくたびに、会員の皆様方が生き活きと喜んで倫理法人会の活動に参加して下さっている証左だと胸が熱くなります。そしてそれが私の何よりの励みになっています。

最後に、人生が有限であることと同様、会長の任期も同様に期限があります。限られた期間の中で、まずは、自らの自分の置かれている立場を認識し、さらには俯瞰的に物事を見て、現代社会や歴史なども含めて物事を考えていくという練習をしっかりとすることができました。来期は、いつも倫理で学んでいる重要事項の「捨我得全」、「得るは捨つるにあ

り」。そこに立ち返って、しっかりと最後の後始末の実践の1年を歩いていく決意です。

会長職最終年3年目の来期も、皆様を全力でサポートしてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

猛暑のみぎり、健康には十分にご留意していただき、さらにご活躍されますことをご祈念申し上げます。



令和7年度9月 県会長挨拶

倫理法人会では9月からが新年度。令和7年度の始まりです。新年度を迎え皆様方におかれましてはやる気に満ちた今日をお迎えのことと存じます。さて、9月9日は「重陽の節句」です。古来中国では奇数は縁起が良く偶数はよくないとされていました。つまり9月9日は陽数の最大値である「9」が重なる大変縁起の良い日ということになります。重陽の日には別名「菊の節句」とも呼ばれています。皆様方もこの日には菊の花を愛でてみてはいかがでしょうか。

さて、今年度の重点目標ですが、「人づくり」「形づくり」「内容づくり」の3か年計画でいう最後の「内容作り」に入ります。詳しくは9月12日の年度はじめ式の際にお伝えしますが、端的に言いますと、倫理で言う「拡充」の「充」に取り組む1年になります。

皆様はお気づきかもしれませんが、私の話は、「拡」と「充」でいうと「充」の比率が圧倒的に高いので、時々「では拡大の『拡』は『充』より劣るのか？」というような質問が上がってきます。私は、2つのどちらが先かという議論は、意味をなさないと考えています。なんと言っても拡充の両輪であるからです。

ただし、目標を立てたり、振り返りをするにあたっては「拡」と「充」のどちらが容易であるかは明確で、拡大の方が数値化できという点ではるかに簡単です。倫理の普及においては、過去「拡」、つまり数字ばかりが注視されることもありました。その際、必ず「数を増やすことよりも会員満足度を上げる方が大切だ」という意見、すなわち「拡」よりも「充」を先行すべきであると主張する方も多くいました。その方々によくよく話を聞くと残念ながら、数字を増やす活動が困難であるがゆえ「拡」から目を背けて、「充」を表面的に主張しているケースも少なくありませんでした。ですので「充」を、と言っても「充」のために何をどうしたら良いか、中身の無い主張も少なくありませんでした。

現実問題、「充」を数値化することは大変困難です。会員満足度向上を謳えば謳うほど、数値化する項目は多岐にわたるからです。つまり「充」である会員満足度向上を無理矢理数値化し、追いかけると迷走する恐れがあります。単純に考えて、指標の明確な拡大、つまり普及の数字を見るほうが易しいのです。もちろん会員満足度の向上は決して外すことのできない事項でありますから、昨年度の達成式典以来、この数か月間、私は数ある施策と自分の考えを合わせて「充」を測る模索してまいりました。

その結論は、一に倫理の実践者を増やすこと。二に実践を経て倫理体験を多くの方に体感していただくこと。最後に自ら他の方々にも素晴らしさを伝えていただくこと。この三点に尽きるという考えに至りました。

始めのうちは難しいことだと思いますが、何事も小さな一歩の積み重ねです。ですからほんの小さな一歩でも踏み出す勇氣、挑戦の決意を持って実践してほしいと願っています。1週間、1ヶ月、3ヶ月…と続け、振り返れば、一回り成長した自分と「充」を感じることができるでしょう。今年度において理事長のお話では「明るく楽しくたためる会」にプラスして「スマートでハイセンスな会」が提案されましたが、私自身は、現場では、泥臭くてでも地味に粘り強くやり切る決意を持って1年間進んでまいる決意です。今回は年度はじめ式の挨拶文もありましたので簡単な挨拶となりましたが、この令和7年度もよろしく願いいたします。



令和7年度10月 県会長挨拶

心地よい秋風が吹き抜ける今日このごろ。1年の中で最も過ごしやすい季節です。しかしながら、人は暑ければ暑い、寒ければ寒いと文句を言うにも関わらず、ちょうどいい季節に於いてはそのことになかなか触れません。

私たち倫理を学んでいる者は、四季に感謝をすることを学んでいます。ですから最も過ごしやすい今、一層の感謝をしなくては、と感じております。

さて、私は先月の20、21日に東京の倫理研究所本部で開催された「新任倫理経営インストラクター研修」に参加してまいりました。研修中には認定書授与式があり、無事に倫理経営インストラクターとして認定を受けることができました。倫理経営インストラクターとは、倫理法人会の資格であり、役職ではありません。

この資格を持つことで次の2つのことが可能となります。第一に、純粋倫理経営の解説を含んだ講話、第二に倫理経営指導です。奈良県倫理法人会は今期で設立26年を迎えます。その歴史の中で私が初の倫理経営インストラクターの資格を有する運びとなりました。

奈良県では、奈良の人は奈良で初めての事柄を「生駒の山を初めて越えた」と表現します。つまり、今回のことは、倫理経営インストラクターの認定書が、初めて生駒の山を、生駒トンネルを越えたのです。

今は、まだこの資格が意味する重責に押しつぶされそうな自分も存在しておりますが、この資格に見合う自分に成長するように、弛まず研鑽に励むと誓っていますので、皆様方に置かれましては「鉄は、炎に入れ熱して打てば剣となる」とのごとく、私を鍛えていただきたくお願い申し上げます。

さて、資格取得に関しての過程を振り返りますと、今年の春に予備審査後に方面長から打診をいただきました。そして面接試験、筆記試験、実技研修を受けて晴れて認定となりました。試験に挑戦するため、学びを深めていくうちに二つの大きな課題が立ちはだかりました。

一つ目は「倫理経営指導」ができるに値する自分なのか？ということです。私は立派な人間とは程遠く、そんな私が他人の人生に少なからず影響を及ぼすことに責任を持てるのか？という疑問です。この課題解決のために、私自身が倫理指導を受けました。その先輩方の答えはすべて「扉を開けるのは来談者本人だから気にする必要は一切ない」というお答えでした。それがストンと自分の中に落ち、不安はなくなりました。

二つ目は、自分が受容・共感・自己一致を続ける中で、相談者の悩みを溜め込み、それに押しつぶされてしまわないかということでした。それに対しては明快な答えが先日行われた実技研修の際に提示されました。

それは「あくまでもカタライザーでいること」です。カタライザーとは触媒という意味があり、一般的には物事のまとめ役、世話役となる人を指します。論理では「媒介者」と定義されます。カタライザーには直観が重要で、傾聴する力をとことん養うことで直観的な能力が身につくとのことでした。

これら二つの大きな課題が解決し、ホッとしたのも束の間、同時的に再び大きな責任を感じました。

- ・純粋倫理を正しく学んで、正しい知識を持たなくてはいけない
- ・ひとつのことにでも精魂込めて取り組み、豊富な経験を持たなくてはいけない
- ・直観の発動がしやすくなるための訓練に常に心掛けなくてはいけない

等々、自分自身が究極の倫理的判断力を常に求められている立場なのであるということでも頭がいっぱいになりました。

この激動の現代社会においては将に必要な力です。それを常に磨き続け、皆さまのお役に立つことが、これからの私の使命であると、新たな決意をさせていただきました。重責に押しつぶされることなく、必ず皆さまの幸せに寄与する人材となってまいります。

最後になりましたが、今年度で私の県会長の大役が終わります。年度始め式でも申し上げましたが、「一度始まったら、終わったも同然。私の中では今年度の奈良県倫理法人会の達成もすでに見えている」のです。ですから「来年度、自分は何をする？暇を持て余すかもしれないな…」そんな自分の会長退任後を想像しつつ、万人幸福の葉の一節にある「職をやめると間もなくして死んでしまう人の多いのは…」の行を思い出し、「もしかすると死んでしまうかもしれない」と思っていた過去の自分の目を覚まさせるように、この倫理経営インストラクターとして活動する機会をいただきました。これは自分の人生において大きな挑戦であり転換期に入ることになります。今後も倫理経営の実践者として、ますます倫理法人会活動に取り組み、皆さまの幸せを更に応援し、かつ自らも結果を出さなくてはならない立場をいただいたことに深く感謝しております。とはいえ、実のところ私は倫理法人会に入会して5年しか経過しておりません。まだまだ純粋倫理の勉強が不足している若輩者であります。皆様におかれましてはどうぞ「倫理経営インストラクターの寺尾俊一を鍛える」というおつもりで、奈良県に限らず他府県の皆様方も遠慮なくご相談くださいますようお願い申し上げます。

朝夕は少し寒いくらいに涼しくなりました。
風邪など召されませんよう、くれぐれもご自愛ください



令和7年度11月 県会長挨拶

キンモクセイの香りに四季の移ろいを感じる今日この頃、皆様方におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、私は先月10日11日に東京の倫理研究所本部で開催された「倫理法人会全国会長幹事長会」に参加して参りました。参加対象は47都道府県の会長、ならびに幹事長の94名です。すばらしいことに参加率は100%。つまり一人も欠席することなく開催されました。すべての県、つまりは倫理法人会が全国的に本格的な盛り上がりを見せているのだと触発され、私もさらにやる気が湧いてきました。

社数でいうと、奈良県倫理法人会は47都道府県中、最下位の47位です。しかしそんな最下位の奈良県においても、現在は倫理法人会活動が定着し、盛り上がりを見せています。この状態をキープすることで、この先必ず飛躍的に成長するだろうと感じています。

前述の会に於いては、各方面代表の様々な取り組みを学ぶことができ、大変勉強になりました。そして、全ての発表を通して「奇をてらう取り組みは全く無い」と気づきました。全てが基本に忠実に、地道な活動や研鑽の中から生まれてくるアイデアでした。

私たちの多くは往々にして何かを始める際に、新しいものを求め続けます。例えば、宣伝広告の手法や商品開発等、あらゆる面において、自分たちの「外」にある、未知なる何か素晴らしいアイデアがあると信じて模索するのです。

しかし、本当に大切な物は外部に求めても得られません。私たちの「内」にある物。私たちの中にこそ答えがあり、それを求めることが肝要なのです。本当に大切な物は近くにあるほど気づきません。自分の心や組織の中にあるのに気付くことが困難なのはそのためです。

倫理法人会の学びにおいて特に強調すべきことは、まずは「夫婦愛和」であります。人間関係の最小単位である夫婦そして家族こそ大切なんだけど「当たり前」だと不可視化され、時に大切な感謝の心、慈しみの心も忘れてしまいます。会社経営が良くなるのは、夫婦そして家庭を良くしてこそです。ですから家庭同様、会社においては社員や取引先という「内部顧客」を大切にする会社の事業は発展し続けるのです。

私が県会長を拝命して最初に肝に銘じたことは、奈良県倫理法人会の取り組みにおいては、法人局が用意してくださったプログラムを着実にこなすことを一番大切にするということです。それこそが大切であるということです。法人局は倫理法人会の内部にある核にあたります。何か歯車がうまく回らない…そんなふとした瞬間、「当たり前すぎプログラムを蔑ろにしているのでは？」と気づき、反省して立て直すことがあります。

他には、自分や社員、それぞれの個性、健康、価値観、信念、理念、こだわり、挫折、後悔、自社における既存のシステムなど。これらも、「当たり前」で可視化しにくい「自分の内部」に在るものです。これらを言語化し、再度吟味し、組み合わせたりアレンジしたりすることで内部に眠る宝の資源を発見することができるでしょう。

また、会長幹事長会で発表されたアイデアは「奈良県にすぐに取り入れることができることと、そうではないこと」に分かれると感じました。最小規模の社数の組織である現在の奈良県倫理法人会では未だ実現不可能である事柄も多くあります。委員会活動などは特にそうです。この件に関しては、しばらくの間は近畿方面の方々のお世話になりながら動いていくべきだと考えました。

特に「会員満足度向上」の観点から見ると、奈良県倫理法人会とお隣の大阪府倫理法人会

が、各々の会員の方々に提供できるサービスに大きな違いがあります。このギャップを埋めていくために、しばらくは奈良県独自でできないことに関しては、大阪府さんのお力をお借りしてでも、サービスの提供を進めていくことが必要だと感じております。

そのために大阪府の方々と密に連携をとり、時と場合によっては、頭を下げてお願いしに行くことが私の役目であることを今一度再認識いたしました。

試行錯誤しながら、社数としてはほぼ25年間最下位を走り続けてきた奈良県倫理法人会は、その底上げをさせていただき、46位、45位がねらえる県となりました。今期末には次の段階の「背中が見える」、「肩に手がかかる」状態のところまでは確実に持ってくることができました。

この2日間は関わるすべての皆様への感謝でいっぱいになりました。心より御礼申し上げます。

それでは、秋が深まりゆく季節、お身体にはくれぐれもお気をつけください。モーニングセミナーでお待ちしています。



令和7年度12月 県会長挨拶

師走を迎え、皆様方におかれましては、ますますご多忙の時期を迎えられたことと存じます。今年も残すところあと一か月です。新しい一年を悔いなく晴れ晴れとした気持ちで迎えられるように、今月は2024年中に必ず行うべきことと、来年に行なった方がよいことを区別し、事業整理をして参りましょう。

さて、今月2日には「新語・流行語大賞」が発表されます。私に関わっている葬祭業界では、2010年に「終活」がノミネートされ、さらに2年後の2012年にはトップ10入りを果たしました。今まで言葉のなかった現象や気持ちに名前が付けられるということは、ある種それらが公に認められることでもあります。最近名付けられた言葉の中では「カスハラ」が大切な言葉であると感じています。「お客様は神様です」の時代はとっくの昔に終焉を迎えたにも関わらず、横暴な態度をとり続ける客と、それに対応し精神的な負担の大きいサービス提供者。「暴言や脅迫をする困った迷惑なお客さん」としか言いようのなかったこの現象に「カスハラ」と名前が付き、その後は「カスハラにNO」と従業員を守る姿勢が全国的に展開しています。

このように、新語や流行語ができることで日本を良くする動きが出てくることも多くありますが、反対に言葉が「本来持っている意味」とは異なって広まってしまう場合もあります。言葉は生き物ですから、時代の流れに沿って変化をするものだと分かっている、本体の日本語を大切にすることは、元々の意味が薄れてしまうことについては問題意識を持っています。

振り返れば2017年、「忖度」という言葉が「お祭り」のように流行り、新語・流行語大賞の年間大賞に選ばれました。（忖度饅頭までできました）忖度の本来の意味は、漢字の成り立ちから見て取れるように、「忖」も「度」、心をもって相手をおしはかる意味があります。しかしながら流行語大賞としての「忖度」は、見返りを求め、リスクから逃れようとする心を以て、立場が上の人におべっかを使い、こびへつらい、迎合することとされました。本来ならば中立的である忖度を、なぜ間違った意味と結び付けて流行語としたのか。その社会の在りように疑問を呈せずにはいられません。

私は以前より、「正しさより明るさ、だけど明るさよりも忖度や！」と意気揚々といつも言っていました。時々その言葉に「ウケて」笑っている人々がいました。そのたびにきくと流行語の「忖度」は知っているけれど、忖度の本当の意味を知らないのだろうなと残念な気持ちになりました。相手の気持ちや状況を推し量るという本来の意味で使うと、誤読される可能性がある恐れも感じました。忖度は中立的な言葉だったにも関わらず、不幸にもネガティブなイメージを未だ払拭できません。これを読んだ皆様は、「人の気持ちを慮る、推し量る」という正しい意味を取り戻せるよう「〇〇を忖度する」と使ってください。（「に」は誤用で「を」が正しい助詞です。）そして忖度できる人間になりましょう。それが倫理の学びと深くつながっているはずです。

私は、会員の皆様一人ひとりを忖度し、時にはアドバイスをしたり、何かを手伝ったりしてきたつもりでいます。また忖度いただいたことも忘れてはいません。この一年を振り返ると、一人一人との結んだ縁を感じると同時に「縁なき衆生は度し難し」という戒めの言葉が頭をよぎります。この言葉は、仏教に由来する言葉です。「仏縁（仏法との縁）のない者は、たとえ大慈悲を有する菩薩であっても救うことはできない」という意味です。それが転じて、「いくら心を砕いて話しても聞く耳を持たず、理解や関心を示さない者は救いようがない」ことを意味します。

万人幸福の契第三条には、このこととリンクする大切なご金言が示されています。運命に「運命は自ら招き、境遇は自ら造る」という箇所です。仏縁結ぼうとしてくれる菩薩の慈悲の手を払うか手を取るかは自分の選択です。その行動や心根一つで、自ら運命を招き、

それに見合った境遇が作られていくのです。万一不幸になったとしても、その因を作ったのは自分であると反省しなければなりません。だからといって腐らず、また正しい方向へ歩み出すことが大切です。倫理でも何でも、他人がある人に向かって何かを言うとき、厳しくともその人のことを本当に想ってのアドバイスなのか、正しそうに聞こえても人を惑わそうとしての言葉なのか、判断するのは自分自身です。それを受け入れるのか否か、行動するかしないか、瞬間、瞬間の自分の心であり、自ら招く運命なのです。菩薩は相手が仏法を信じて信じなくても、相手のために仏縁を結ぼうと大慈悲を以て救いの手を伸べます。しかしそれを誹謗する（そしる、悪口を言う、敵対する）人もいます。しかも菩薩の仮面を被って。現実の世界も同様であることは言うまでもありません。

今月の挨拶も長くなり、忙しい時期に申し訳ありません。私から皆様への付度だと思って、皆様の心の片隅に置いて下されば幸いです。

毎日寒い中、太陽は時折暖かい冬の陽だまりをプレゼントしてくれます。それに感謝しつつ、明るく 2024 年を走り抜きましょう！



令和7年度1月 県会長挨拶

皆様、明けましておめでとうございます！

松の緑の美しさに心奪われる今日この頃、皆様方におかれましては穏やかなに新しい年をお迎えのことと思います。

旧年中は皆様に支えられ、無事に新年を迎えることができました。心より感謝申し上げます。本年も一丸となって明るく楽しく前進して参りましょう。

輝かしい新年の幕開け。事業主の皆様におかれましては、繁忙期の方、お正月気分を味わえている方、様々かと存じます。

今年、令和七年は巳年であります。昔から「巳年は商売において様々な意味合いを持つ」と考えられてきました。例えば、蛇の脱皮を「古いものを脱ぎ捨て、新しいビジネスチャンスをつかむこと」に例える。また洞察力と知恵に優れた蛇をビジネスに置き換えて、「状況を冷静に分析し最善の判断を下す」などの考えがあります。

さて、旧年最後、12月における私の活動をご報告致しますと、第一に、丸山敏雄創始者のご生涯を振り返る映像セミナー、そして御命日の12月14日に倫理研究所本部で開催された追仰式に参加いたしました。太平洋戦争開戦が近づき、多くの思想家や宗教団体が弾圧を受けた時代、丸山先生は所属していた「ひとのみち教団」が不敬罪で解散させられ、自らも国家権力に「不敬な行ないをしていた」ことを認めるように強要されましたが先生は断固として否認しました。映像の中では、過酷な獄中生活や、目を背けたくくなるような拷問のシーンがありました。先生は決して権力に屈することなく信念を貫き私たちに倫理という最高の宝を残して下さったのだと感謝の気持ちでいっぱいになり、教えを身読、実践しようとさらに決意をいたしました。

身近な話をしますと、身の回りで多くの訃報を受け、可能なかぎり葬儀に参列しました。恩師や先輩、同級生、そして時には、私よりも若い人など…。そのたびに「ちょっと早いか遅いかの違いだけ」と思い続けていました。

しかし、12月17日に亡くなった、中西浩先生の訃報だけは別でした。私は中西先生を大変尊敬しており、機会を作っては先生に倫理指導を受けておりました。「朝起きひとつまともにできない人間は、苦難に直面した時に真っ先に逃げ出す人間」とご教授いただいた時、目が覚める思いでした。それから、この言葉胸に刻んで残りの人生を生きようと決め、現在に至ります。私がまだ入会3年弱しか経ってないにもかかわらず、県会長という大役をお受けさせていただいた際には、真っ先に中西先生の倫理指導を受けて、「この状況で自分が何をすればいいのか」をご指導いただき、県会長としての覚悟ができ、物事を進めるうえでの縦横十字ができたことによって、今の奈良県倫理法人会がスムーズに動いていると言っても過言ではありません。

私は、純粋倫理の実践を素直な心で行い、特に実践の要件としての10ヶ条（参考：「実験倫理学大系」）のうちの即行（気づくと同時に行う、この時が最善）、を徹底した結果、中西先生に出会えたことが本当に大きかったと心から思います。私もスマートフォンのバッテリーの目盛りで例えれば、4つある目盛りのうち、最後の一目盛りのところに差し掛かっていることは確実だと、自分の脳がそう意識しています。慎終（後始末をよくする。終止符をぽんと打つ。心残りを無くしておく。）に向けて、何をすれば良いのか…。中西先生の死、そして同級生や知人の訃報は、残された時間を悔いなく生き抜く覚悟をするよう私に喝を入れてくれました。

ですから、皆さんも私にとっての中西先生、つまりメンターをもっていただきたい。会社

さて、最後に数字の話をするのは大変恐縮ではありますが、今年度の目標と奈良県倫理法人会の予定についてお知らせをいたします。

そして9月の新体制のスタートを勢いよく切れるよう準備万全で臨みます。



令和7年度2月 県会長挨拶

2月は一年のうちで一番寒いと言われている季節ですが、暦の上では3日の立春から春となります。寒さの底から這い上がろうとする生命の息吹は日ごとに増し、木々の芽生えや動植物の活動に気づくことで、私たちは人生の豊かさを味わうことができます。

さて、奈良県倫理法人会では、毎年新年に神武天皇（初代天皇）をお祀りしている橿原神宮で合同参拝をしています。今年は前夜からの雪のため、見渡す限り真っ白な雪景色となり、神々しい銀白の世界に古の人々の想いを感じました。そして荘厳な空気が私たちを清め、新たな決意へと導いてくれるようでした。

奈良県倫理法人会は中間目標の締め切り日を1月17日に設定していましたが、見事に全単会が達成、奈良県全体としても達成させていただくことができました。この成果は私たちが一人も漏れず一致団結して得たものであり、誰が欠けても成しえなかったことです。私は各単会に参加させていただく中で、どんな達成でも簡単にできるものなど無いのだとひしひしと感じました。「苦難福門」とはよく言ったもので、一見すると困難に見える出来事の後には大きな幸福がもたらされる、転じて苦難を乗り越えることで、人間は成長し、より善くなれるという意味です。私たちは結果だけでなく仲間を信じてここまで来た、まさに苦難福門かつ信成万事の実践の集団なのです。

先月1月21日、創立26年の歴史を紡いできてくださった歴代の会長会を開催いたしました。かつて、まだ組織としての活動を十分に行うことが困難だった時期でも決してめげることなく、活動のバトンをつないでくださっていた歴代の会長の皆様の思いがあるからこそ、今の自分たちがあることを強く感じました。この先代の方々のご尽力、そして熱いご指導に感謝し、皆様方の想いを受け継いで、一致団結し、未来に向けて更なる発展を遂げる決意を新たに誓う所存です。特に、入会の数だけではなく、実践者の数と質を高め、皆が幸せでいられる、そして他の人をも幸せにできる人材へと成長していくことが目標です。

個人的な話になりますが、1月24日に和歌山県紀央倫理法人会の経営者のつどい、それから翌朝のモーニングセミナーで講話させていただき、事業体験報告を行いました。事業体験報告や講話をするたびに思い起こすのは、倫理を学び始める前の愚かな自分自身です。倫理を学ぶことで、愚劣な自分自身に気づく機会を得ました。以前アルコール依存症の事業報告を作成する際は大変苦しく、かなりの時間を要しました。飲酒運転にとどまらず、暴行、モラハラ、セクハラ、カスハラと、悪にまみれた不徳な自分に目を背けたくなりました。今でも、反省の念には堪えず、被害者の皆様への償いも簡単にできることはありません。とにかく、私にとって一番自分を正すことが、講話をお引き受けすることだと感じています。

話は変わりますが、年末あたりからこのひと月、日産自動車や兵庫県の百条委員会、フジテレビの問題など様々な事件が世間で騒がれていました。私はぼんやりと、もしかすると一連の問題の一因は米型の株主資本主義のしわ寄せではないかと感じていました。『アングロサクソンは人間を不幸にする』の著者であるビル・トッテン氏も、アメリカ型資本主義は日本にあわないと指摘し、日本独自の「みんなで共に豊かになる社会」を、と提案しています。また、約四半世紀前（平成14年）に小泉純一郎首相政権の目玉であった構造改革、「改革なくして成長なし」、「聖域なき構造改革」を覚えていますか。それまでの「分配」型システムを「効率」型システムに移行する改革は、「官から民へ」、「小さな政府」という言葉に表されている通り、新自由主義の日本版でした。「規制緩和」「自由化」などの耳当たりの良い言葉を連呼して行なわれたことは、本当に正しかったのでしょうか。「政治の結果は20年しないとわからない」とよく言われますが、今振り返ると様々な歪みを生み出した元でもあると感じているのは私だけではないはずです。

また、株主資本主義においては、未だに株主は余剰金を投資に回し、少しでも利益を生ませることを強く望んでいます。しかし実は内部留保が最も大切なのです。それは実際にその会社で働いている社員やその家族を守ることにつながるからです。このことは、コロナ禍で明確になったはずです。

前述したここ数か月の問題においても、コンプライアンスやガバナンスという言葉が幾度となく出てきます。それは現代の会社経営にとって欠かせない企業倫理です。皆さんも経営者として、企業倫理を学ぶだけでなく、倫理を学び倫理を実践すべきだと私は言いたいのです。

昔から私のことを知っている人は私のことを「昭和生まれの明治男」と茶化します。確かに今でいうと生きた化石のような人間だったのでしょう。昭和の時代にはパワハラやセクハラは不可視の問題、つまり当たり前に行われていた時代でした。昭和生まれの人間は未だにその気分にいる人もいます。しかし、今やそんな非倫理的な考えや行動をしていては会社経営を行うことは無理なのです。

人口構造の変化が著しい日本に於いて、「人口減少時代には今までと真逆のことをすべきである」と、私は長年主張しています。例えば、対応策の一つに、組織運営の在り方を変えるという方法があります。今、多くの企業が取り入れようとしている組織形態は、ティール組織と言い、リーダーはサーバント（支援型）リーダーです。これについては、過去のご挨拶等でもご説明した通りです。とにかく、今まで当たり前だったトップダウン型のカリスマ的なリーダーは過去の遺物であり、この先、組織運営において邪魔になる可能性が大変に高いのです。

この組織形態の話については、「ティール組織やサーバントリーダーって何だろう」と疑問に感じた方もいらっしゃるかと思います。倫理では、このような経営者としての最先端の学びを自分の身体を以て学び、活かすチャンスがあります。これこそが、倫理法人会でのお役なのです。倫理法人会の活動指針のひとつに「倫理の学習と実践の場を提供し、よりよい生活習慣と豊かな人間性を備えたリーダーを養成する」という条があります。これは、今の時代のリーダー、そして経営者のひとつのカタチを表しています。強権的で皆をぐいぐいと引っ張るリーダーは決して求められていないのです。

最後に、私たちが使っている教科書である「万人幸福の栞」を思い出して下さい。これは約75年前に書かれたものです。知らない人は古くさいイメージを持つことでしょう。しかし、書かれていることを今読むと、確実に次の時代を見抜いているように感じます。私は75年たった今の時代にでも「万人幸福の栞」が通用していること自体に驚きを隠せず、普遍性とはこのことを指すのだろうと感じています。世の中、そして大企業を変えることは、とても時間のかかることです。しかし我々中小企業は変わることが比較的容易です。ですからまずは私たち中小企業から、この世の中を変えていきましょう。令和の時代は、身動きの取りづらい大企業に社会の変容がゆだねられている時代ではありません。

何度も申し上げておりますが、皆様方の会社経営に関わる大切なことがらは、倫理法人会の中で、着実に学び、そして新しい挑戦をすることができます。ぜひ、信じて共に進んで参りましょう。今回も長くなりましたが、最後までお付き合いいただけた方に感謝申し上げます。お風邪など召しませぬようくれぐれもご自愛ください。



令和7年度3月 県会長挨拶

三寒四温の言葉通り寒さと温かさが入り混じっております。

見え隠れする春の兆しに心が躍らせている方も多いのではないのでしょうか。今月は、富士研と方面会の感想、天和会館での学び、そしてスピーチを行う際のコツについてお話します。

2月5日から7日、私は6年連続6回目の富士研に参加しました。静岡県富士山の麓にある倫理研究所の研修施設で行なわれるこの研修は、全国各地からメンバーが集まり、講義を聞いたりディスカッションを行ったりします。その際に各県の特徴を観察するのが私のクセであり、良いところはどんどん奈良県倫理法人会用に変化させて持ち込もうと考えています。今回は、愛知県、岡山県、長野県の方が多く、中でも愛知県は今回の研修参加者100名ちょうどの内43名と大半を占めました。グループ14班のうち、11班のチームリーダーが愛知県、全体のトップリーダーも愛知県、という愛知県倫理法人会の勢いが見られた回でした。

もちろん、リーダーをすることで学ぶことはたくさんありますが、リーダーをしなくてもチーム体制での研修には大きな学びがあります。多様な視点やアイデアを得たり、問題解決能力を高めたり、チームワークを育んだり、枚挙にいとまがありません。そこでリーダーを努めることで統率力はもちろん、意思決定力や責任感を伸ばすことができるかもしれません。一方、リーダーをしないと何も得られないわけではなく、観察力を養ったり、他のメンバーと協力したりコミュニケーションが容易にできたり、責任が軽減されるため発言のハードルが下がり自由に発言できたりする傾向にあります。つまり、役割に上下はなく、何を学べるかの違いです。私は今回もリーダーはしませんでしたので、よく観察を行うことができ学びがありました。

6回の参加を経て、しみじみ感じたことがあります。それは、富士研は、まるで「生き物」のようだという事です。毎回参加者が異なり、多様なバックグラウンドを持つ人々が集まります。そしてコミュニケーションの中で予想外の化学反応が生まれ、毎回新鮮な発見があります。その時その時の参加者それぞれの個性や経験が掛け合わさって研修は毎回変化します。まさに生きた学びの場と言えるでしょう。ですから、皆様方にはぜひ、一度だけでなく何回も富士研には足を運んでいただくことをおすすめします。今回来なかった方は、次回来なかったら損です！と断言します。

次に方面会についてですが、近畿方面2府4県においては大阪府倫理法人会が断トツに牽引力が高く、私共奈良県は大阪府にならえとばかりに大阪府の飛び地として学びに行っております。ありがたいことに大阪府は「近畿は一つ！」と、私共を迎えてくれています。大阪府は、自単会の出席率が高く、会報誌も毎月充実しており、奈良県は学ぶことばかりです。そんな大阪府でも、悩みがないわけではなく、方面会の懇親会において府県会長同士腹を割って話すと其々の府県で大小様々な問題があることを知りました。

しかし、奈良県は私が会長になって約3年、何の大きな問題なくここまでやって来ることができたと気づきました。それは、他の誰でもなく皆さんのおかげです。感謝しなくてはなりません。本当にありがとうございます。

さて、2月23日～24日は丸山敏雄創始者の生誕地である天和の郷、そして生家の隣に建った天和会館に奈良県倫理法人会の仲間と行って参りました。本当に静かな山間にあり、当時を肌で感じることができる雰囲気でした。創始者の数々の幼少時代のエピソードを知っているからか、今にも子どもの創始者が「そこ」にいて、同じ時間過ごしているような感覚を覚えました。ある日、創始者は池に落ち、自身は運良くすぐに助かり事なきをえましたが、一緒に溺れた従兄弟は生死の狭間を彷徨ったそうです。その間、創始者は懸命に祈り、そのなかで、生かされているという感謝、「おかげさまの気持ち」に気づいたそうで

す。その話を聞く中で私ももっと日々の些細なことから恩義を感じる必要があると心に刻みました。

近年、タイパ、コスパが重視され、慌ただしく過ぎる日々。たくさんの方に次々広く浅く手を出すことで、多くの現代人は知らないうちに精神的な余裕を喪失しているのではないかと。自分だけが得をしたら良いと考えてはいないか。じっくりと思考力や創造性を伸ばすことや、長期的な成長が阻まれているのではないかと。そして何より、目に見えないもの、とりわけ「生かされている自分」、「おかげさまの心」、「恩義」を意識しようがないのではないかと考えました。そして、私は「後世にこれらのことを伝えていく使命がある」そう強く決心しました。

ところで、皆さんは、「自分が人前で話すとき、どんなことを意識しているか？」考えたことがありますか。私は、最近、以前から「心を揺さぶられる話」と「頭の中を右から左へと流れていく話」の違いについて疑問に感じていましたが、様々な学びの中から答えが徐々にわかってきました。今月の最後は、その違い、スピーチのあり方についてお伝えして終わります。

今期の奈良県倫理法人会では講話者、実践報告、会員スピーチのスピーチ力を向上させる目的で、様々な取り組みをしています。いつも講話などで話しなれている方面長、副方面長はじめ研究員の方々の講義をきいているうちに気づかされたことです。私自身は人前で話すことは大好きな人間です。しかし、それが話が上手いかどうかというと、実は私自身はそんなにうまくないと感じています。

人前で話すことは、ビジネスパーソンとして大変重要なことです。いくら優れた人材だとしても「人前で話す」ことができなければその値打ちは下落してしまいます。ここで指す「人前で話す」とは、単に漫然と人の前で何かを述べることではありません。「なぜ話すのか」という、「話す目的を明確にしたスピーチ」を指します。聞き手に最も伝えたいことを考え（自分の考えや事実を正確に伝える、聴衆の行動を変えるなど）、自分の思いを凝縮して聞き手の心を動かすという、「目的」を達成させるチカラを持ったスピーチが、上記で示した「人前で話す」ということです。もちろん、スピーチの主旨を考える前に準備（聴衆の属性や人数の把握など）は必須です。

残念ながら、多くの人は、「なぜ、何のために話すのか」という、「話す目的」を置き去りにしがちで「何を話すか」ばかり考える傾向にあります。

「話すこと自体が目的」になり、自分が訴えたい主旨すら忘れて話す内容を考えてしまいます。そして、ただ漫然と自身の経歴を追ったり、難しい言葉を並べるだけで、誰の心にも残らない、何のために話したのかわからないスピーチになるのです。

「なぜ話すのか」と目的を明確にしたスピーチは 100 人のうち、5 人にしか届かないことも往々にあります。きっと話者は「この話が必要とする人だけに届け！」との目的で話しています。そしてそれを欲していた 5 人の心を、行動様式を変えます。私も 100 人以上いる中で「この人は私だけのために語りかけてくれている！」そう感じて自分の心持ちが変わったことがあります。きっと話者の目的と化学反応が起きたのでしょう。これは、素晴らしいことなんです。誰にも響かないスピーチと比べ、5 人にも影響を与えたのですから。

私たちの多くは中小零細企業事業者ですから、倫理の活動だけでなく、社内スピーチや、新規事業報告、販売先への営業活動など、自ら人前で話す機会があります。その際は上記のこと一準備を怠らず、「話す目的」、「何のために話すのか」をしっかりと考えて下さい。そして、聞き手に最も伝えたいことを軸に話を組み立てて下さい。

さらに付け加えますと、私たちはビジネスパーソンですから数字をうまく使う必要があります。客観的な事実と主観的な評価を区別するのは当たり前のことですが、それに加えて事実を述べる際はマクロ視点で業界の統計結果並びに自社の売上高を具体的な数字でサッ

と語ることができると信頼感が増します。逆に言うと、これが曖昧であれば脇が甘いとの印象を与えます。

また、皆さんの講話やスピーチ、発表から司会進行などに触れると、「～と思います」という表現が非常に目立ちます。これは微妙な使い分けがあるでしょうが、基本的に「～と思います」は自信がなさそうな印象を与えます。逆に断定的な表現を使うと力強い印象を与えます。しかし、どうしても断定できないことを事実のように伝えるのは信用問題に関わりますので、根拠を示した上で、「判断します」、「考えます」、「推察されます」と言い換えるのがビジネスシーンでは適切でしょう。

さて、今回の私の挨拶文はどの程度、どんな方に伝わったのでしょうか。いつも、「良かったです」とは言っていますが、「どこがこの方にとって良かったのだろう」と思うことがあります。ここまで書いて、感想をおねだりしているような自分を恥ずかしく感じています。しかし、とにかく、お一人でも実行する方が現れるよう書いております。その人々に届きますように。

春寒のみぎり、皆様くれぐれもお身体を大切になさってください。



令和7年度4月 県会長挨拶

皆様、いよいよ新年度を迎えました。4月は、入学式や入社式など、新たな始まりを祝う式典が各地で執り行われる季節です。

式典というものは、私たちにとって非常に重要な意味を持ちます。それは、「こと」の始まりと終わりに、礼を尽くすことで、心の切り替えをきちんと行なうためです。さらに、式典で使用する用具にも心を寄せることで、私たちは日々の生活に感謝の念を抱くことができます。

倫理法人会では、「式」と「こと」を非常に重視しており、年度始めと終わりには毎年「年度はじめ式」と「達成式典」を開催し、会員一同が心を寄せ合っています。

さて、先月、私は東京紀尾井町の倫理研究所本部にて開催された、倫理経営インストラクター研修を受講しました。倫理経営インストラクターとは、倫理法人会が定めた、倫理指導並びに純粋倫理の解説を含めた講話を行うことが許された唯一の資格です。

この資格保有者は、全国約73,000社の会員のうちわずか441名と、非常に数少ない存在です。さらに、70歳未満かつ資格取得五年未満の倫理経営インストラクターを保有している法人レクチャーに絞ると、50名未満、0.05%という、極めて稀な存在となります。会場に集まった顔ぶれを拝見し、それぞれの倫理経験を拝聴した際、私は錚々たる方々ばかりの中に、倫理に入会してわずか6年未満の若輩者である自分が場違いなところにいるような気分になり、ひどく気後れしてしまいました。

2日間にわたり、みっちり研修を受けた率直な感想は、「倫理経営インストラクターとして、悩みが一層深まってしまった」ということです。倫理の学びとは、非常に深く奥行きがあることを再認識し、重責を担うことの大変さをヒシヒシと感じました。

いつも近畿方面の担当として大変お世話になっている方面長が、2時間の講義を担当してくださいました。いつものモーニングセミナーや役員会では易しい言葉で分かりやすく話されている方ですが、今回はそれとはまるで異なる専門性の高い講義でした。

方面長ともなると、このように、深い話をすると同時に、専門的で複雑な話を平易な言葉で誰にでも分かるように話せるようにならなければならないのだと学びました。難しいことを難しいまま話すより、難しいことを易しく話すほうが高度です。方面長の偉大さに感服するとともに、自分も講話の際は、知識をひけらかしたり難しいことだけを良しとせず、倫理に触れるのが初めての方にも伝わるように話そうと誓いました。

このような学びの場を与えられ研鑽できることに感謝するとともに、自分だけでなく、奈良県のたくさんの会員の皆様も学べるように、次の世代への道を作っていきたい。それが私の役目だと確信しています。

今回の研修前は、県会長職3年目になり残す所あと数ヶ月。引退したら気が抜けてしまうのではないかという馬鹿なことを考えていた自分が恥ずかしいです。私には、まだまだ後継育成の使命があったのです。

さて、話は変わりますが、再度「組織のリーダー」についてお伝えします。以前にもさまざまな場所で「サーバントリーダー」などを例に出しリーダー論について説明してきました。奈良県はこの時期になり、来期の執行部はほぼ確定し、引き継ぎがはじまりました。おもしろいことに、最近夢に見るのが3年前の県会長をお受けすることになったこの時期のことです。心に刻まれた出来事だったのでしょう。この3年間のことは倫理経営インストラクター研修で上京した折に、当時担当をしてくださった方面長にもご報告をしました。

私が組織のリーダーについて一番大切だと考えていることは「リーダー頼みの組織はいつか潰れる」ということです。これは以前にもカリスマリーダーに警鐘を鳴らしました。リーダーが優秀であれば組織が成長するか？と疑問に思います。リーダーがいなくなった瞬間に機能不全になる組織は、持続可能性の重要性を鑑みると全くダメです。

では本当に強い組織とは何か。それは、全員が成長できる仕組みがある組織です。仕組みを学び自社に取り入れ会社を成長させる。そのためには倫理法人会のお役を積極的に受けることが重要です。

今まで、「得方と与え方」の観点をはじめさまざまな観点から、「倫理法人会のお役を受けると良いですよ」とお伝えしてきました。お役を受けることの一番の醍醐味は、先述の仕組みを学ぶことができるということです。決してリーダーだけが輝くのではなく、全員が自らの役目を真っ当し、それぞれの光を放つことができる。それが成長できる組織です。

リーダーは向かう方向を指し示し、ナンバー2 はゴールまでの道のり、設計図を作成します。そして組織の全員がその設計図に基づいて自主的にかつ自ら進む力を持つことが大切です。役割と責任を皆で分かち合い、自分が欠けては成り立たない、つまり他の誰が欠けても成り立たないのだと意識してください。機械の歯車と同じです。歯車の1つ1つが、かけがえなく尊いのです。

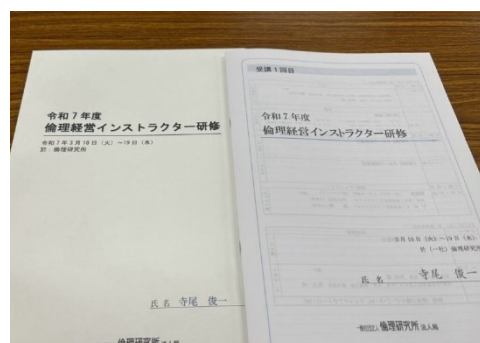
経営者は往々にして自らが歯車として動くことが苦手です。それをどう変化させるかは、この倫理法人会の学びで会得できます。また、組織が進化するためには全員が成長し続けるための文化が必要です。組織が停滞しないためにも、次代の人々が成長するような仕組みづくりを行ない、組織を発展させましょう。

先日の倫理経営インストラクター研修では、組織のあり方や全員が学び続けられる環境づくり、そして次世代育成について再度痛感しました。純粋倫理の学びや組織運営の学びは、倫理法人会の仕組みをフル活用すれば必ず学び活かすことができます。そして最後は「自立」できた者が勝ちます。たとえリーダーがいなくても各自が自身の判断で動ける組織が真の強さを持つ組織です。決して依存せず自立してください。私が3年前に目指したことも「単会の自立自走」でした。それが叶い、自立した全員が共通目的に向かい邁進できるようになったのです。



今月は、残り僅かとなった会長任期のまとめを行なうような、洪水のような文章だったかもしれません。今期の達成は成し遂げてはいますが、まだ、達成の日を迎えたわけではありません。達成の日、5月19日に向かって、今一度組織の活性化をはかり、また来期へ向かって助走してまいりましょう。

皆様と共に、実り多き4月を過ごせることを心より願っております。



令和 7 年度 5 月 県会長挨拶

新緑の色が目眩しい季節となりました。私たちも、この美しい自然の恵みに感謝し、日々を大切に過ごしたいですね。最近では世界規模で気候の変動あり、日本においても四季の巡りに変化が見られ、秋と春が駆け抜けていくような短さになりました。また、私が子どもの頃には庭に大きな鯉のぼりを立て、空を泳ぐ鯉をよく見かけましたが、今ではあまり見かけません。住宅事情もあるでしょうが、マンションのベランダに泳いでいる鯉のぼりを見かけると今の若い人たちも季節の行事を大切にしているのだなと嬉しく思います。

ところで、我々倫理法人会では良し悪しの判断抜きに、ありのままを「これがよい」と受け止める心持ちを大切にしています。先ほどの気候の話で例えますと、多くの人が暑ければ暑いで文句を言い、寒ければ寒い不満を言います。我々はどんなときでも「これがよい」と、つまり暑くても寒くてもそのままを受け入れます。

そういえば私が 20 代の頃、極寒の朝に葬儀の仕事でお寺へご挨拶に伺いました。「今朝は特に寒いですね」と言った私に対して、お寺様は「冬らしくていいですね」と返されました。私は大変感銘を受けました。ありのままに受け止め、良いところを感じることは、現在学んでいる「これがよい」という心持ちそのものでした。

さて、今月 5 月 19 日は、奈良県倫理法人会における今年度の拡大社数の締め切りです。目標は 405 社で、残された日数はわずかではありますが、目標達成は必ず成し遂げられる状況にあります。役員、そして会員の皆様のご尽力には感謝してもしきれないと感じています。

倫理法人会に於いて、目標達成の方法は様々な形があり、会員の皆様それぞれご意見をお持ちであると存じております。目標に対して、「無理だ」や「無茶ではないか」など難しい状況を表すご意見ももちろんあります。

しかし、たとえその目標数値が無理で無茶でも、経営者である以上、一旦掲げた目標は達成しなければなりません。締め切りの近い今の時期に、今さら「無理」や「無茶」だと目標の数字自体を論じることは何の意味もありません。

今回の目標が「無理で無茶な数字」だったとしたら、とりあえず何がなんでも今年度に目標達成した上で、次年度の計画を「妥当な数字」に吟味することが大切ではないのでしょうか。

奈良県倫理法人会は、今まで期末が近づくにつれネガティブな声が大きくなっていました。しかし、今期はそのようなことは全くなく常にポジティブ、そのままラストスパートをかけています。各単会がそれぞれ自ら決めた目標を自分たちで達成していくというプラスのサイクルがうまく回っています。そして、皆で達成の喜びを分かち合っており、私としては感謝の気持ちが溢れています。

さて、私が奈良県倫理法人会の会長をお引き受けしてからもうすぐ 3 年になります。倫理法人会では、会長の任期は最長 3 年です。つまり私は今期の 8 月で任期満了になります。

ところで、全国には 47 都道府県がありますね。つまり都道府県会長も 47 人います。奈良県は会員社数が現在最下位で長年その最下位の 47 位でした。しかし、今月 19 日に 405 社を達成すると、なんと 45 位に浮上する可能性があるのです。会員の皆様の頑張りのおかげです。

話がそれましたが、順位云々は置いておき、奈良県のような小さな組織の良さについて私には考えがあります。私が県会長の打診を受けたのは入会わずか 2 年半の頃。このような倫理歴の浅い者が県会長という大役を任される状況になったのは、言うまでもなく奈良県が全国で一番小さい最下位の県だったからに他なりません。奈良県以外の大きな組織では

このようなことは決してあり得ないことです。

大きな動物の尻尾になるくらいなら鶏の頭になったほうがいい―「鶏頭牛後」という言葉の通り、得られることが非常に多い、本当にありがたい3年間でした。

話は全く変わりますが、どうしても言いたいことなので批判を承知で本心を書いておきます。私は22歳で地元三重県四日市市の葬儀社に就職し、以来、葬祭業界歴は41年です。途中アルコール依存症もあって、いろいろな葬儀社を転々とした結果、どこからも雇われなくなったので、最終的には自分で葬儀社を始めました。紆余曲折ありましたが、まさか40年以上葬祭業界にいるとは夢にも思っていませんでした。

葬祭業界は業界の規模も、市場規模も小さいのです。それが私にはよかったのかもしれませんが。狭い世界でどこに行っても知り合いがいて心地良い。それが一因のような気がします。結果今まで続け、気がつけばありがたいことに葬祭業界の重鎮的存在の扱いを受けることもあります。

私の経験から思うに、大企業ばかり就職希望して落ち続けている人は、葬祭業界のような常に人材不足の会社に目を向けてもいいかと思います。「自己分析や適性検査で向き不向きがある」とも言いますが、私は入社時から今まで向き不向きを考えたことは一度もありません。直観で決め、仕事に自分を合わせていきました。

就職難で仕事がないと聞きますが、葬祭業界はいつでも人手不足。人材募集をしてもだれもこない。そんな業界は他にもあるはずです。ですから、仕事は選り好みしなければいくらでもあるということです。希望する仕事ではなくても、仕事に自分を合わせていくうちに道が拓けるかもしれません。

最近の会社は書類選考に面接、適性検査と採用にお金をかけています。新卒の学生さんも自己分析や適性検査対策などして、結果的に就職予備校が儲けたりしています。それはさておき、そこまで色々しても結局、仕事なんてやってみなければわからないのではないのでしょうか。やる前からどの適性があるかどうか、そんなことはアテにならないと思います。

私は以前、大手の冠婚葬祭互助会で採用担当をしていました。私の採用基準は「打たれ強くて辞めにくい」。見極めるのはそののみ。もし採用した人が1年以内でやめたら採用担当者である私の責任になります。すぐ辞めたら困るというのは今も昔も同じですが、今の会社一とりわけ大手は採用コストを必要以上にかけ、採用の条件也多すぎるのではないのでしょうか。

人気がない、人材不足の業界の特徴として、給与が少ないことが挙げられます。でも、私は仕事で大切なことはお金だけだとは思いません。むしろお金で選ぶと続かないと思います。倫理において、仕事とは人を喜ばせることが目的です。働くことが喜びです。それが真の報酬なのです。そういう心持ちで就職に臨むと、より豊かな気持ちで働くことができるでしょう。

倫理法人会で「お役を受けること」は、つまり「働きは最上の喜び」であることを知る最高の訓練になります。私も県会長の3年間、そのような心持ちで務めてまいりました。年度がかわる前の今の時期、会員の皆様にも新しいお役の話が来ることでしょう。その時にはぜひ、喜んで（ここがポイントなので太字にしました。点をつけてもいいと思います）「はい!」、「イエス!」とお応えいただき、お役をうけて、自己革新に挑んで下さい。

はじめから「完璧にお役を務めなければ」と気負わず、まずは「ありのまま受け入れる」、いただいたお役に対して「これが良い」との心持ちを持つ実践からはじめていただきたくお願いします。私はこの3年間倫理法人会活動一色で会長を務めてきましたが、9月以降は時間的余裕も生まれることでしょうか、もし次に倫理法人会以外からでも新しいお役がまわって来たら、ありのまま、まず受け入れると誓います。

令和5年度 年度はじめ式会長挨拶 原文

本日は多くの皆様にお集まりいただき、年度始め式を開催できましたこと、誠にありがたく、感謝の念にたえません。

さて、本日新しく今年度の会長職を拝命いたしましての所信をひとこと申し述べさせていただきます。

まずは倫理法人会のお役をお受けいただきました皆様、誠にありがとうございます。私はいろんなところで機会があるたびに「倫理法人会活動をする時に全く同じ月一万円を支払っているならばお役を受けないと損」と申し上げております。これにはいろんな理由がありますが、簡単に申し上げますと以下の2点になります。

まず1つ目は、得方と与え方のお話です。よくギブアンドテイクといいますが、ギブする人（与える人）と、テイクする人（得る人）に分かれます。私達日本人は戦後の教育のもと、得方ばかりを学んできています。学校教育では「答えの得方」という言葉が非常に多く使われていますし、社会に出てからも収入の得方、価値の得方ばかりに囚われて生きています。しかし、多くの偉人や現在日本で成功している人を、もう一度見つめ直してみますと、そのほとんどの方は「与えること」に集中しています。与えて与えて与え続ける。「こういった方々しか成功していない」と言っても過言でないでしょう。万人幸福の葉の83ページにかかれてある二宮尊徳先生のたらいの水の例話にもありますが、とにかく与えることができる人にしか成功は来ないのです。少し目を凝らして世の中を見ていると、価値を提供してこそ金銭が受け取れるというのが当たり前のことです。だから私たちは価値を提供する側に回らなければいけないということです。その価値を提供する側になれるのが倫理法人会ではお役を受けるということでしょう。

そして2つ目は、倫理法人会憲章の冒頭にも書かれていますが、「実行によって直ちに正しさが証明できる」という部分と、活動指針のひとつ目に書かれている「倫理の学習と実践の場を提供し」という部分になります。多くの現代人は「わかってからする」ということをよく言います。それを私は「もっともらしいこと」と表現しています。それはもっともではないけど、もっともに聞こえるということです。先日還暦を迎えた60年の私の人生を振り返れば、大切なことのほとんどが逆の「やってからわかる」というものでした。倫理法人会の活動の基本もこの「やってからわかる」、もっと言えばやったことのない人にはわからないと言っても過言ではないと思います。

ですからせっかく同じ1万円を支払っているのであれば与える側、価値を提供する側、アウトプットする場所として倫理法人会を最大限活用しないと損だと考えています。時間の都合上かいつまんで話していますが、もう少し詳しく理解したい人は9日の飛鳥倫理法人会、21日の奈良市倫理法人会での講話でこのお話をさせていただきますのでぜひお越しいただければと思います。そしてお役をお受けしていただき、全うしていただけた方々の事業が必ず良くなるという自信も私にはあります。その根拠をぜひ聞きに来てください。

さて、では奈良県倫理法人会としての全体の活動の中における県役職者の役目を明確にさせていただきます。現在奈良県は皆様ご承知の通り、長年、社数も浸透率も47都道府県の底辺である最下位47位で倫理法人会を支え続けています。ですから伸びしろは一番あります。また抜かされることがないという面では47都道府県会長のうち私が一番気楽な会長でもあります。46位の福井県会長なんかは「奈良県に抜かされたらどうしよう？」と私より少しだけプレッシャーが多いのではないのでしょうか？

そんな話はさておき、今期の奈良県役員は「単会を応援する組織」として動いていくことにしています。主役は単会、会員の皆様、そして三単会長に輝いてもらえるように活動してまいります。

基本は倫理法人会の王道であるMSに特に注力をし、常に50人MSを開催できるようにするにはどうしたらいいかというところに取り組んでまいります。また、倫理法人会の基本的なプログラムである、倫理経営基礎講座・富士研・倫理経営講演会・経営者の集いと

いうところに力を入れて行きます。まずは倫理研究所が用意してくださっているプログラムという基本中の基本の充実を図っていきます。

また、どこの企業でも同じではないかと思うのですが、ゲストのフォロー、新メンバーのフォローなどフォローに注力できる組織を目指していきます。ゲストは会社で言えば顧客です。新メンバーは会社で言えば新入社員です。どこの会社でも顧客管理、新入社員を早く一人前にするというのが喫緊の課題であると思います。私はオフィスシオンという葬儀社を22年前に立ち上げ、15年前からは顧客管理を徹底してやってきました。それしかやっていないという方が正しいかもしれません。チラシも電話帳広告もインターネットもその他一切の広告に費用をかけてきませんでした。それでも現在奈良県では3位、奈良市では1位の件数をこなす葬儀社として、コロナ以降は特に「オフィスシオンの一人勝ちの市場になった」と周囲に言われています。この7年の社員の離職率は0です。いろんな企業のお悩みは社員が定着しないというところにあると思いますが、その課題も解決できています。「企業は人なり」とよく言われます。また「財を残すは3流、仕事を残すは2流、人を残すは1流」と言われています。この奈良県倫理法人会も、今の役員の方々を中心に次にも多くの人が活躍していただける場を提供していき、人を育てていくことが私の重要な役目だと認識しています。それにはあらゆることをデータ管理できるシステムが必要で、そのシステムを作成していますので、もしかすると「今までこんな手間なかった」「仕事が増えた」という感じも出るかもしれませんがご協力をお願い致します。

今期の奈良県の三役は会長の私をはじめ幹事長も副幹事長も事務長もすべて単会長経験者ではありません。そして私自身は会長向きの人間ではないと常々思っています。半年前には「会長には最長3年というルールがあるけど、幹事長にはそのルールは無いからあと3年幹事長をさせてもらったら楽しいなあ」と考えていました。けど、そんな私に会長の大役が回ってきました。だからこそできること、それは主役ではなくプロデューサーに徹すること。県役員はそれに徹してまいります。

最後に少し触れておかないといけません、奈良県倫理法人会の普及目標数字は中間が1月19日達成で253社、期末が6月19日達成で268社です。具体的には各単会長のこの後の決意表明にお任せいたします。というのも奈良県のこの数字は単純に県内三単会の数字を足したものにしか過ぎません。頑張ってもらいたくのは各単会。何度も申し上げましたが、県の役員はその単会を応援していく作業を地道にやっていくしかないと思っています。

どんなことでも最初の一步は本当に小さなことです。勝ちっぱなしの人間が人の弱さや美しさを理解できるはずがありません。成功したい、幸せになりたいと思うならば小さなことから始めましょう。そしてそれを無理なく継続していくこと。継続は力なりとよく言います。忍耐強く諦めないで繰り返し繰り返しやるということ。

自分の人生が輝きを増すには毎日毎日内面を磨くこと。内面が満たされると人は美しく変貌します。その内面を満たすのは安易な生き方でも華やかな生き方でもありません。

どんな小さなことでもいいから、他人の評価を得なくてもいいから、自分ができることを継続してすることです。

私は明治生まれの祖父に育てられました。「置かれた場所で咲きなさい」という生き方を幼少期に徹底的にしつけられました。また、倫理の勉強の中でも出てきますが、「不悲不喜」悲しみすぎず喜びすぎずという生き方もしつけられました。

人には生まれながらにして果たさなければならない使命というものがあります。こうやって今奈良県倫理法人会の会長をお受けさせていただくのも天から与えられた使命だと思っています。「幹事長という大きな役をさせてもまだわからんのか」と言われているのかもしれませんが。

目的があって目標がある。目的は倫理法人会憲章にしっかりと書かれています。普及に関して言えば数字がついて回りますが、私たちは人がよりよく生きるための生活法則を学んでいます。それを少しでも多くの方にお伝えすることが地球をよくすることだと認識して、奈良県にも日本創生の風を吹きまくらせるために懸命に努めさせていただきます。

最後の最後になりましたが、今まで奈良県倫理法人会の歴史を紡いできてくださった歴代の皆様に感謝申し上げ、私の任期中はそのバトンをきっちりと次に繋いでいけるように活動していくことをお誓い申し上げます。

令和5年度 達成式典謝辞 原文

本日は多くの方々にお集りいただき、無事、令和5年度奈良県倫理法人会の達成式典を開催できましたこと深く感謝申し上げます。

令和5年度奈良県倫理法人会の普及目標であった268社に対し、274社の上ブレ達成は各単会長さん、単会役員さん、会員さん、そしてバックアップに回っていただいた県役員の皆様の強い思いと執念の賜物だと感謝いたします。本日は倫理で言うところの13条、「反始慎終」の「慎終」ということで、達成の喜びを皆さんで分かち合っております。この慎終、達成行事を行えること。これがいつから見えていたかと思えば、すでに昨年9月1日の年度始め式の段階で私には見えていました。あの日の辞令を受け取る時の皆さんの燃えるような熱い想いがこの実を实らせました。途中、苦しい時期もありました。例えば中間目標が奈良県としては未達という結果に終わった際には、周囲から「本当に大丈夫？」と見られたことでしょうか。しかし、私自身は一度たりとも諦めるどころか憂えることすらありませんでした。そして全役員、会員の皆様も懸命に活動していただき、迎えたのが本日は。

さて、奈良県倫理法人会では今年度は「人づくり」を目標として活動して参りました。新会員の皆様は大きく成長していただいております、すでに運営委員をお引き受けいただく方、次年度からは幹事をお引き受けいただける方も育って参りました。また長年倫理活動をされている方々の中でも、より積極的に取り組んで下さる方が多数出てまいりました。次年度も更に新たなステージに皆で挑戦できることは、本当にありがたいと喜びでいっぱいです。

何度も口酸っぱく申し上げておりますが、「せっかく倫理を学んでいるのであればお役をうけて、積極的に取り組まなければ損」ということは自明の理です。そして。「価値を提供する側の人間になる」ことは、皆さんの事業の発展に即つなぐと確信しております。また、各単会においては「自立自走」を目標に掲げ、様々な取り組みをお願いしてきました。モーニングセミナーの参加者数増加のためのスタンプカード等の楽しいアイテムや、本日表彰が予定されている朝礼コンテストなど多くの工夫を凝らしてきました。特に「最強のモーニングセミナーなら（奈良）行くしか（鹿）ない」というキャッチフレーズのもと、モーニングセミナー活性化研修の実技編の研修をして、各項目の隠れた要素を学びあったことは非常に有意義でした。

企業の経営には、全体と部分、連結と個別、統合と分割、などと相反する要素がいろいろありますが、中でも集中と分散が大切です。集中と分散は、企業の持つ求心力は何か、そして、拡大していこうとする遠心力は何かによって決まります。今年度は委員会活動をモーニングセミナー委員会と朝礼委員会に絞り込んで一点集中してきました。ランチエスターの法則である接近戦、局所戦を用い「小さな1位」をコツコツと積み重ねたのです。その他、倫理法人会活動が皆様の事業発展に結びつくように様々な工夫をしております。例えば、「得方と与え方」の話とか、「たらいの水」の話がそうです。「得方と与え方」の重要性は皆さんもうご存知だと思いますが、多くの偉人や成功者は「与えること」を優先しています。むしろ際限なく与え続ける。極論を言うと「そのような方々しか成功していない」のではないのでしょうか。

また、万人幸福の葉の83ページに書かれている二宮尊徳先生の「たらいの水の例話」にもありますが、とにかく与えることができる人にしか成功を得ることはできないのです。少し目を凝らして世の中を見てみても、「価値を提供してこそ金銭が受け取れる」ことが当たり前です。ですから私たちは価値を提供する側に回らなければいけません。倫理法人会で価値を与えとは何かと申しますと与えるということは、お役を受けるということでしょう。

さて、私の中ではすでに次年度が始まっています。6月9日、10日に熱海で法人局の方針説明を受けて、奈良県の次年度の方針を執行部会・相談役会で決定する作業を進めてきました。7月16日の次年度役職者研修の際にお時間をいただき、発表させていただく予定ですのでご期待ください。

三か年計画の2年目に当たる次年度につきましては「形づくり」をテーマに取り組んでまいります。皆様の会社においても何をすれば組織としての形づくりが叶うのか悩んでいる方も多いことでしょう。そのことを次の1年で徹底して学び実践していきます。

ですから、ぜひ次年度もモーニングセミナーにお越しいただくと共に、ぜひ役職者として一緒に取り組んでいただくことで、必ず皆様の会社の発展にもつながることを約束させていただきます。半信半疑の方こそ役職者になって実証していきましょう。何はともあれ、次年度もくれぐれもよろしくお願いいたします。奈良県としての達成は県内単会の皆様の達成でしかできないことです。今一度、それを心に刻んでいただき、主体性を忘れずをお願い申し上げます。私に於きましては、各単会のサポート役として懸命に動いてまいります。些細な疑問、質問、相談でも結構です。いつでもご連絡下さい。人は精一杯やりきらないと後悔を残します。後悔を残さないように来期も県役員一同全力でやりきります。今後とも、今まで以上によりしくお願い申し上げます。



令和 6 年度 年度はじめ式会長挨拶 原文

9 月に入りましてもお厳しい残暑が続いておりますが、皆様方におかれましてはお変わりなく命がけの経営で事業に邁進していらっしゃるものと存じます。本日は大変多くの皆様にお集まりいただき、年度はじめ式を開催できましたこと、心より感謝申し上げます。

また昨年度、令和 5 年度におきましては、奈良県倫理法人会の目標達成において、各単会長の皆様、単会役員の皆様、そして会員の皆様の多大なるご尽力を賜りまして、見事に達成でき、感謝に堪えません。誠にありがとうございました。

さて、今年度、令和 6 年度におきまして、奈良県倫理法人会の方向性は「形づくりの年度」でございます。これは昨年度が「人づくり」と題して、目標数字の達成だけでなく、人材育成にも注力をいたしましたところ、大変多くの、そして素晴らしい仲間ができたことに基づいています。

「形づくり」は具体的に申し上げますと、「組織づくり」です。

「形づくり、組織づくりとは何か？」と、一から皆様と共に学び合い、進めて参りたいと考えています。

今後の組織創りの在り方について、一つ一つ具体案を出し、そして実行と検証を行って参りましょう。

組織の在り方について考える際、初めに知っておくべきことがあります。それは、倫理法人会を始めとする多くの任意団体の組織形態が、今後日本の組織形態の中心になると考えられている「ティール組織」と極めて類似性が高いということです。

「ティール組織」とは、2014 年フレデリック・ラルー氏の著書の中で紹介された組織の在り方です。組織の進化は、下位から述べますと、圧倒的な支配者がトップに立つ「レッド」、トップダウンの階層的構造を持つ「アンバー」、目標達成を第一とする合理的な「オレンジ」、メンバーが主体的に行動できる「グリーン」、そして、個人が意思決定できるフラットな「ディール」となり、「ティール」組織形成における進化の最上級にあります。

ちなみに「ティール」という言葉はなじみのない方がほとんどだと思いますが、これは「青緑」を意味します。

戦後の復興期から高度成長の時代を経てバブル期に日本を支えてきたいわゆるピラミッド型組織はとうの昔に崩壊しているのです。

現代の日本人には到底受け入れることのできない化石のような価値観と考えられます。占星術的に言うと 200 年続いてきた「土の時代」は、お金、物質、地位、など「目に見える形で豊かになること」を望む人が多い時代でした。しかし 2023 年には完全に「風の時代」にシフトしました。風の時代は、自由、平等、柔軟性、情報、知性、精神性といった、風のように目に見えないものの価値が高まる時代です。当然、組織形態もティール組織へと変わっていく流れなのです。

組織形態について今ここで詳しく解説すると、とても長くなりますので、詳細は今後の県役員会をはじめ、私の講話、その他諸々の機会に説明をして参りますので、多くの皆様も一緒に学んで下さったら嬉しく思います。

少しだけ話をさせていただきますと、日本の歴史において認識されている「ティール組織」は江戸末期に坂本龍馬らが設立した「亀山社中」だと考えられています。諸説では人類は時代を遡った弥生時代から農耕民族として「ティール組織」を基盤として生活していたとも言われています。

これからの時代は「ティール組織」をいち早く自社に導入できた組織が、今後、日本だけでなく世界、そして地球規模で考えれば人類全体の中で生き残ることができる組織に必ずなることでしょう。

「ティール組織」において非常に重要なポイントは、社内の人間関係の在り方や取引業者との関係性です。なぜなら、従業員や取引業者などの内部顧客と言われる身近な人々が一番大切な顧客であるからです。倫理において「人は鏡の実践」と言われるように、普段から慣れ親しんだ人々との関わりを日頃から常に良好に整えていくことが、倫理の学習と実

践にあたります。

また、1990年代から、災害に関して、自助、公助、共助という言葉が頻繁に使われるようになったことは周知のことと存じますが、「ティール組織」においては、自己責任意識を持って自助努力をする人材や、仲間を助ける共助に重きをおきます。実は、自助、公助、共助という考えは今に始まったことではなく、江戸時代まで遡ります。現在の山形、秋田周辺の出羽国米沢藩の藩主である上杉鷹山が「三助の実践」として自助、互助、扶助の考えで財政破綻していた当時の藩をこの「三助の実践」に基づいて、奇跡的に立て直したそうです。また、先に例を出した坂本龍馬の「亀山社中」は、自己責任の精神と自身の役割を認識し、セルフマネジメント（自主経営）しながら、共通の目的を持った仲間たちと共に助け合いながら運営されていた組織形態でした。まさに「ティール組織」であります。この組織形態を令和版にバージョンアップし、私たちが生きているこの現代社会で用いることが、今年度の倫理研究所が「世直しの精神を呼び戻す」と表している行動基準であり、具体的な実践目標であります。

さて、今年度の一番大きな行事は1月21日（日曜日）に行われる奈良県倫理法人会設立25周年式典です。奈良県倫理法人会は歴代の方々から繋いでいただいたタスキをしっかりと引継ぎ、四半世紀を迎えることができました。

多くの方々から受け継いできたこの結晶を、更に磨き上げ、次の世代の方々にお渡しすることが現在役職を預かっている私達の使命であります。

私は第9代会長をお引き受けしている今この時に、しかも最長3年の期間の内で1年半が経過した折り返し地点でこの式典を開催できることを光榮に思います。

家庭においてはご先祖様から頂いたこの命を子や孫に引き継ぎ、地球規模においてはこの美しい地球を次世代に残していくことが今の時代を生きる私達の大きな使命です。

この25周年、四半世紀という重要な節目の折に、さらなる飛躍を目指して皆様と大いに未来を語り合うことを楽しみにしています。多くの方々のご参加をお待ちしておりますので、皆様是非お時間を作っていただいて晴れやかな気持ちでお来しいただきたいと願っています。

更に申し上げますと、今年度の大きな行事としては、奈良市の分封です。具体的な日程を申し上げますと、今日の年度ははじめ式で分封委員長はじめ分封委員を任命し、奈良市の中で多くの作業及び普及を進めていただきます。

そして令和6年6月19日に開設の申請を致します。その後、プレモーニングセミナー等を開催し、8月4日には開設式典、8月8日には第一回のモーニングセミナーを開催する運びです。

新単会の名称は「奈良中央倫理法人会」です。開催曜日は木曜日、開催場所は奈良市倫理法人会と同じく奈良ロイヤルホテルに決定しております。気合は十二分に入っており、すでに開設式典だけではなく、令和6年12月までのモーニングセミナー会場も予約済みでございます。

この分封に関してのエピソードを少しお話しします。ちょうど昨年の今頃、年度はじめ式を開催した頃、私の頭の片隅には分封をすることなど、毛頭ありませんでした。しかし昨年11月の全国7万社大会に参加された奈良市の木村会長が「どうしても分封をしたい」と声明を発表されました。そして徐々に奈良市倫理法人会内で機運が高まり、ついにこの計画を実現するあと一步のところまで持ってくることができました。

奈良県としても全力でバックアップし、分封の準備を行っています。私は「役職を担っていただける人材が増えたから」分封に至ったのだと強く思っています。決して単会人数が増えたからという安直な話ではありません。この考えを基盤とし、奈良市倫理法人会、分封準備委員会においては昨年進めてまいりました「ひとつくり」を更に強化し、「かたちひとつくり」と並行して進めてまいります。

ところで、任意団体の組織創りの要と言えばやはり「事務局体制の強化」が肝要です。私も全国各地の数多くの団体からお声をかけいただき講演等の機会をいただいておりますが、その中で強く実感したことは、事務局体制という柱が強く、かつ正常に機能している団体は何においても強いということです。

また、過去の職場におきましては三重県議会事務局と様々な事案を進めていた経験があり、

その事務局の在り方をしっかりと観察していました。事務局がしっかりしていれば順調に物事は進みますが、逆に事務局がしっかりしていなければどんな些細なことでも前向きには進んでいかないのだということを学びました。

事務局体制の件に関しては、私が幹事長を拝命した2年前から実は独自に取り組んでまいりました。例えば、自分からは法人局や方面長、研究員の方々へ直接連絡することを避け、必ず事務局を通して連絡をしていただくと決め、その通りに動いていただいていた。

この目的は、私が行っていること、携わっていることの全てを事務局に把握してもらうことでした。このように、今後も事務局の機能、体制強化をますます重要視し、組織創りに必要不可欠な取り組みとして位置付けてまいります。

そこで皆様にお願いがございします。それは事務局のメンバーの扱いを今一度見直していただきたいのです。皆様は「事務局員」の方々を、ご自身の会社にいらっしゃる「事務員さん」と同じだと勘違いしてはいませんか。事務局員の方々は「事務員さん」ではなく、私たちの組織体制の柱であります。この場を借りて、事務局員の方々を「事務員さん扱い」することを改めていただきたくお願い申し上げます。

この度、事務局員の方々の業務が捗るように事務局内の机等のレイアウトを大きく変更いたしました。また、今後は事務局員の皆様の作業効率を考え各種書類の書式等も変更や統一する可能性が濃厚です。何卒ご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。この強化は多角的な構想を練っておりますので、各単会の皆様の活動を事務局が今まで以上にバックアップできることと存じます。

話は変わりましたが、各委員会におきましては、モーニングセミナー委員会を藪内委員長と吉田副委員長を中心に、更なるモーニングセミナー活性化を実現するために、研修会等の企画を準備しております。奈良県倫理法人会の活動の要は、何をおいてもモーニングセミナーの1点です。これは永遠不変の鉄則です。モーニングセミナー会場を文字通り神聖化するための取り組みを本年度も引き続き行ってまいります。

朝礼委員会は谷井委員長そして下田副委員長のもと、活力朝礼の導入企業の増加に向けた取り組みをしていただきます。そして、本年度の倫理経営講演会は全ての単会において、B型の朝礼実演を行うかたちの倫理経営講演会にいたします。

また、今年度は研修委員会並びに女性委員会を再設置し、研修委員長は加瀬さん、研修副委員長は品川さん、女性委員長は姫嶋さん、女性副委員長は新吉さんをお願いしております。主に研修委員と女性委員の委員会で新会員向けの説明会や行事を担当していただきます。大役をお任せすることになりますが、私も全力でサポートいたしますので遠慮なくご相談ください。新会員のフォローは、昨年度に実施する予定で活動計画に挙げていたにも関わらず、残念ながら実施に至らなかった事項です、今一度体制を変えて今年度内の実施を予定しております。

さて、ここで、お待ちかねの今年度奈良県倫理法人会のスローガンを発表いたします。「世直しの精神を以て奈良県を創造的に再生する」――これが令和6年度のスローガンです。少し理屈っぽいので、暗記していただく必要はありませんのでご安心ください。私の感覚的な所感ではありますが、現代の日本は以前と比べて何かが違います。歯車が狂ったような違和感を覚えます。もちろん、様々な要素が絡み合っているのが今ですが、今一度少子化・高齢化が進む日本の行く末を案じ、自分自身の老後の懸念事項だけに止まらず、未来を担う若者たちのために自分たちが何をすべきか、公共の利益を具体的に考え行動していく時が到来しています。

最後になりましたが、数字に関して触れておきます。経営者の集まりである以上、数字が必達であることは言うまでもありません。

しかし、数字という結果よりも、その数字に向かって進むプロセスが非常に重要なのです。私事で恐縮ですが、「結果だけを見ていては、運頼みになる」というのが私自身の会社経営の失敗から学んだ教訓であります。それは、私だけでなく、皆様にも当てはまる「自明の理」だと考えていますので、このことは皆様方の事業においても重要に考えていただきたくお願い申し上げます。

さて、ここで、年度の奈良県倫理法人会の目標を発表いたします。まず、中間目標は1月19日に288社達成、そして期末目標は6月19日に325社達成です。大言壮語と思われる

かもしれませんが、私の中では既にこの数字は達成しています。どういうことか、具体的に申しますと、私は 6 月に熱海で開催された法人局の方針説明会を受け、この約 3 ヶ月間はいつも以上にがむしゃらに動いてまいりました。その中で先に述べた目標についての「達成」が確実に見えました。あとは活動計画に基づいて前向きに「やるぞ」という心意気、「できる」という確信をもって、達成に向けて着実に取り組むだけです。ということで、この後の懇親会は「予祝」として大いに来る「達成」を皆でお祝いいたしましょう。思い返せば私が倫理法人会に入会した今からわずか 4 年数ヶ月前は、赤く熟しても渋みの抜けない渋柿のような私であったのに、倫理を学ぶことで化学反応が起こり、喜ばしいことに甘柿に変化できました。

また、いつも「不足不満の心」を持ちアルコール依存症の末期だった私が、日常のほんの小さな倫理実践を積み重ねるだけで、良い変化が大きく表れたことは、私の一番身近な家族が最もよく感じとり理解しています。

そういう素晴らしい力が倫理法人会にはあります。倫理法人会の活動を楽しみながら自分が変わる、自分を変えていくという経験をありがたく享受しております。

この 1 年間も、また皆様と楽しみながら活動に励み、そして奈良県倫理法人会役員一同、全力で皆様を応援し、支えて参りますので、令和 6 年度も何卒よろしくお願いいたします。



令和6年度 達成式典謝辞 原文

奈良県倫理法人会第9代会長、寺尾俊一です。

本日は大変お忙しい中、令和6年度奈良県倫理法人会の達成式典にお集まりいただき誠にありがとうございます。また、この達成式典を無事開催できましたことも重ねて感謝申し上げます。

令和6年度に於きましては、私たち奈良県倫理法人会の普及目標は325社でございました。大変喜ばしいことに、報告締め切り日である6月19日の時点でみごと目標を達成することができました。これも日ごろから皆様の倫理法人会活動へのご理解、ご尽力の賜物であると深く感謝しております。

私どもは経営者の集団でありますから、数字の目標達成はある意味当然のことであると考えられるかもしれませんが、しかし、倫理法人会における普及目標という数字の達成は、それと一線を画しており、会員の皆様はじめ、単会役員の皆様、単会長様、またバックアップをして下さっている県役員の皆様方全てのご尽力であり、全員一丸となって取り組んだ尊い成果だと心から御礼申し上げます。

いま、昨年9月8日、年度はじめ式の折に、この神宮会館で皆様の前で令和6年度の奈良県倫理法人会に於ける様々なことがらを誓った時のことが昨日のように蘇ってまいります。あの日、辞令を受け取るときに感じた皆様方のほとばしる元気と情熱がこの目標達成と言う大きな果実を実らせたのです。

もちろん、道半ばに於いては、試練を伴う困難な時期もありました。特に中間目標が未達だった折には「本当に達成できるのか？」と不安に襲われた方もいたことでしょう。しかし、その不安も私たちが持つ倫理の学びに立ち返って考えてみれば不安は希望に変わりました。なぜなら私たちは苦難に立ち向かう方法を常に倫理で学んでいたからです。それをすぐさま実行に移し、未達成の単会においては、会の現状や取り組みに対してPDCAサイクルでいう「C」、つまり「チェック」をしていただき、その苦難を糧として後半戦に取り組んでいただきました。このことで大きく飛躍し、この成果となったのです。

また、当然のことではありますが、物事と言うものは結果よりも経過、つまりプロセスをよく見ていかなければなりません。私が日ごろから常に「結果よりプロセス」、「数字よりストーリー」と口酸っぱく申しているので皆様の苦笑いが見えるようでございますが、それはともかく、奈良県倫理法人会に於ける今期の取り組みは「形づくり」でした。これからの組織の形態、あり方を皆様と一緒に学びながら進んで参りました。私の願いとしては、倫理法人会だけ学ぶだけではなく、皆様方の会社におかれましても、この学びを実践的に活かしていただきたいと考えて一年間、懸命にお伝えしてきました。

縦型のトップダウンと言われる旧来の組織のあり方から、ティール組織という横型の組織のあり方が倫理法人会活動の組織運営に大切であるということ、またリーダー論としては剛腕なカリスマ的リーダーの存在よりも、支援型であるサーバントリーダーの養成が急務であると主張してまいりました。また、中小零細企業で陥りやすい属人化、つまり社長ないしは特定の社員が担当している業務の詳細内容や進め方が、当人以外では分からない状態をなるべく減少させ、組織が円滑に機能するためのあり方と実践方法を皆様と対話しながら共に学んでまいりました。

「形づくり」の一環としての奈良中央準倫理法人会の開設は、8月4日の開設式典を待つのみとなりました。奈良市倫理法人会の皆様の数字に対する意識。それは自分たちの目標達成の数字に対してのみならず、奈良市に倫理の活動を拡大するために必要なティピングポイントに対する強い意識でした。今期はいったん50社で奈良中央準倫理法人会を開設するという段階的措置を取りましたが、来期には必ず100社を目指し、正倫理法人会を設立すると同時に、奈良市倫理法人会と合わせて204社で倫理の活動を奈良市に根付くように着実に進めて参りましょう。

さて、来期は、私にとって任期が3年目、つまり最終の年になります。もちろん当初の計

画通りに「内容づくり」の年として邁進していく所存です。この取り組みをひと言で表すと「実践者を増やす」ことであります。幸いにも6月6日、7日に熱海で参加した、倫理法人会次年度方針説明会の中で、この目標のプロセスとなるヒントを多く得ることができました。私はこの説明会参加に於いて私たちにとって必要なものを察知し吸収できるようにアンテナを張りめぐらせていました。このように自分の情報感度をあげると、自ずと必要なことが自分の中に入ってくるように感じました。同時に、法人局の取り組みと奈良県の取り組みがリンクし始めたようにも感じました。とにかく全一統体の原理でいうところの「見えないところではひとつつながり」をヒシヒシと感じた次第です。

これを踏まえて、改めて私たちが行うべきことをお伝えします。まずは我々の母体組織である倫理研究所が作成したプログラムを確実にこなし、方針をしっかりと守っていくことです。そして倫理研究所としっかりとつながることです。決してぶれることがあってはいけません。自分の中に常に倫理があるのです。これが「元とつながること」だと肝に据えてください。この2年もこのことを常に念頭に於いて進めてまいりましたが、次年度もこの方針をさらに強固に、しっかりと守ってまいりましょう。

具体的な内容は7月21日の次年度役職者基礎研修や、県役員会、そしてモーニングセミナーの講話の時にお時間をちょうだいする予定ですので、その際に一生懸命お話し致します。一生懸命といえば、私はいつも自転車みたいだと言われます。漕いでいないと倒れる、と。自分では、次に続いて下さる方々により良い形でバトンをお渡しできるように全力疾走しているだけなのです。ですから皆さん、この気持ちをぜひ受け取っていただきたくお願い申し上げます。

倫理法人会に於いて、奈良県は47都道府県のうち最下位の47位であります。「汚名返上のため頑張ろう」と冗談交じりに言うこともありますが、本来は他府県と争うことよりも、また、他のどんなことでも、他と争うことよりも大切なことがあります。一番大切なことは「今日の自分は、昨日の自分に勝っているだろうか？」ということです。この「勝つ」は、売上を上げたとか、長く働けたとか、そういう目に見えることだけではありません。昨日は体を大切にせず体調不良に陥ったから今日は休養するという賢明な判断ができた、部下に頭ごなしに怒らず傾聴しながら話し合えたなど、より良く生きることができたということが、勝利なのです。

最後になりましたが、私にとっては、皆さまがこの倫理法人会の活動を楽しんで参加して下さっていることが何よりの励みとなっています。今年度の達成を共に迎えることができた皆さまは、会を盛り上げ、多くの人に勇気を与えつづけて下さった尊き会員様であります。この達成の勢いで全員一丸となり、来期もますます活動推進に邁進して参りましょう。この1年間、誠にありがとうございました。



令和 7 年度 年度はじめ式 会長挨拶 原文

本日はお忙しい中、倫理法人会年度はじめ式典にご臨席いただきまして、まことにありがとうございます。厚くお礼申し上げます。今年度もこれほど多くの皆様にお集まりいただき、無事開催迎えることができました。

昨年度、つまり令和 6 年度におきましては、皆様のお力添えいただいたおかげで奈良県倫理法人会の目標は見事に達成。念願の奈良中央準倫理法人会の開設も叶い、全てにおいて順調であることは全て皆様方のご尽力の賜物であり、感謝の念に堪えません。誠にありがとうございました。奈良県倫理法人会は本当に順調に進んでいます。

さて、奈良県倫理法人会において、今年度、令和 7 年度の目標は「内容づくりの年度」でございます。これは令和 5 年度・令和 6 年度において、それぞれ「人づくり」、「形づくり」と標し、数値目標の達成だけでなく人材育成や組織作りにも注力をいたしました。

その結果、喜ばしいことに奈良県倫理法人会には大変多くの素晴らしい仲間が生まれ、人材が育ち続けています。さらに組織としての基盤も盤石になって参りました。

今年度の目標である「内容づくり」は、倫理法人会での教えで言いますと「拡充」の「充」を意味します。倫理法人会は、常に数の拡大である「拡」と、質の向上・充実の「充」を両輪として活動しております。

「充」について申し上げますと、私たちにとって「充」とは「会員の満足度が向上すること」に尽きます。具体的に申しますと、より多くの会員の皆様が倫理実践に取り組み、それによって素晴らしい結果を得、倫理の輪を拡大することです。

つまり、第一にはとにかく「実践者を増やす」ことが重要です。第二に、実践を通じ「倫理体験」を得ることで倫理を実践することの素晴らしさを体感していただきます。そして第三に、この体験を周囲の方々に伝え、倫理の素晴らしさを知っていただくことが肝要です。兎にも角にも、実践あるのみ。この三点を、皆様と共に進めて参りたいと考えています。

つきましては、令和 7 年度は実践報告会を全単会で開催していただく段取りをしております。おおよその流れは次のとおりです。

まず、①MS などの講話からの気づき②倫理の書籍などからの気づき③倫理指導から得た実践のうちいずれかでもよいので、それにもとづいて倫理実践に取り組んでいただきます。

そして得られた倫理体験を、報告会にて多くの会員の皆様と共有する、という運びです。この倫理体験こそ、倫理法人会で学ぶ最大にして最高の特長であります。これは他のどの団体にもありません。特に自己啓発セミナーにはじまる、ハウツー、小手先の技術を教えるような団体で得られることはまずありません。ですから、倫理実践の素晴らしさを今一度噛みしめ、数多くの実践を通して、生き活きとした実践者であふれる会にして参りましょう。

さて、今年度における要点をお伝えしますと、まずは奈良中央準倫理法人会を 100 社にし正単会としての設立することです。その他、飛鳥倫理法人会・大和まほろば倫理法人会も 100 社の正単会としての資格復帰を確実にこなさせていただきます。さらに奈良市倫理法人会においては奈良中央倫理法人会との 2 単会で奈良市のティッピングポイントである 204 社を確実にしていただくようお願い致します。各単会が設定した目標達成のために奈良県役員一同応援してまいりますので些細なことでもご相談くださいますようお願い申し上げます。

委員会活動におきましては、奈良県倫理法人会の活動の要であるモーニングセミナー委員会の委員長として森高士さん、副委員長は吉村るみさんをお願いをしております。私共の活動は何をおいてもモーニングセミナーの1点につきます。これは永遠不変の鉄則です。モーニングセミナーの会場を文字通り神聖化するための取り組みを本年度も引き続き全力で行なってまいりましょう。

今年度も、年3回のモーニングセミナー研修を実施する予定です。お二人とも新任ですが、すでに県内各単会のモーニングセミナーに足しげく通っていただき、各単会の課題などを的確に指摘下さっています。モーニングセミナーにおける自単会参加者数のアップはまさに「充」の部分の向上、ひいては会員満足度向上の証ですから、その施策をどんどん行なっていただきます。

朝礼委員会は下田真也委員長と村田臣弘副委員長をお願いをしております。昨年度より継続して職場の教養を使用した活力朝礼の導入や、感動朝礼の実施などを中心に動いていただきます。朝礼というと多くの社員さんがいる会社のものだと思われがちですが、倫理法人会では「職場の教養」を使用した一人朝礼の実施も推進しており、その効果についてもご説明いたしますので、全員に朝礼の活動にも注力していただきます。

女性委員会におきましては、は姫嶋怜巳委員長と新吉文枝副委員長をお願いをしております。私は全国いろんな単会にお伺いしておりますが、女性経営者が輝いている単会は確実に盛り上がりを見せ、活気ある単会となっております。奈良県においても女性の活躍やリーダーシップが重要であると考えており、この1年、女性委員会の活動には大きく期待しております。奈良県には一部男子校というか男子部のような単会が存在します。そこにおいても海外の女性首相や女性アイドルのように輝いている方が存在するから、団結力や活気のある単会になっているのです。

そして「充」の向上、つまり会員満足度アップの要であるのが研修委員会です。今年度も引き続き加藤賢治委員長、品川美栄子副委員長をお願いをしました。昨年度よりお願いしている、「新会員に対する倫理法人会の活かし方」についてオリエンテーションを継続していただく他、今年度の「内容づくり」の要と位置付けている実践報告会の実施、そのためのスピーチ講話者の養成講座まで至れり尽くせりの内容を研修委員会にお願いしております。盛りだくさんの内容でございますのでご期待ください。

また、本日急に特記事項として記さなくてはいけなくなった事柄があります。事情はお察しいただけると思いますが、私は研修委員会のもうひとつの大きなお役目として富士研受講の推進を行います。昨年度は通常の経営者倫理セミナーのほかに、富士研定番の12月と5月に開催されている、丸山敏雄創始者の生涯を振り返る「丸山敏雄とその時代」に多くの方々にご参加いただきました。特に奈良中央の開設にあたっての中心メンバーの方々には多くの受講をいただき、創始者の思いを知ることによって開設に至ることができたと確信しております。

今年度も2月に開催される通常の経営者倫理セミナーにも多くの方々の受講を推進するとともに、「丸山敏雄とその時代」にも皆さん一緒にご参加ください。日々の業務に忙殺されそうな中、2泊3日の安らぎ、そして感動に満ちた学びのひと時を共に過ごしましょう。

詳しくは明朝の飛鳥倫理法人会のモーニングセミナーでご説明する予定ですので是非ご参加ください。

最後に、奈良県倫理法人会全体で見ると、令和7年度の普及目標数字は4単会合わせて405社となります。各単会の資格復帰が100社と申し上げましたが、都道府県倫理法人会の正資格は何社なのかと考えさせられました。そして昨年度末に奈良県と同じ創立25周年の滋賀県の式典に参加してまいりましたが、その時に、都道府県としての正資格はもしかすると1000社ではないのかと感じました。なぜなら法人局が準備してくださっている委員会活動が機能するのが1000社だからです。そうすると来期の目標である40

5社はまだその半分にも満たない数字ではありますが。私の会長任期の内には決して達成できないことができないであろう数字です。私は接ぎ木でしかありません。しかし、今の皆様のこの活力、そして2年間進めてきた「人づくり」と「形づくり」で次の世代や人材、そしてまたその次…と続く方々がしっかり活動していただける基盤はすでに出来上がったと確信しております。皆様と一緒に今後のさらなる発展の前兆、夜明け直前の今の奈良県倫理法人会、私からすれば噴火直前の火山のようにも見える奈良県倫理法人会の活動を今年度「内容づくり」として推し進めてまいりましょう。

今まで奈良県倫理法人会の歴史を紡いできてくださった歴代の皆様に感謝申し上げ、私の任期3年目の最終年、そのバトンをきっちりと次に繋いでいけるように1年間活動していくことをお誓い申し上げます。

この1年間もまた皆様と悩みや苦しみ、そして楽しみを共有し、活動に励み、そして奈良県倫理法人会役員一同、全力で皆様を応援し支えて参ります。

令和7年度も何卒よろしくお願いいたします。



令和7年度 達成式典謝辞 原文

皆様、本日はご多忙の中、令和七年度 奈良県倫理法人会 達成式典にご臨席賜り、誠にありがとうございます。また、この輝かしい式典を恙なく開催できますこと、心より厚く御礼申し上げます。

ただ今ご紹介いただきました、第九代会長を務めております寺尾俊一でございます。

令和七年度、奈良県倫理法人会に課せられました普及目標は 405 社という高いものでしたが、皆様のたゆまぬご尽力と倫理への深いご理解、そして日々の実践の賜物として、去る 5 月 19 日、見事その目標を達成いたしました。また、本日さらに素晴らしいご報告ができることを大変喜ばしく思っております。なんと、最終的には目標を大きく上回る 415 社の達成となりました。つまり、わずか 1 ヶ月弱の間、目標を達成したあとでも弛むことなく 10 社もの増社を成し遂げた皆様の熱意と行動力に、改めて深く敬意を表します。

加えて、長きにわたる私たちの悲願でありました「全国 47 位」からの脱却も、皆様の力強い後押しによって実現いたしました。それどころか、46 位をも追い抜き、全国 45 位へと大きく躍進することができました。この目覚ましい成果は、奈良県倫理法人会に関わる全ての皆様の情熱と努力の結晶に他なりません。

さらに、奈良中央準倫理法人会が念願の 100 社に到達され、来る 6 月 22 日には設立式典が盛大に執り行われる運びとなりました。この慶事に際し、ご尽力された皆様に心よりお祝い申し上げます。

私はこの 5 年間、奈良県倫理法人会普及拡大委員長、幹事長、そして 3 年間の会長という重責を担ってまいりました。倫理法人会の活動を一本の樹木に例えるならば、「花や実」とは一体何なのか——その問いを常に胸に抱きながら活動してまいりました。その捉え方は様々かと存じますが、私が奈良県会長職を拝命した 3 年前、「花や実」とはすなわち、全国に約 750 ある単会、そして奈良県においては 4 つの単会そのものであると位置づけました。

各単会こそが主役であり、それぞれが美しく誇らしく花を咲かせ、単会長が光り輝く存在であってほしい。その強い信念のもと、県会長としての運営に取り組んでまいりました。そして、県の役員の役割とは、樹木における「根」のような存在——目には見えないところでしっかりと養分を吸収し、それを各単会へと絶えず送り届け続ける存在であると考え、この 3 年間、その役割を徹頭徹尾、全うしてまいりました。

本日、こうして各単会が見事に花を咲かせ、豊かな実を結び、その美しい姿を誇らしげに咲き誇っているのを目の当たりにし、深い感慨を覚えずにはられません。

もちろん、これらの成果は決して平坦な道のりではありませんでした。三年前、自身の力不足を痛感しながら県会長という大役を拝命した私は、幾度となく重圧に押し潰されそうになる日々を送りました。「この歳になって、なぜわざわざ茨の道を選ぶのか」と自問し、会社経営に専念していた方がどれほど気が楽だっただろうかと感じたことも一度や二度ではありません。

しかし、今振り返れば、この重責を担わせていただいたからこそ見ることができた、かけがえのない景色がありました。それは、人の絆の尊さ、温かい思いが連鎖していく力、そして何よりも「自己革新」という名の貴い果実でした。会長職は、私にとって何物にも代えがたい、貴重な学びの場となりました。

今回の 415 社という素晴らしい達成は、決して終着点ではなく、来る 500 社、そして 40 周年に向けた 10 単会・1,000 社体制という壮大な目標への確かな出発点に他なりません。私

たちの活動は、単なる数の追求ではなく、倫理の実践を通じて社会に希望の光を灯す「世直し」そのものです。企業倫理の実践を通して、家庭、地域、社会、そしてこの国全体をより良い方向へと導いていく——それこそが、私たちに託された揺るぎない使命であります。

今、自らの役割を終えようとするこの大切な節目に、私は次の世代へ何を残すべきかを真剣に考えております。倫理のお役目とは、決して個人の所有物ではなく、一時お預かりしているもの。後につく人々のために、しっかりと畑を耕し、空気を澄ませ、未来の子どもたちが安心して生きていける美しい「地球をきれいにする」——それは、私たちの活動が目指す象徴的な営みに他なりません。

「命のバトン」を繋ぐために私たちは生きているのだとするならば、倫理法人会の活動もまた、その尊いバトンを繋ぐ一環として捉えるべきでしょう。これまで倫理の灯火を消すことなく大切に受け継いでくださった歴代の先達に、心からの感謝を捧げるとともに、その温かい火をしっかりと次世代へと手渡していく責任を、今改めて強く感じています。

幸いなことに、次なる奈良県倫理法人会のリーダーには、優れた資質と燃えるような熱意を持った素晴らしい方々が名を連ねておられます。私は一人の応援者として、これからも微力ながら全力で支え続けていく所存です。

結びになりますが、これまで賜りました皆様の温かいご厚情と力強いご支援に、改めて心より深く感謝申し上げます。今後とも、この倫理の道を皆様とともに歩み続けられることを切に願い、私の謝辞とさせていただきます。

三年間、本当にありがとうございました。



奈良県倫理法人会設立25周年記念式典 謝辞

奈良県倫理法人会は本日1月21日を持ちまして、設立から25周年を迎えます。これもひとえに皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

25年前に奈良県に倫理の学びを教え伝えて下さった倫理研究所の皆様には感謝の念に堪えません。大阪府より伝えに来ていただいたとうかがっておりますが、奈良の地に倫理の種を蒔いて下さった先人の方々、そして25年間の歴史を弛むことなく育てて下さった歴代の奈良県倫理法人会会長をはじめ、陰に日向に支えて下さった多くの関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

今日があるのも、先人の皆様が「世直し」の精神の元、夢を追い、どんな苦難に直面しても一歩も引かず諦めなかった懸命な普及活動の賜物です。私共はこの節目に今一度元来の「世直し」の精神に立ち返る決意です。具体的には自助自立の精神と矜持を高めること、国民それぞれが道徳的背景、つまりモラル・バックボーンを確立することにあります。そのために会員一丸となって「人は鏡」の実践を推し進めてまいります。同時に倫理全般の学びをより一層深め、普及活動に努める所存です。その中で自己変革に励む実践者を養成していきたいと存じます。皆様方には今後とも倍旧のお引き立てを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

現在、日本だけでなく地球規模で人類は様々な問題に直面しています。非常に心が痛むことに、この奈良の地では、元内閣総理大臣の安倍晋三氏が演説中に銃撃されお亡くなりになるという、日本社会を大きく揺るがす事件がありました。また、世界規模では2020年にパンデミックが発生し未だに解決はできていません。2022年にはロシアがウクライナを侵攻し民間人が犠牲となっています。さらに2023年にはイスラム組織ハマスとイスラエルの軍事衝突が始まり、ガザ地区だけで1万8千人以上、その多くが女性と子どもが命を落としています。

他にも、地球温暖化などの環境問題、人口問題、食料問題、エネルギー問題、災害、テロ、国際組織犯罪といった数々の問題は、一国だけの問題ではなく、国境を越えた地球的規模の問題であり、地球上に生きる全人類の生存を脅かしています。このような時代に、私たちはどう生きるべきでしょうか。

ところで、私は最近、物事の本質を見抜く人が少ないように感じます。主体性がなく「メンタルブロック」つまり「できない自分」の言い訳をし、「類は友を呼ぶ」とのごとく似たような人間同士が迎合し、前に進むことをせず、自分の目の前にある抜本的問題から目をそらしています。中には、そういった目の前の問題から逃げるために自分の問題はさておき、いきなり大きな規模の問題に取り組む人たちもいます。

一方、我々が行なっている倫理運動は、丸山敏雄創始者が敗戦後の日本社会で興された「世直しの運動」です。創始者自身が発見された生活法則である「純粹倫理」を世に広め人類に平和と幸福をもたらしたいという熱意で一人立ち上がられたのです。以来、この精神が絶え間なく続いています。倫理ではいかに考え、生きるかを学びます。それも、自分の立身出世や事業の利益のためではありません。脚下照顧と言うように、倫理の学びは、自らの足元にある身近な問題から始まり、倫理で学んだ事柄を自分の身の回り、そして「世のため人のために働かせ広げる」という実践が肝要です。地道な実践を積み重ね、日本という枠だけではなく地球市民として、地球規模の各課題の中で自分ができることに取り組む。創始者の決意である平和と幸福を築くため、日々倫理の実践に励んで参りましょう。

さて、改めて25周年という節目を迎えることができたのは、確かに素晴らしく有難いことであります。しかし、この先の奈良県倫理法人会の未来を考えると、これは1つの中間地点にすぎません。さらに高い目標を遂行するために、この節目を超え30年、40年、50年

と次の世代に絶えることなく託し続けることが今後の目標です。各中間目標を達成するプロセスが適切に実践されているか否かを判断する指標をメルクマールと言います。倫理の実践、拡大においても、メルクマールを意識し、倫理における目標達成のための行動や方法が適切になされているか厳しく判断して進んで参りましょう。そして、また皆様方に成果を発表したいと存じます。

今まで先人たちがたくさんの苦難を乗り越えてきたように、今後、私たちにも様々な苦難が襲ってくることでしょう。しかし、私たちには「苦難福門」「苦難を成長の糧とする」と言う学びがあります。先人たちもこの学びを通して負けずに私たちにバトンを渡して下さいました。私たち奈良県倫理法人会会員一同は、丸山敏雄創始者のご金言と先人たちの実践を決して忘れることなく、一人も脱落することなく、これからも苦難を成長の糧とし、大きく飛躍して参ります。そして我々の生活や事業上の考え方に密着した智恵に溢れたこの「熱き思い」を受け継ぎ、拡大のために活動して参る所存です。

結びになりますが、25年という歴史の中で私共は多くの方々から温かいご支援をいただいてまいりました。最後に、今一度本日ご臨席の皆様、ご関係の皆様にご挨拶申し上げます。心からお願い申し上げます。そして、会員、会員企業の皆様、本日ご参加いただきました皆様の益々の繁栄をご祈念申し上げます。

本日は、誠にありがとうございました。



今月も最後までお付き合いありがとうございました。また、この 3 年間、私の拙い文章をお読みいただき、時に感想まで伝えてくださり感謝の気持ちでいっぱいです。今月にて月次の県会長挨拶は終わりです。来月は、達成式典のご挨拶、また、7月から8月にかけて次年度の新体制に向け奈良県倫理法人会のホームページもフルリニューアルいたします。今後とも奈良県倫理法人会をよろしくお願い申し上げます。

3 年間、本当にありがとうございました。

